

平安京左京八条二坊五町跡
発掘調査報告書

2 0 1 9

株式会社 文化財サービス

例 言

1. 本書は、京都市南区猪熊通八条上る戒光寺町 185、同区西九条戒光寺町 13 で実施した、平安京左京八条二坊五町の発掘調査報告書である。(京都市番号 18H484)
2. 調査は、株式会社清栄コーポレーション(代表取締役社長 清水武善 以下、「清栄コーポレーション」という)の建物建設に伴い実施した。
3. 現地調査は、清栄コーポレーションより株式会社文化財サービス(以下、「文化財サービス」という)に委託され実施した。調査は、大西晃靖、辻 純一(文化財サービス)が担当した。
4. 調査期間は、令和元年5月7日～6月21日である。
5. 調査面積は、226.4 m²である。
6. 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高は、T.P.(東京湾平均海面高度)である。
7. 土層名及び出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
8. 本書の執筆は、辻の指導のもと大西が行った。編集は、大西、野地ますみ(文化財サービス)が行った。
9. 遺跡の写真撮影は大西が行った。出土遺物の撮影は楠華堂(内田真紀子氏)に依頼し、一部田中慎一(文化財サービス)が行った。
10. 調査に係る資料は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
11. 発掘調査及び整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕辰巳陽一、田中慎一、田邊貴教、広瀬八郎、吉岡創平(以上、文化財サービス)、作業員(株式会社京カンリ)

〔整理作業〕赤羽 香、上野恵己、植村明男、神野いくみ、甲田春奈、多賀摩耶、西尾知子、野地ますみ、溝川珠樹、望月麻佑、森下直子、本間愛子、若山美帆、吉川絵里(以上、文化財サービス)
12. 自然科学分析(珪藻分析、花粉分析、種実遺体分析、樹種同定)については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
13. 出土遺物の年代観は、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年に依った。
14. 現地調査・整理作業において、下記の方々にご教示をいただいた。記して感謝いたします。(敬称略)

國下多美樹、木許 守(龍谷大学)、浜中邦弘(同志社大学)、鈴木久男(京都産業大学)、佐藤亜聖(元興寺文化財研究所)、徳留大輔(出光美術館)、李 炳 炎(潮州窯博物館)、江 建 新(景德鎮市陶瓷考古研究所)、渡邊恭章(総本山御寺泉涌寺執事、戒光寺住職)、西谷 功(総本山御寺泉涌寺心照殿)

目次

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 整理作業・報告書作成	2

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境	5
2 既往の調査	6

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序	11
2 検出遺構	11
(1) 第1面	11
(2) 第2面	14
(3) 第3面	20
(4) 第4面	21
3 出土遺物	
(1) 土器・陶磁器類	
a 古墳時代	24
b 平安時代	24
c 平安時代末～鎌倉時代初頭	25
d 鎌倉時代～室町時代	28
e 江戸時代	30
(2) 瓦類	
a 平安時代	33
b 鎌倉時代	33
(3) 金属製品	35

第Ⅳ章 まとめ

1 平安京以前	36
2 平安時代	36
3 平安時代末～鎌倉時代初頭	36
4 鎌倉時代～室町時代	38
5 江戸時代	39

附章 自然科学分析

平安京左京八条二坊五町の古環境および植物利用の検討	45
---------------------------	----

図版目次

- 図版 1 第 1 面平面図 (1 : 150)
- 図版 2 第 2 面平面図 (1 : 150)
- 図版 3 第 3 面平面図 (1 : 150)
- 図版 4 第 4 面平面図 (1 : 150)
- 図版 5 遺構 1. 第 1 面全景 (東から)
2. 土坑 46 (北から)
3. 土坑 64、65、88 (南から)
4. 瓦列 91 (南から)
5. 溝 90 (東から)
- 図版 6 遺構 1. 第 2 面全景 1 (室町時代 東から)
2. 第 2 面全景 2 (鎌倉時代 東から)
- 図版 7 遺構 1. 井戸 100 (東から)
2. 溝 110 上層 (南東から)
- 図版 8 遺構 1. 溝 101 (東から)
2. 溝 101 断面 (西から)
3. 溝 122 (東から)
4. 溝 122 断面 (西から)
- 図版 9 遺構 1. 溝 125 (南から)
2. 溝 125 断面 (南から)
- 図版 10 遺構 1. 井戸 95 (西から)
2. 井戸 121 (北から)
- 図版 11 遺構 1. 第 3 面全景 (東から)
2. 池 120 (南から)
- 図版 12 遺構 1. 泉 130 (南から)
2. 泉 130 東西セクション断面 (南から)
3. 泉 130 南北セクション断面 (西から)
- 図版 13 遺構 1. 東西セクション西断面 (南から)
2. 東西セクション東断面 (細部 南から)
3. 東西セクション東断面 (東端部 南から)
- 図版 14 遺構 1. 南北セクション南断面 (西から)
2. 南北セクション北断面 (西から)
- 図版 15 遺構 1. 溝 110 下層 (南から)
2. 溝 110 セクション断面 (南から)
3. 溝 110 断面 (北壁 南東から)
- 図版 16 遺物 1. 出土遺物 1 (古式土師器)
2. 出土遺物 2 (平安時代)

図版17	遺物	1. 出土遺物3 (4層出土土師器)
		2. 出土遺物4 (池120東盛土、泉130、4層)
図版18	遺物	1. 出土遺物5 (溝110下層)
		2. 出土遺物6 (溝125)
図版19	遺物	1. 出土遺物7 (室町時代)
		2. 出土遺物8 (平安時代軒瓦1)
図版20	遺物	出土遺物9 (平安時代軒瓦2)
図版21	遺物	出土遺物10 (鎌倉時代軒瓦、白磁、金属製品)

挿図目次

図1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図2	調査経過写真	3
図3	調査地地区割図 (1 : 150)	4
図4	既往調査位置図 (1 : 5,000)	7
図5	調査区北壁 (調査区西半地区) 断面図 (1 : 80)	12
図6	調査区西壁、北壁 (調査区東半地区) 断面図 (1 : 80)	13
図7	溝101、122平面断面図 (平面 1 : 80 断面 1 : 50)	15
図8	溝110平面断面図 (1 : 50)	16
図9	溝125平面断面図 (1 : 50)	17
図10	井戸100平面断面図 (1 : 40)	18
図11	井戸95、121平面断面図 (1 : 40)	19
図12	池120東西セクション南面断面図 (1 : 40)	22
図13	池120南北セクション西面断面図 (1 : 40)	23
図14	出土遺物1 (古墳時代 1 : 4)	24
図15	出土遺物2 (平安時代 1 : 4)	25
図16	出土遺物3 (平安時代末～鎌倉時代初頭 1 : 4)	26
図17	出土遺物4 (鎌倉時代～室町時代 1 : 2、1 : 4)	29
図18	出土遺物5 (江戸時代 1 : 4)	31
図19	出土遺物6 (瓦 平安時代 1 : 4)	32
図20	出土遺物7 (瓦 鎌倉時代 1 : 4)	34
図21	池120東盛土出土瓦 (二次的に火を受けたもの)	37
図22	八条二坊五町 鎌倉～室町時代遺構平面図 (1 : 1,000)	
	平成18年度試掘調査トレンチと合成	39

表目次

表 1	既往調査一覽	9
表 2	遺構概要表	11
表 3	遺物概要表	24
表 4	遺物觀察表	41

第 I 章 調査の経緯

1 調査に至る経緯

京都市南区猪熊通八条上る戒光寺町及び西九条戒光寺町に、株式会社清栄コーポレーション（以下、「清栄コーポレーション」という）による建物建設が予定された。建築予定地は、平安京左京八条二坊五町に当たり、当宅地は平安時代後期には藤原顕長が邸宅を構え、平安時代末には平重盛の邸宅「小松殿」の推定地となっている。鎌倉時代には、町名の由来となる律宗寺院である戒光寺が造営された。

建築工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）により試掘調査が実施されることとなった。試掘調査は、建設予定地の3箇所に調査区を設定して実施された。試掘調査の結果、平安時代～江戸時代までの複数の遺構面が確認されたことから、225㎡の調査区を設定し発掘調査が実施されることとなった。調査の進展に伴い、調査区北西部を1.4㎡拡張し、最終的な調査面積は226.4㎡となった。発掘調査は、清栄コーポレーションから株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託された。

2 調査の経過

発掘調査は、近隣の方に調査の周知を行った後、4月24日に調査区の設定を行い、5月7日から重機により現代盛土（1層）及び近代整地土（2層）の掘削を開始した。現地高から約0.5m掘り下げた段階で近世後半の遺構面を検出し、この面を第1面として人力での調査に切り替え攪乱

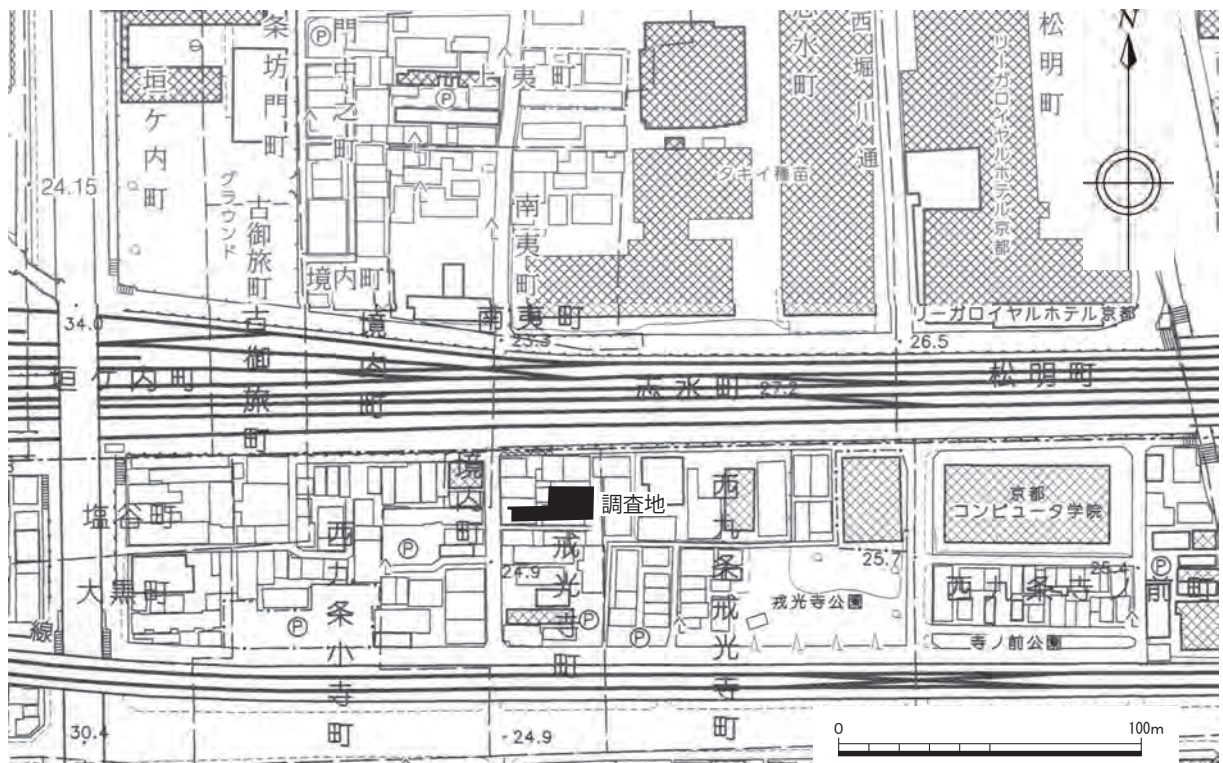


図1 調査位置図（1：2,500）

掘削及び遺構検出を開始した。調査は3層上面、4・5層上面、5・6層上面、6・8・9層上面で行い、平安時代後期、平安時代末～鎌倉時代初頭、鎌倉時代～室町時代、江戸時代後半の遺構を検出した。各層上面での調査・記録を終え、以深の遺構面まで掘り下げる際には基本的に人力による掘り下げを行ったが、3層の掘り下げ時には試掘坑や攪乱での断面観察により部分的に0.5 m程の層厚であることを確認したことから、文化財保護課と協議の上で重機による掘り下げを行った。重機による掘り下げ時には層中に含まれる遺物の採集に努めた。

各層上面で検出した遺構は、写真撮影及び図面作成により記録作業を行った。図面作成は、トータルステーションによる取り込み、手測りによる実測、写真測量を併用した。全ての記録作業終了後、6月19日～21日にかけて埋め戻し作業及び資材等撤収作業を行い、現地調査を終了した。

調査期間中に近隣住民、九条弘道小学校5・6年生の生徒及び教員の方々による現地見学の依頼があり、6月13日に同校6年生の生徒及び教員、6月14日に5年生の生徒及び教員と近隣住民の方々の現地見学を受け入れた。

現地調査においては、各面の遺構検出時及び遺構完掘時に文化財保護課の臨検を受け、今調査の外部検証委員である龍谷大学教授國下多美樹氏、同志社大学准教授浜中邦弘氏に現地で検証いただき、調査に対する適切な助言をいただいた。

測量基準点の設置と地区割

測量基準点は、VRS測量により調査地内にK. 1、K. 2の2点を設置し、その2点からトータルステーションによりK. 3を設置した。基準点測量の成果は、以下のとおりである。

K. 1 X = -112,568.985 m Y = -22,719.703 m H = 24.932 m

K. 2 X = -112,573.471 m Y = -22,747.838 m H = 24.809 m

K. 3 X = -112,559.156 m Y = -22,719.093 m H = 25.015 m

検出した遺構の管理や遺物取上の単位とするため、調査区に世界測地系に基づき3 m四方のグリッドを設定した。Y軸にアラビア数字を西から東に、X軸にアルファベットを北から南に順に付し、数字とアルファベットの組み合わせで地区名を設定した。地区名は、3 mグリッドの北西交点で設定した。

3 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業及び報告書作成を行った。整理作業は、写真・図面の整理と出土遺物の整理を並行して行った。遺物の整理は、洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った後、報告書の執筆及び編集作業を行い、報告書を作成した。執筆は調査を担当した大西晃靖、編集作業は野地ますみが担当し、その他整理業務は当社社員が分担して行った。遺物写真の撮影は、当社社員の他、写房楠華堂（内田真紀子氏）に依頼した。



1. 調査前（南西から）



2. 重機掘削作業（西から）



3. 第1面遺構掘削作業（南西から）



4. 井戸100調査経過（東から）



5. 池120調査経過（北西から）



6. 5層掘削作業（北西から）



7. 埋め戻し作業（南西から）



8. 調査完了後（南西から）

図2 調査経過写真

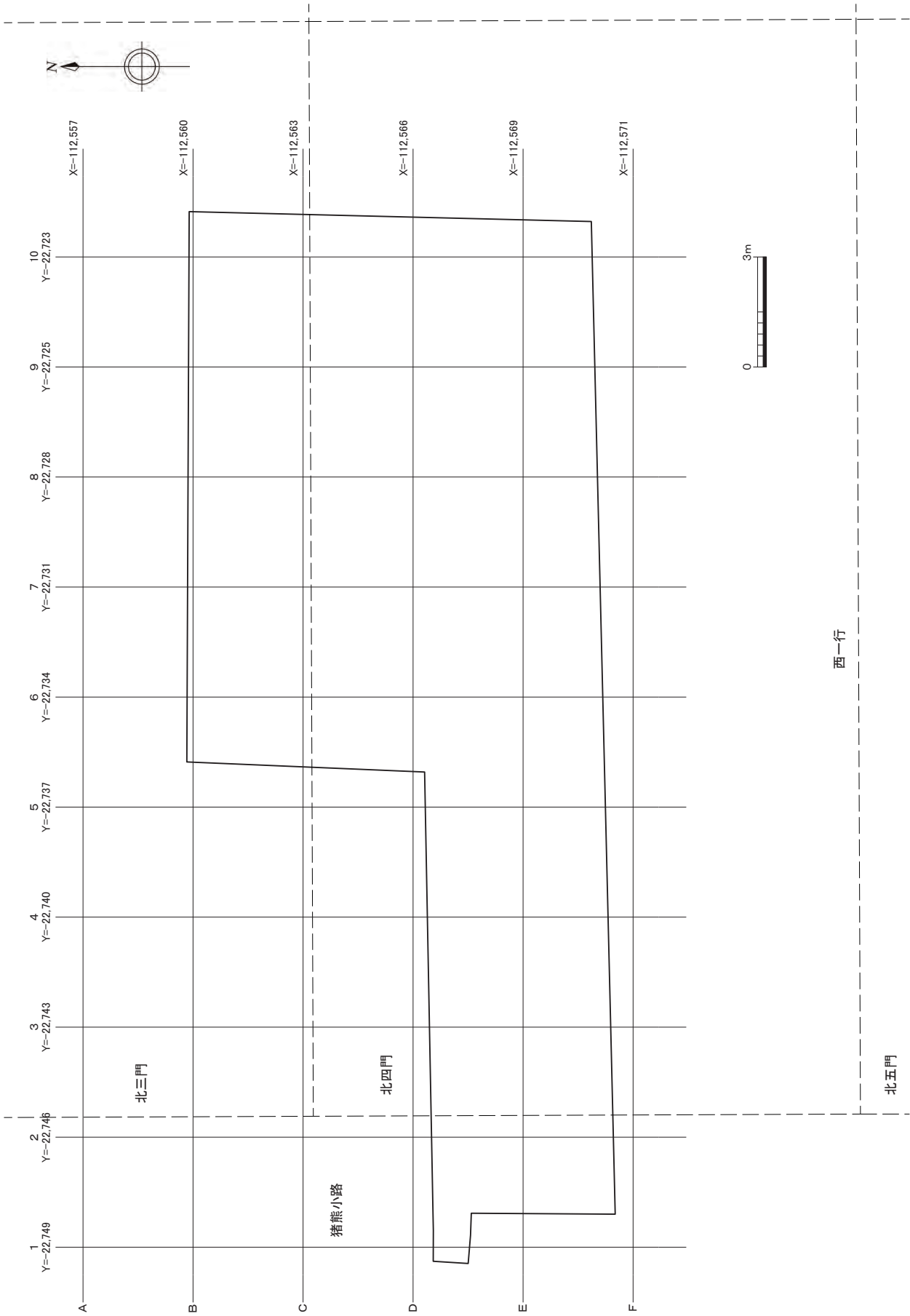


图3 調查地地区割图 (1 : 150)

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境

調査地は、北東から南西に向かって傾斜する鴨川扇状地に位置する。平安京条坊では左京八条二坊五町にあたり、北には平安京の公設市場であった東市があり、南西には左京九条一坊九～十六町を占有する教王護国寺（東寺）が存在する。平安時代末には、調査地の周辺は八条一坊の南半を占める平清盛の西八条第、八条三坊五町に平頼盛、八条四坊五町に平宗盛など平氏一門が邸宅を構えることになる。

本調査地は、左京八条二坊五町の西部に位置し、四行八門制では西一行、北三・四門に相当する。以下に、本宅地の利用状況を時代毎に記述する。

平安時代

平安時代前期～中期にかけて本宅地の利用状況は明らかではない。平安時代後期には、中納言藤原顕長が邸宅を構える。『本朝世紀』仁平元年（1151）6月2日条に藤原顕長の邸宅が火事により焼失したと記載され、その後顕長は本宅地東隣の左京八条二坊十二町に転居している。顕長の転居後は、『拾芥抄』東京図の本宅地位置に「小松殿」と記されていることから、内大臣平重盛が邸宅を構えたと想定される。

鎌倉時代～室町時代

鎌倉時代前半の寛喜元年（1229）、調査地周辺に戒光寺が創建される。現在、戒光寺は泉涌寺塔頭寺院の一つとして京都市東山区の泉涌寺山内町に所在するが、創建当初は『北京戒光律寺古記』によれば「九洛之南八条以北」に所在したといい、寺域の詳細は不明であるが調査地周辺の町名に戒光寺の名が残されている。戒光寺は、後堀川天皇により発願され、中国江南の諸寺院に24年間遊学した曇照房浄業（字は法忍）によって創建された。戒光寺は宋式仏道実践を行う道場となり、現在戒光寺本堂に安置される「丈六釈迦」と呼ばれる像高5.42mの釈迦如来立像は様式研究から「宋風」要素が強いと指摘されている。

また、戒光寺は創建以来幾度かの兵火に見舞われている。南北朝期の観応の擾乱の際には、桃井直常の陣所となり文和四年（1355）に罹災している⁽¹⁾。室町時代には応仁の乱（1467）によって罹災し、さらには大永七年（1527）に勃発した桂川原の戦いを皮切りに、以後享禄・天文年間に起った数々の騒乱により堂宇・塔頭が悉く退転する状態となったという⁽²⁾。従来、戒光寺の退転は応仁の乱での罹災によるものとされていたが、実際は16世紀前半に発生した数々の騒乱によるものであったという⁽³⁾。頻発する騒乱による影響を受け、宋式仏教儀礼の実践は困難となっていく。天文17年（1548）の戒光寺宛「後奈良天皇女房奉書」には、儀礼不履行と泉涌寺との間に起った本末訴訟の判決を理由に、応仁の乱で罹災した泉涌寺仏殿再建のために戒光寺法堂を移築すべきとの旨が記されている。また天文法華の乱により焼失した本圀寺再建事業に伴って、本圀寺からも戒光寺法堂の移築が所望されていたようであり⁽⁴⁾、いずれかに戒光寺の諸堂は移築されたようである。

弘治三年（1557）には再興のための勸進疏が作成され仏殿が再建されるが、その後、天和三年（1683）出版の黒川道祐『雍州府志』によれば、年は不明であるが「小川一條ノ北」に移転したとされる。この移転に関して、年未詳4月23日付「誓願寺文書」に、伊勢貞興が知行地である西九条繩之内に所在する戒光寺仏殿を誓願寺に寄進したとあり⁽⁵⁾、これは天正元年（1573）4月3日の織田信長による上京地区焼き討ちにより焼失した誓願寺再建事業に伴うものの可能性が高い。以後、戒光寺は豊臣秀吉が行った京都再編成事業により「京極ノ三條通」（『雍州府志』）に移転させられ、江戸時代前半には泉涌寺山内に移転し現在に至っている。

2 既往の調査（図4、表1）

左京八条二坊域での既往調査は七条通や京都駅周辺の北及び東部に集中し、本調査地を含む南西部での実施はさほど多くはない。以下に、各時代における既往調査の概要を記述する。

平安京以前

平安京以前では遺構の検出は少なく、十五町では古墳時代の流路（調査19）、古墳時代後期の建物及び柱穴（調査20）が検出されている。その他では、複数の調査で旧堀川の氾濫堆積である砂礫層から弥生時代～古墳時代の土器が出土している。

平安時代

平安京造営以降は開発が進み、宅地関連遺構や条坊・区画関連遺構が増加してゆく。

平安時代前期では、宅地関連遺構として一町で井戸（調査2）、井戸・柵列・ピット（調査4）、十二町で遺物包含層（調査11）、十四町で土坑（調査12）、土坑・溝（調査14）、池状遺構（調査16）が検出されている。条坊関連の遺構としては、一町で大宮大路東築地内溝・北四～五門境界（調査4）、十町で油小路西側溝及び路面・西四行四～五門境界の柵列（調査10）の検出がある。その他に、十五町では流路跡（調査18）が検出されている。

平安時代中期には遺構数が減少する。九町で前期～中期の土坑・ピット（調査9）、十五町で園池（調査18）が検出されている。

平安時代後期には遺構数が増加し、この時期に宅地開発が進められたと想定される。一町で土坑（調査3）、三町で井戸・土坑・整地層（調査6）、十町で井戸・柵列・柱穴・土坑（調査10）、十四町で井戸・柱穴・土坑（調査12）、溝（調査14）、池・地業・地鎮遺構（調査15）、井戸・柱穴・土坑（調査16）、十五町で井戸・柱穴・土坑（調査18）、整地層（調査19）、十六町で池状落ち込み・井戸・土坑・溝が検出されている。条坊・区画関連の遺構は、一町で七条大路北側溝（調査1）、七条大路南側溝・大宮大路東築地内溝（調査2）、九町で平安～江戸時代にかけての油小路側溝及び路面（調査8）、十四町で平安時代後期～鎌倉時代中期にかけての西三行に当たる溝（調査12）、十四・十五町で平安時代後期～鎌倉時代にかけての八条坊門小路南北側溝及び路面（調査17）、十五町で平安後期～鎌倉時代にかけての四行八門制に規制される溝（調査19）が検出されている。

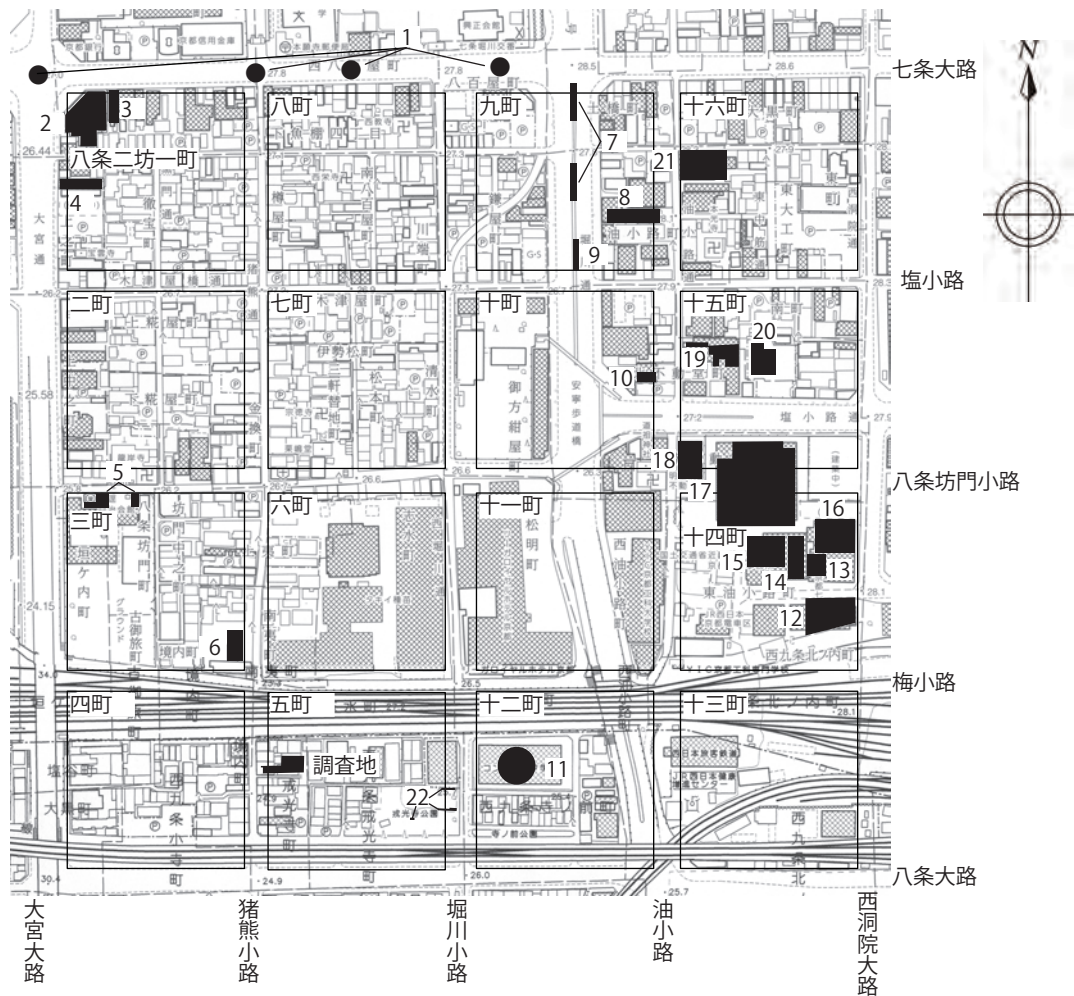


図4 既往調査位置図 (1 : 5,000)

鎌倉時代～室町時代

鎌倉時代では、引き続き遺構は多く検出され、平安時代後期から継続するものも多い。一町で井戸・礎石建物・土坑・埋甕・溝 (調査2)、建物跡・土坑 (調査3)、三町で井戸 (調査6)、九町で井戸・柱穴・土坑 (調査8)、十四町で井戸・土坑・柱穴 (調査11)、井戸・柱穴・土坑 (調査12)、井戸・土坑 (調査13)、井戸 (調査14)、柱穴・土坑 (調査15)、井戸・竈・柱穴・土坑・埋甕・炉 (調査17)、十五町で建物跡・柱穴・土坑・溝が検出されている。東隣の八条三坊では、鎌倉時代に铸造関連の資料が増加するが、二坊東部にあたる十四町でも铸造関連遺構や遺物が確認されている。条坊・区画関連の遺構は、十四・十五町で八条坊門小路南北側溝 (調査17)、十五町で西二行北三～四門を区切る堀・西二行北四門の北限を区切る堀 (調査20) が検出されている。

室町時代では、宅地関連遺構として一町で井戸・土坑 (調査2)、整地層・溝・ピット・土坑 (調査4)、三町で柱穴 (調査5)、井戸・土坑 (調査6)、十町で溝・土坑・铸造関連遺構及び遺物 (調査10)、十四町で井戸・土坑 (調査13)、土坑・木棺墓・犬墓 (調査14)、井戸・木棺墓・溝 (調査15)、井戸・柱穴・土坑・墓・掘立柱建物・溝 (調査16)、井戸・柱穴・土坑・墓 (調査17)、十五町で井戸・柱穴・土坑・炉 (調査18)、井戸・肥溜・柵・建物・土坑・埋甕・炉 (調査19)、

建物跡・柱穴・土坑・溝（調査20）が検出されている。十・十四町では鎌倉時代から引き続き铸造関連遺構がみられる。また十四町では木棺墓や犬墓が検出され、墓地化していく様相が確認できる。条坊・区画関連遺構は、一町で大宮大路東築地内溝（調査2）、五町で堀川小路西側溝（調査22）、十町で油小路西側溝及び路面（調査10）、十四・十五町で八条坊門小路路面（調査17）、十五町で四行八門制に規制される溝・北三～四門境界の柵及び路面（調査19）、天正地割による東中筋通の東側溝及び路面（調査20）が検出されている。調査22で検出された堀川小路西側溝からは鎌倉～室町時代の瓦が多く出土し、戒光寺の伽藍造営による側溝の整備が行なわれたと想定されている。

江戸時代

宅地関連遺構として一町で柵・井戸（調査1）、井戸・铸造関連遺構（調査2）、三町で礎石・土坑・土間・溝・礫敷・瓦溜・瓦列・埋納土坑（調査5）、整地層（調査6）、十町で整地層（調査10）、十四町で耕作溝（調査12）、溝・铸造関連遺物（調査13）、井戸・土坑・堀・溝・耕作土層（調査17）、耕作土層・井戸・土坑・溝（調査18）、十五町で耕作土層（調査19）、柵・建物・土坑・溝・耕作溝（調査20）、十六町で井戸・土倉地業・土墳墓（調査21）が検出されている。八条二坊東部の十四・十五町では耕作土層や耕作溝が検出され、耕地化していく様相が確認できる。十六町では土墳墓、十四町では梵字・経文の記された墨書土器の出土など墓地や寺院に関連するとみられる遺構や遺物が検出されている。また、引き続き铸造関連の遺構や遺物も検出されている。

註

- 1 「烟田文書」『大日本史料』六之十九、「太平記」卷三十三 京軍事『太平記』三 岩波書店 1960年
- 2 戒光寺再興勸進疏「堂宇并塔頭以下悉以令退転」『大日本仏教全書』一一六 526 P
- 3 「洛中洛外図に描かれた戒光寺」『東京大学史料編纂所付属 画像史料解析センター通信』第85号 西谷 功 2019年 21 P
- 4 「泉涌寺文書」九六・一〇三・一〇四『泉涌寺史 資料編』法藏館 1984年
- 5 誓願寺文書九二「就今度誓願寺回祿、知行分城州西九条繩之内戒光寺仏殿事、令寄進当寺之上者」『誓願寺文書の研究—戦国・京都・総本山—』岩田書店 2017年 192-193P、「誓願寺の歴史十一」『同上』92-93 P

参考・引用文献

『平安京提要』1994年

「洛中洛外図に描かれた戒光寺」『東京大学史料編纂所付属 画像史料解析センター通信』第85号 西谷 功 2019年

表1 既往調査一覧

	調査位置	調査成果概要	掲載文献
1	左京七条一・二坊、東市、七条大路	砂礫層より弥生土器、古墳時代の土器が出土。 平安後期の七条大路北側溝の検出。 鎌倉～室町時代の溝、江戸時代の柵、井戸等を検出	『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011年
2	左京八条二坊一町	砂礫層より古墳時代の土器が出土。 平安後期～鎌倉時代の七条大路南側溝、大宮大路東築地内溝、室町時代の大宮大路東築地内溝の検出。 平安前期の井戸、平安後期～鎌倉時代の井戸・礎石建物・土坑・埋甕・溝、室町時代の井戸・土坑、江戸後期～明治時代の井戸・鑄造関連遺構の検出。	『平安京左京八条二坊一町（東市外町）発掘調査報告書—龍谷大学大宮学舎清風館建設に伴う調査—』龍谷大学 2009年
3	左京八条二坊一町	平安後期～室町時代の七条大路南側側溝の検出。 平安後期の土坑、鎌倉～室町時代の建物・土坑の検出。	平安京調査会、1976年 ※未報告
4	左京八条二坊一町	平安時代の大宮大路東築地内溝・北四～五門境界の検出。 平安前期の井戸・柵列・ピット、平安～室町時代の整地・土取穴・ピット・溝、中世～近世の整地・土坑・ピット・溝の検出。	『平安京左京八条二坊一町（東市外町）発掘調査報告書—龍谷大学大宮学舎白亜館建設に伴う発掘調査—』龍谷大学 2011年
5	左京八条二坊三町	安土桃山時代末期の柱穴、江戸初期の耕作土層、江戸時代の礎石・土坑・土間・溝・礫敷、江戸後期～近代の瓦溜・瓦列・土坑・埋納土坑の検出。	『平安京左京八条二坊三町跡』埋文研発掘調査報告 2006-11 埋文研 2006年
6	左京八条二坊三町	平安末期の井戸・土坑、平安時代の整地層、鎌倉時代の井戸、室町時代の井戸・土坑・溝・北六～七門境界、安土桃山時代の土坑・溝、江戸時代の整地層の検出。	『平安京左京八条二坊三町一南夷町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』イビソク京都市内遺跡調査報告 第11輯 イビソク 2014年
7	左京七条二坊十一・十二町、八条二坊九町、北小路	砂礫層から弥生～古墳時代の土器が出土。 平安前期の北小路両側溝・路面、平安中期以降の西二～三行境界道路の検出。 平安後期～鎌倉時代の土坑、江戸時代以降の井戸の検出。	「7 平安京左京七条二坊・八条二坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1988年
8	左京八条二坊九町	平安～近世の油小路路面・側溝の検出。 平安時代の整地層・柱穴・土坑、鎌倉～室町時代の井戸・柱穴・土坑の検出。	「8 平安京左京八条二坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1988年
9	左京七条二坊九・十・十一町、八条二坊九町	弥生後期の落ち込み溝、古墳時代包含層の検出。 平安前期の左女牛小路南側溝・西二～三行境界、平安後期の西二～三行境界ピット列、平安中期～後期の西二～三行境界道路敷、鎌倉前期の七条坊門小路北側溝・西一行北一～二門境界溝・西一行北三～四門境界溝の検出。 平安前期～中期の土坑・ピット、平安時代の井戸・土坑・ピットの検出。	「8 平安京左京七条二坊・八条二坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1989年
10	左京八条二坊十町・油小路	平安時代の油小路西側溝・路面・西四行北四～五行境界柵列、平安末～鎌倉時代の油小路西側溝、室町時代の油小路西側溝・路面の検出。 平安後期の井戸、平安時代の柵列・柱穴・土坑、平安末～鎌倉時代の井戸・土坑・溝、室町時代の土坑・溝・鑄造関連遺構及び遺物、近世の整地層の検出。	「15 左京八条二坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1984年
11	左京八条二坊十二町	平安前期の包含層、鎌倉～室町時代の井戸・土坑・柱穴の検出。 平安前期の「酒」記銘の土器出土。	「第6章 平安時代 南区 425 西九条寺ノ前町遺跡（左京八条二坊）」『史料 京都の歴史 第2巻 考古』京都市 1983年
12	左京八条二坊十四町	砂礫層から弥生時代～古墳時代の土器が出土。 平安後期～鎌倉中期の西三行にあたる溝の検出。 平安前期の土坑、平安時代の柱穴・土坑、平安後期～鎌倉中期の井戸・柱穴・土坑など、鎌倉後半～室町前期の井戸・柱穴・土坑、室町後期の柱穴・溝、江戸前期の井戸・土坑・溝、近世の耕作土層・溝の検出。	「4 平安京左京八条二坊」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1997年
13	左京八条二坊十四町	平安後期の溝、鎌倉～室町の井戸・土坑、江戸の溝・鑄造関連遺物の検出。	「7 平安京左京八条二坊2」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1998年
14	左京八条二坊十四町	平安前期の土坑・溝、平安後期の溝、鎌倉の井戸、室町前半の土坑・犬墓、平安後期～江戸の溝、室町～江戸の墓の検出	「5 平安京左京七条二坊」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2002年
15	左京八条二坊十四町	平安末の池・石敷遺構（地業）・土坑（地鎮）、鎌倉の柱穴・土坑、室町前期～中期の井戸・墓・溝、桃山時代の墓の検出。	「6 平安京左京八条二坊1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1999年

	調査位置	調査成果概要	掲載文献
16	左京八条二坊十四町	北二～三門界柵列の検出。 平安前期の池状遺構、平安後期～室町時代の井戸・柱穴・土坑・墓・掘立柱建物・溝、幕末の地鎮土坑・土坑・木樋暗渠の検出。 鎌倉～南北朝の鑄造関連遺物、江戸後期の墨書土師皿（梵字・経文）の出土	「6 平安京左京八条二坊1」 『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1998年
17	左京八条二坊十四・十五町	平安後半～鎌倉時代の八条坊門小路両側溝・八条坊門小路路面、鎌倉後半～室町時代の八条坊門小路両側溝、室町前半の八条坊門小路路面の検出。 鎌倉後半～室町時代の井戸・竈・柱穴・土坑・埋甕・炉、室町前半の井戸・柱穴・土坑・墓、江戸後半以後の井戸・土坑・堀・溝など、江戸の耕作土層の検出。	「7 平安京左京八条二坊2」 『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1999年
18	左京八条二坊十五町、八条坊門小路、油小路	平安中期の園池、平安後期～鎌倉の井戸・柱穴群・土坑・炉、室町の井戸・柱穴群・土坑・炉、江戸の耕作土層、近世の井戸・土坑・溝の検出。 平安前期の流路の検出。	『平安京左京八条二坊十五町』株式会社日開調査設計コンサルタント文化財調査報告書第1集 日開調査設計コンサルタント 2007年
19	左京八条二坊十五町	古墳時代の流路の検出。 平安後期～鎌倉時代の四行八門制に規制される柵、室町時代の四行八門制に規制される溝・北三～四門界柵・路面（辻子）の検出。 平安中期以前の柵・土坑、平安後期～鎌倉時代の井戸・柵・建物・土坑、平安時代の整地層、室町時代の井戸・肥溜・柵・建物・土坑・埋甕・炉、江戸時代の耕作土層の検出。	『平安京左京八条二坊十五町跡』埋文研発掘調査概報 2003-17 埋文研 2004年
20	左京八条二坊十五町	砂礫層より弥生～古墳時代の土器が出土。 鎌倉後期～室町前期の西二行北三～四門を区切る柵（塀）・西二行北四門の北限を区切る柵（塀）、天正地割による「東中筋通」の路面・東側溝の検出。 古墳後期の建物・柱穴、鎌倉後期～室町前期の建物・柱穴群・土坑・溝、安土桃山～江戸前期前葉の建物・柱穴群・土坑・溝、江戸前期中葉～末の柵（塀）・建物・土坑・溝、江戸中期～後期初の柱穴群・土坑・溝、江戸後期前葉の土坑・溝、江戸後期後葉の建物・柱穴・土坑・溝、近世の耕作土層の検出。	『平安京左京八条二坊十五町跡』国際文化財株式会社 2016年
21	左京八条二坊十六町	平安時代の池状落込・井戸・土坑・溝、鎌倉～室町時代の井戸・土坑・ピット、江戸時代の井戸・土倉（地業基礎）・土坑墓の検出。	「15 平安京左京八条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1991年
22	左京八条二坊五町	鎌倉～室町時代の堀川小路西側溝の検出 湿地状堆積の検出 鎌倉～室町時代の瓦類多く出土	「Ⅲ-1 平安京左京八条二坊五町跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』保護課 2007年

埋文研→財団法人京都市埋蔵文化財研究所、保護課→京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

第三章 調査成果

1 基本層序（図5・6）

本調査地の現標高は25.0 m前後で、戦後の造成によりほぼ平坦な地形である。

1層 現代の整地層。層厚0.3～0.5 m。調査区全域に分布する。

2層 にぶい黄褐色、黄褐色砂泥による近代整地層である。層厚約0.2 m。調査区全域に分布する。

3層 灰黄褐色、にぶい黄褐色砂泥による整地層である。層厚0.2～0.4 m。調査区全域に分布する。

本調査は3層上面より開始し、近世後半の遺構を検出した。室町時代後半の遺物を包含する。

4層 調査区東半に分布する池120の埋め戻し土である。上下2層に区分され、上位を4 a層、下位を4 b層とする。4 a層は黄褐色砂泥、4 b層は黒褐色、暗褐色シルトである。両層の遺物に時期差は無く、平安時代末～鎌倉時代初頭の遺物を包含する。

5層 黄灰色砂礫、暗灰黄色細砂による平安時代後期～末の整地層である。調査区西半に分布する。池120の西陸部を構築するための盛土である。平安時代の遺物とともに古墳時代の遺物を包含することから、後述する8層砂礫層を用いて整地を行ったと考えられる。

6層 6 a、6 b層の2層に区分される。6 a層は黒色シルト、黒褐色シルトで調査区中央付近に分布する。層厚0.2 m。6 b層は灰黄褐色シルト、黒色シルト、黄灰色シルトブロックを大量に含む黒褐色シルト、黒褐色シルトブロックを多く含む黄灰色シルトなど斑土状の層であり、調査区東部に分布する。層厚0.1～0.15 m。遺物の出土は無く、堆積年代の詳細は不明である。

7層 植物遺体を多量に含む黒褐色シルト層である。層中に自然木を多く含み、植物遺体が葉理を成す。調査区東半に分布する。層厚は最も厚い箇所では0.25 mを測る。

8層 黄灰色砂礫、黄灰色粗砂からなる旧堀川の河川堆積層。古墳時代前期の遺物を包含する。

9層 明黄褐色シルト層。地山層である。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代	土坑 123・124	
平安時代末～鎌倉時代初頭	池 120、泉 130、溝 110 下層	
鎌倉時代～室町時代	井戸 95・121・100、溝 125・122・101・110 上層、土坑	
江戸時代	溝 90、瓦列 91、廃棄土坑	

2 検出遺構

今回の調査では3層上面（第1面）、4・5層上面（第2面）、5・6層上面（第3面）、6・8・9層上面（第4面）で調査を実施し、その結果、平安時代後半～江戸時代の遺構を検出した。遺構数は第1面が最も多く約100基を数え、以深は減少する。

(1) 第1面（図版1・5）

3層上面で検出した江戸時代後半以降の遺構面である。ピット、溝、土坑等を検出した。

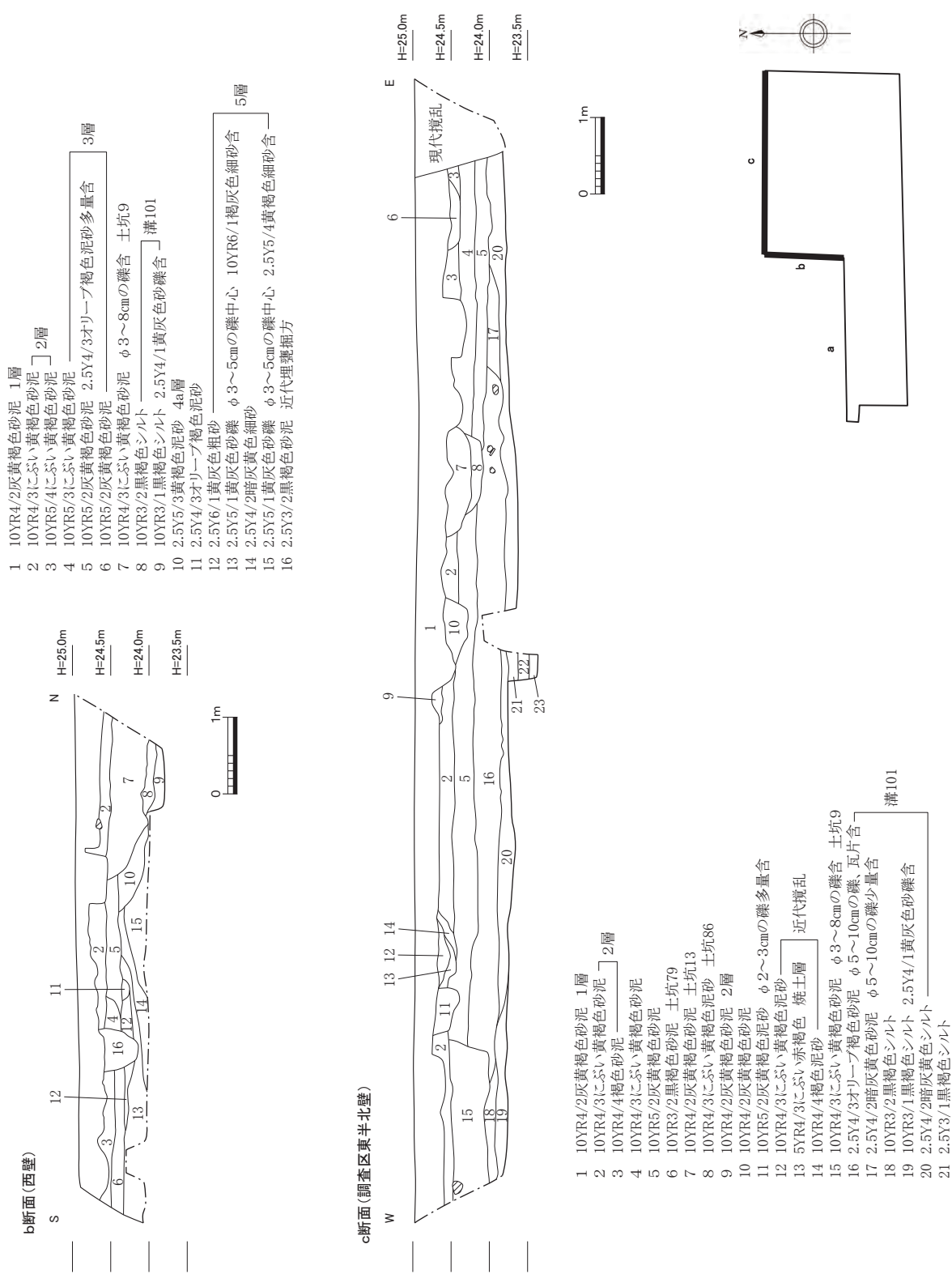


図6 調査区西壁、北壁(調査区東半地区)断面図(1:80)

〔ピット〕

調査区の東半地区で複数のピットを検出した。大半は径 0.3 m 前後、深さ 0.2 m を測る。調査区東半 D ライン周辺に東西方向に集中するようにもみえるが、建物や柵として復元することは難しい。

〔溝〕

溝 90

5 C ～ 9 C 区で検出した東西溝である。長さ 7.1 m、幅 0.3 m、深さ 0.2 m を測る。断面形は船底型を呈する。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。北三～四門の推定境界線から約 1.8 m 南に位置し、区画に関する溝と考えられる。

〔土坑〕

第 1 面では 18 世紀後半以降に属する土坑を多く検出している。土坑は調査区東半に集中し、西半では少ない。大半は平面方形、不整形を呈する廃棄土坑である。時期は土坑 15・46・58・65 がⅢ期古～中段階、土坑 9・10・77・78・85 がⅢ期中～新段階に属する。

〔その他の遺構〕

瓦列 91

5 c・6 c 区の溝 90 北隣で区画に関すると思われる瓦列を検出した。丸瓦を東西方向に並べ、残存長 1.5 m を測る。長さ 35 cm の丸瓦を用いる。北三～四門の推定境界線から 1.4 m 南に位置する。

(2) 第 2 面 (図版 2・6)

4 層及び 5 層上面で検出した鎌倉時代～室町時代後半の遺構面である。溝、井戸、土坑を検出した。

〔溝〕

溝 101 (図 7 図版 8)

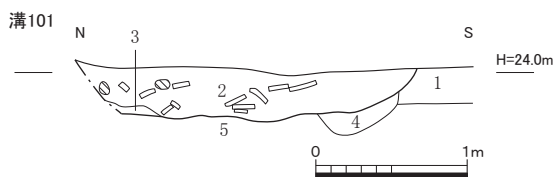
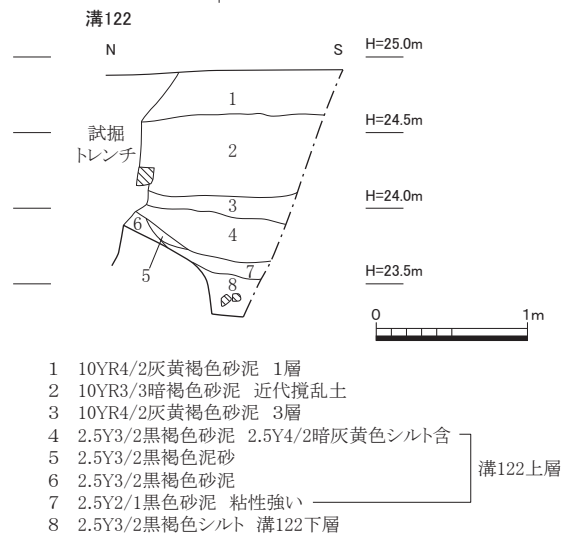
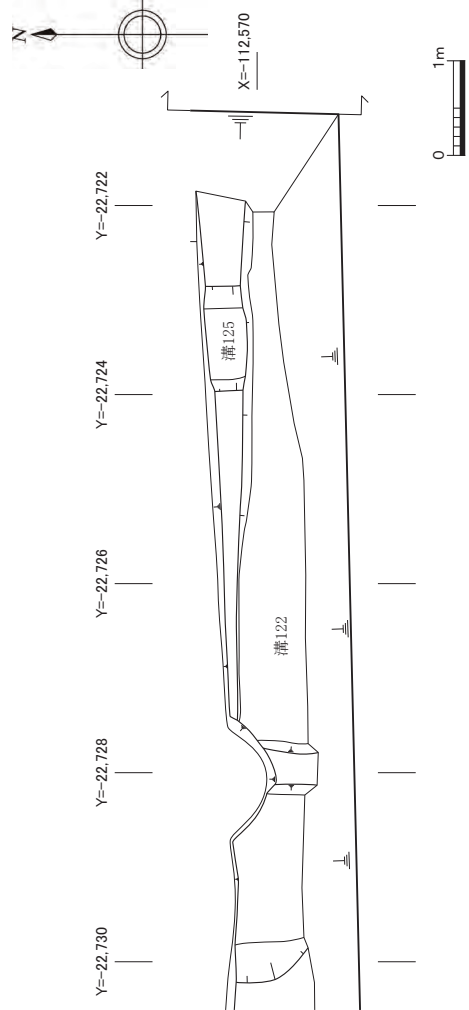
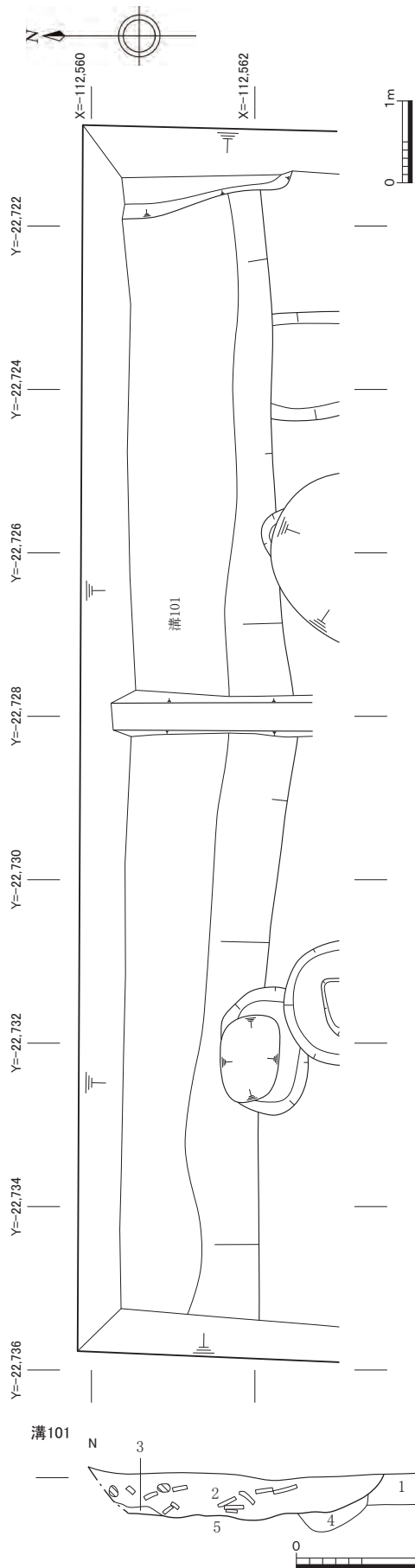
5 B ～ 10 B 区で検出した東西溝である。溝の南肩プランを検出し、北肩プランは調査区外に位置する。検出幅 3.60 m、深さ 0.46 m を測る。埋土はオリーブ褐色砂泥、暗灰黄色シルト、黒褐色シルトである。遺物は X 期古～中段階に属する土師器とともに瓦質土器、瓦が出土した。

溝 122 (図 7 図版 8)

6 E ～ 10 E 区で検出した東西溝である。検出長 8.15 m、検出幅 0.90 m、深さ 0.53 m を測る。埋土は大きく上下 2 層に区分され、上層は黒褐色砂泥、下層は黒褐色シルトである。遺物は上下層で時期差は無く X 期古段階に属する土師器とともに瓦質土器、焼締陶器、瓦等が出土した。

溝 110 上層 (図 8 図版 7)

1 D、1 E 区の猪熊小路東側溝推定位置で検出した南北溝である。溝 110 は上下 2 層に区分され、ここでは上層について記述する。検出長 4.30 m、検出幅 3.00 m、深さ 0.45 m である。調査区西壁付近で溝の東肩ラインを検出し、幅を確認するため調査区北壁沿いを約 1.5 m 西に拡張して掘り下げたが西肩ラインを検出することはできなかった。断面形は箱型を呈する。埋土は灰黄褐色系、



- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 1層
 - 2 10YR3/3暗褐色砂泥 近代攪乱土
 - 3 10YR4/2灰黄褐色砂泥 3層
 - 4 2.5Y3/2黒褐色砂泥 2.5Y4/2暗灰黄色シルト含
 - 5 2.5Y3/2黒褐色泥砂
 - 6 2.5Y3/2黒褐色砂泥
 - 7 2.5Y2/1黒色砂泥 粘性強い
 - 8 2.5Y3/2黒褐色シルト 溝122下層
- 1 2.5Y5/3黄褐色泥砂 4a層
 - 2 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 φ5~10cmの礫、瓦片含
 - 3 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
 - 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
 - 5 2.5Y3/1黒褐色シルト 6b層

図7 溝101、122平面断面図 (平面1:80 断面1:50)

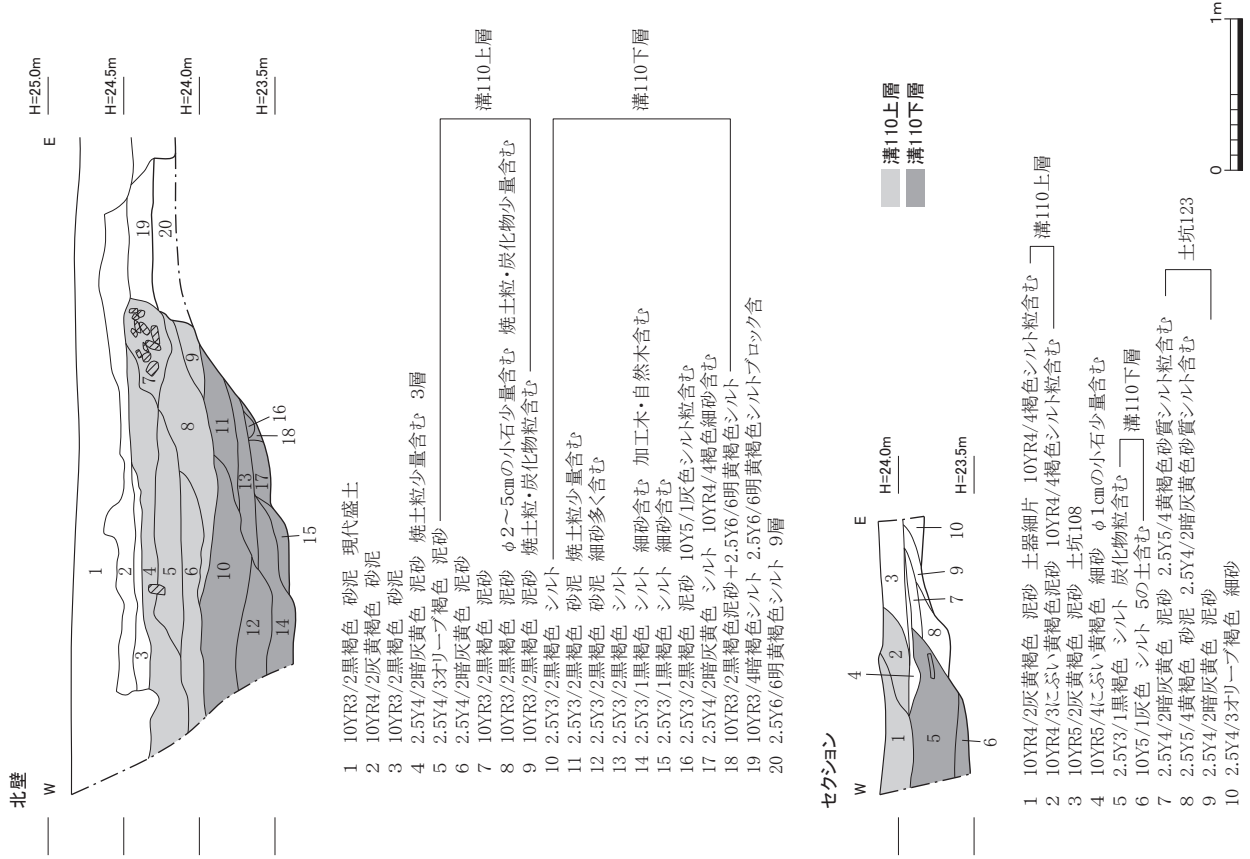


図8 溝110平面断面図 (1 : 50)

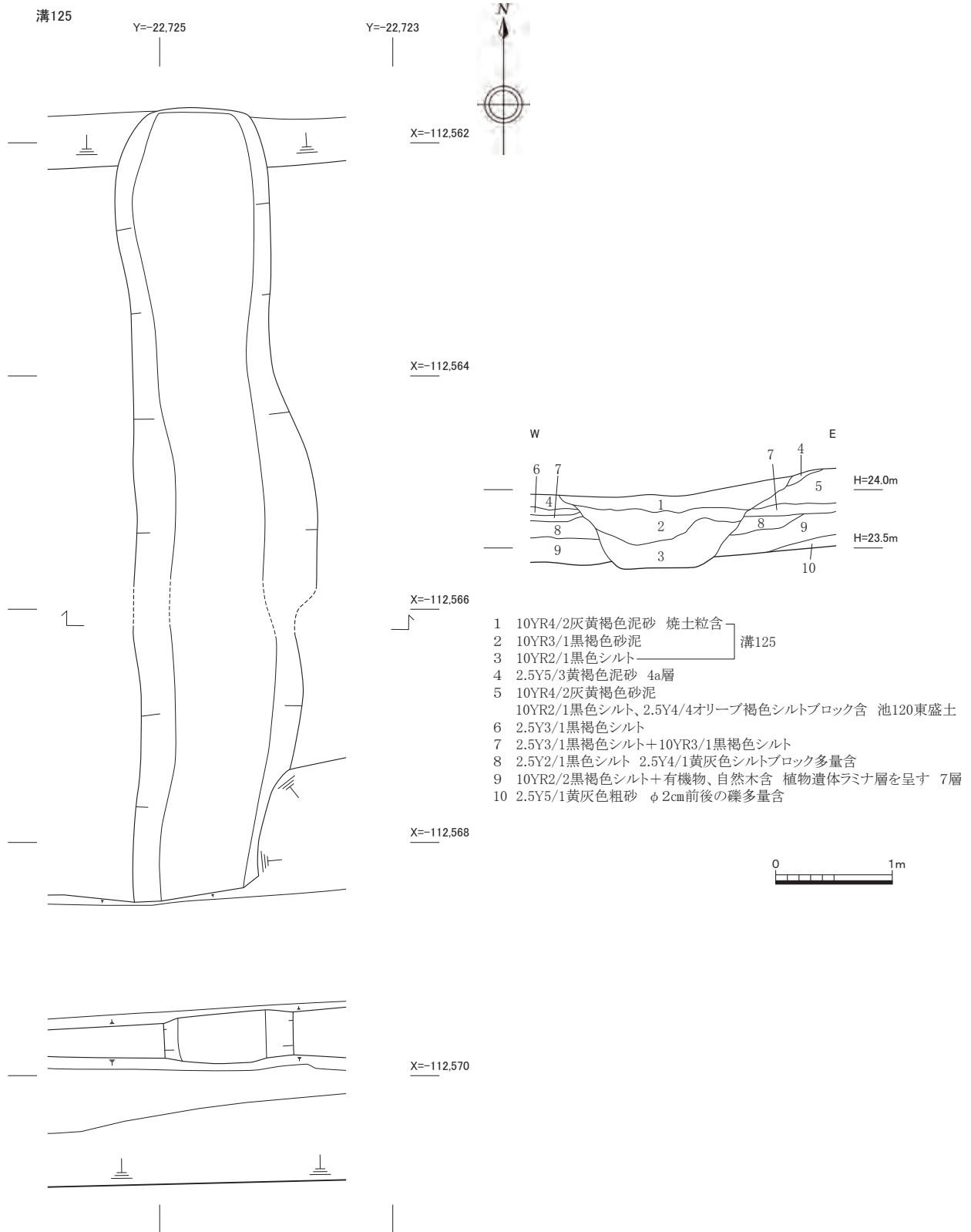


図9 溝125平面断面図 (1 : 50)

黒褐色を呈する砂泥である。通常の道路側溝としては幅広であり、猪熊小路に面する寺院西面の構である可能性を考える。遺物はX期古段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、瓦質土器等が出土した。

溝 125 (図9 図版9)

9 B～9 E区で検出した南北溝である。X = -112,561.700 m付近で溝の北端を検出し、南端は調査区外に延びる。室町時代の溝 122 に切られる。池 120 埋め戻し土である4層掘り下げ後に検出したが、断面観察の結果4層上面から切り込む溝であることを確認した。幅 2.00 m (セクション断面の観察による)、深さ 0.75 m を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は上位から焼土粒を含む灰黄褐色砂泥、黒褐色砂泥、黒色シルトである。遺物はVI期新～VII期古段階に属する土師器とともに須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、白磁、瓦器、瓦が出土した。

(井戸)

井戸 100 (図10 図版7)

7 D区で検出した井戸である。掘方は一辺 1.3 m の丸みを帯びた方形を呈する。井戸枠は幅約 24 cm の板を 8 枚組む多角形を呈する。掘方の北半は、平瓦を 4 段積み重ね井戸枠の補強を行っている。枠内の底面を直径約 0.40 m で 0.30 m 掘り下げている。曲物が据えられていた可能性があるが、痕跡は確認できない。遺物はX期古段階に属する土師器とともに緑釉陶器素地、瓦器、瓦質土器、瓦が出土した。

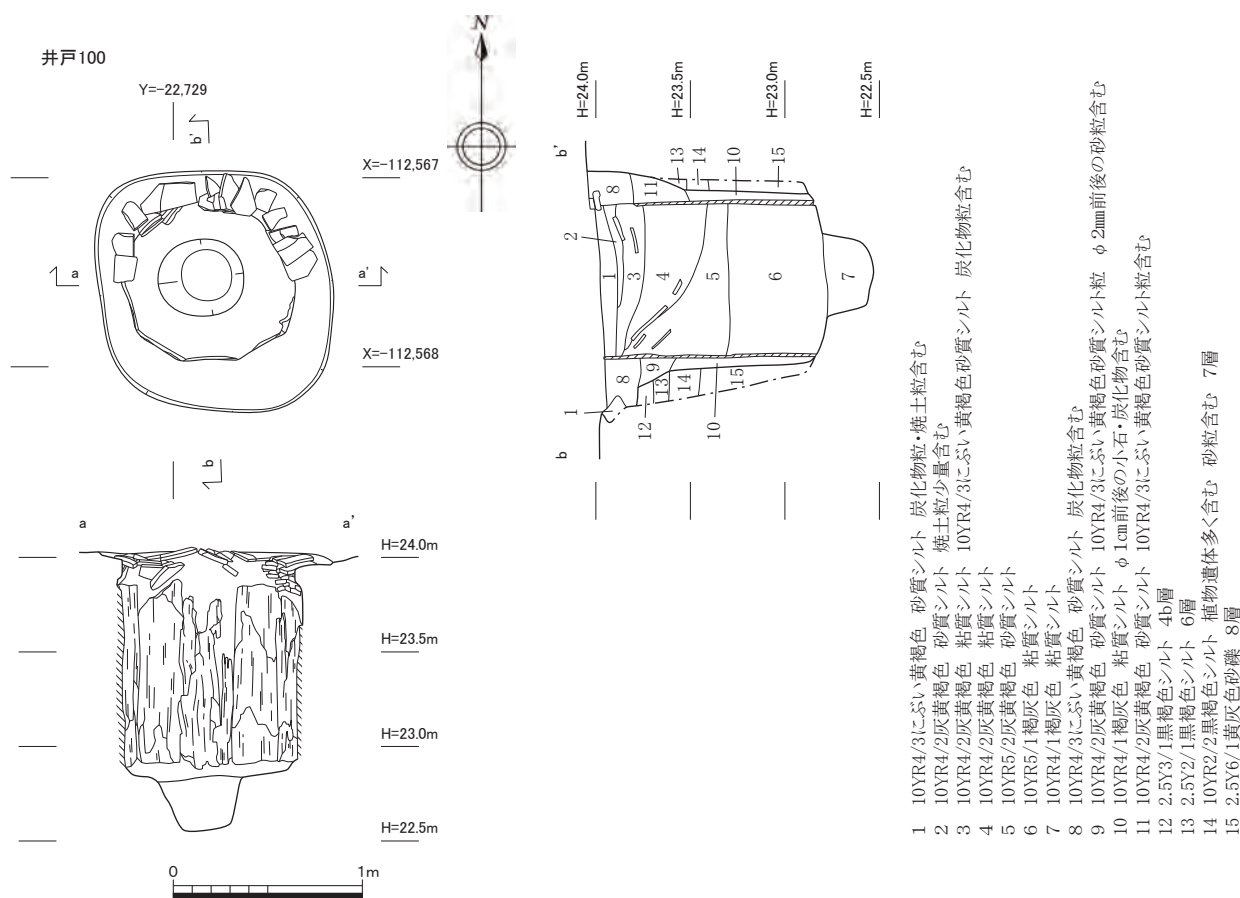


図10 井戸100平面断面図 (1 : 40)

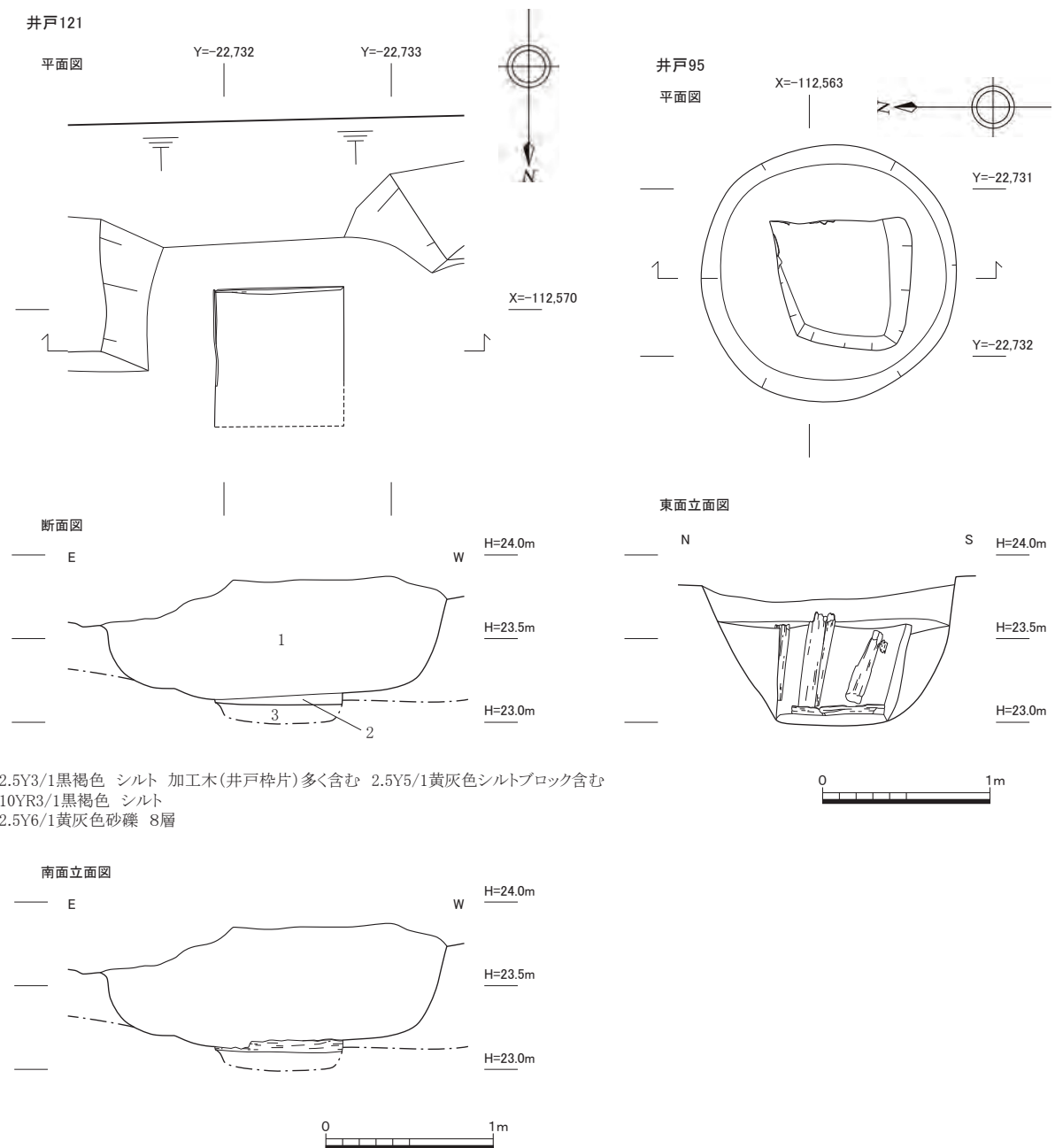


図11 井戸95、121平面断面図(1:40)

井戸95(図11 図版10)

5B、6B、5C、6C区で検出した井戸である。掘方は直径1.50mの円形を呈する。井戸枠は一辺0.82mの方形を呈し、縦板横棧組である。北東部に隅柱が残る。井戸枠の残存は悪く、西半部は板材が残っていない。井戸底面の標高は22.95mである。遺物は平安時代の土師器等が混入するが、VI期中～新段階に属する瓦器、白磁等が出土した。

井戸 121 (図 11 図版 10)

6 E区で検出した井戸である。後世の攪乱等に切られ掘方の平面形や規模は不明である。板材を方形に組んだ井戸枠であったと考えられるが、廃絶時に攪乱され底の横板が南面にのみ残る。残された横板から、一辺0.8mで方形の井戸枠であったと考えられる。井戸底面の標高は23.1mである。埋土は上位が井戸枠と考えられる加工木片を多く含む黒褐色シルト、井戸枠内が黒褐色シルトである。遺物はⅥ期中～新段階に属する土師器とともに白磁、瓦器が出土した。

〔土坑〕

土坑は主に調査区西半で検出している。平面形が方形を呈し底面が平坦なもの(土坑 96～99・106・109)、平面形が円形で底面がやや窪むもの(土坑 119)幅1.00m前後のやや小型のもの(土坑 105・108)がある。深さはいずれも検出面より0.20m前後を測る。時期は土坑 106がⅨ期新段階、土坑 96・97・108・109・119がⅨ期新～Ⅹ期古段階、土坑 98・99がⅩ期古段階に属する。

(3) 第3面 (図版 3・11)

第2面から池埋め戻し土である4層を掘り下げた平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構面である。溝と園池に関連する遺構を検出した。

〔溝〕

溝 110 下層 (図 10 図版 15)

猪熊小路東側溝推定位置を南北に走る溝である。溝の西肩は調査区外に位置し、幅2.50m以上、深さ0.45mを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は階段状に深くなる。小路の側溝としては規模が大きく、邸宅西面に設けられた溝の可能性を考える。埋土は黒褐色シルト、灰色シルトであり粘性が強い。遺物はⅥ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、白磁、瓦器、木製品が出土した。

〔園池関連遺構〕

池 120 (図 12・13 図版 11・13・14)

調査区東半で検出した池である。池の西側に砂礫(5層)、東側にシルト(池 120 東盛土)による盛土で陸部を形成し、池底に泉とみられる土坑状遺構(泉 130)を設ける。東西幅10.90m、深さ0.40mを測り、調査区外北・南・東に広がると考えられる。州浜や景石は検出していない。池底は黒褐色シルト層(6層)を利用し、新たな造作は行なわれていない。池 120 東盛土層からⅤ期新段階の遺物が出土することから、池の構築年代は12世紀後半頃と考えられる。池埋め戻し土である4層は上下2層(4a、4b層)に区分され、下層の4b層は粘性の強いシルト層である。各層の出土遺物の内容は同じであることから、同段階の埋め戻し土と考えられる。4b層はシルト質であり、埋め戻し時に水抜きが完全にはなされていなかった可能性がある。池西側の池底付近ではクロマツを中心とした葉や球果が多く堆積し、一部植物遺体が葉理を成す箇所もみられたことから、埋没の直前には管理が行き届いていない状況であった可能性がある。池埋め戻し土である4層からは土師器皿が多く出土し、完形に近い個体がまとまって出土した。埋め戻し時にま

とめて投棄されたものと考えられる。出土した土師器はⅥ期古段階に属し、その他須恵器、青磁、白磁、瓦器が出土した。遺物の年代観から池の埋没は12世紀末～13世紀初頭と考えられる。

泉 130 (図 12・13 図版 12)

池 120 に十字に設定したセクション交点付近で検出した土坑状の遺構である。池底面から湧水層である砂礫層まで掘り込まれることや、出土遺物が4層と同時期であり池と同時に埋没したと考えられることから池に伴う泉と判断した。平面形は不正円形を呈し長さ3.15 m、幅1.95 m、深さ0.35 mを測る。底面の標高は23.4 mである。埋土は黄灰色シルトブロック、炭化物、焼土粒、木片等を含む黒褐色砂泥である。検出面付近で、籾殻のついた炭化米が出土している。遺物はⅥ期古段階に属する土師器とともに須恵器、白磁、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土した。

(4) 第4面 (図版 4)

6・8・9層上面で検出した遺構面である。ピット、溝、土坑を検出した。遺物の出土が無く、時期不明の遺構が多い。

[ピット]

2 D区で3基のピット (ピット 125・126・128) を検出した。猪熊小路東築地推定ライン付近で検出している。いずれも径0.20 m、深さ0.10 m未満で、埋土は黒褐色砂泥である。遺物の出土は無く、詳細な時期は不明である。

[溝]

溝 131

6 D、7 D区で検出した南北溝である。Dラインに設定したセクション以北では検出していない。幅1.00 m、深さ0.25 mを測る。埋土は黒褐色シルトブロックを含む灰黄色シルトである。遺物の出土は無く、詳細な時期は不明である。

[土坑]

土坑 124

1 E区で検出した土坑である。溝 110 に遺構の西側を切られる。平面形は丸みを帯びた方形を呈し、南北幅0.50 m、深さ0.30 mを測る。埋土は上位が黒褐色泥砂、下位が灰黄褐色泥砂である。遺物はⅣ期古段階に属する土師器とともに須恵器、緑釉陶器が出土した。

土坑 123 (図 10)

1 D、1 E区で検出した土坑である。土坑の西側を溝 110 上層に、東側を試掘坑に切られる。南北幅1.71 m、深さ0.24 mを測る。埋土は暗灰黄色泥砂、黄褐色砂泥、暗灰黄色泥砂である。遺物はⅣ期新段階に属する土師器とともに須恵器、灰釉陶器、白磁が出土した。

土坑 129

6 D区で検出した土坑である。試掘坑に遺構の南側を切られる。平面は不正円形を呈し、幅0.97 m、深さ0.30 mを測る。埋土は黄灰色シルトブロックを含む黒褐色シルトである。遺物の出土は無く、詳細な時期は不明である。

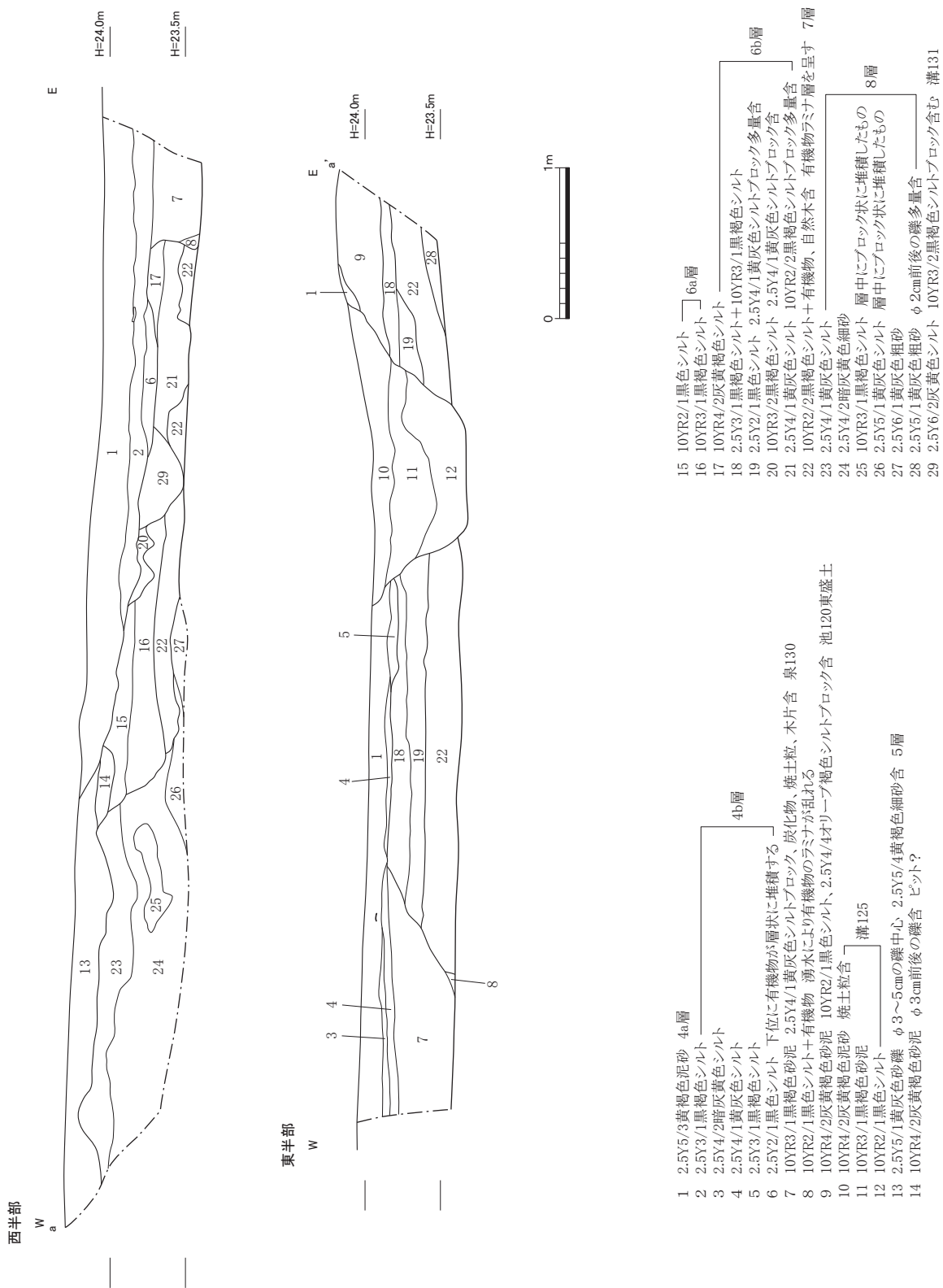


図12 池120東西セクション南面断面図 (1 : 40)

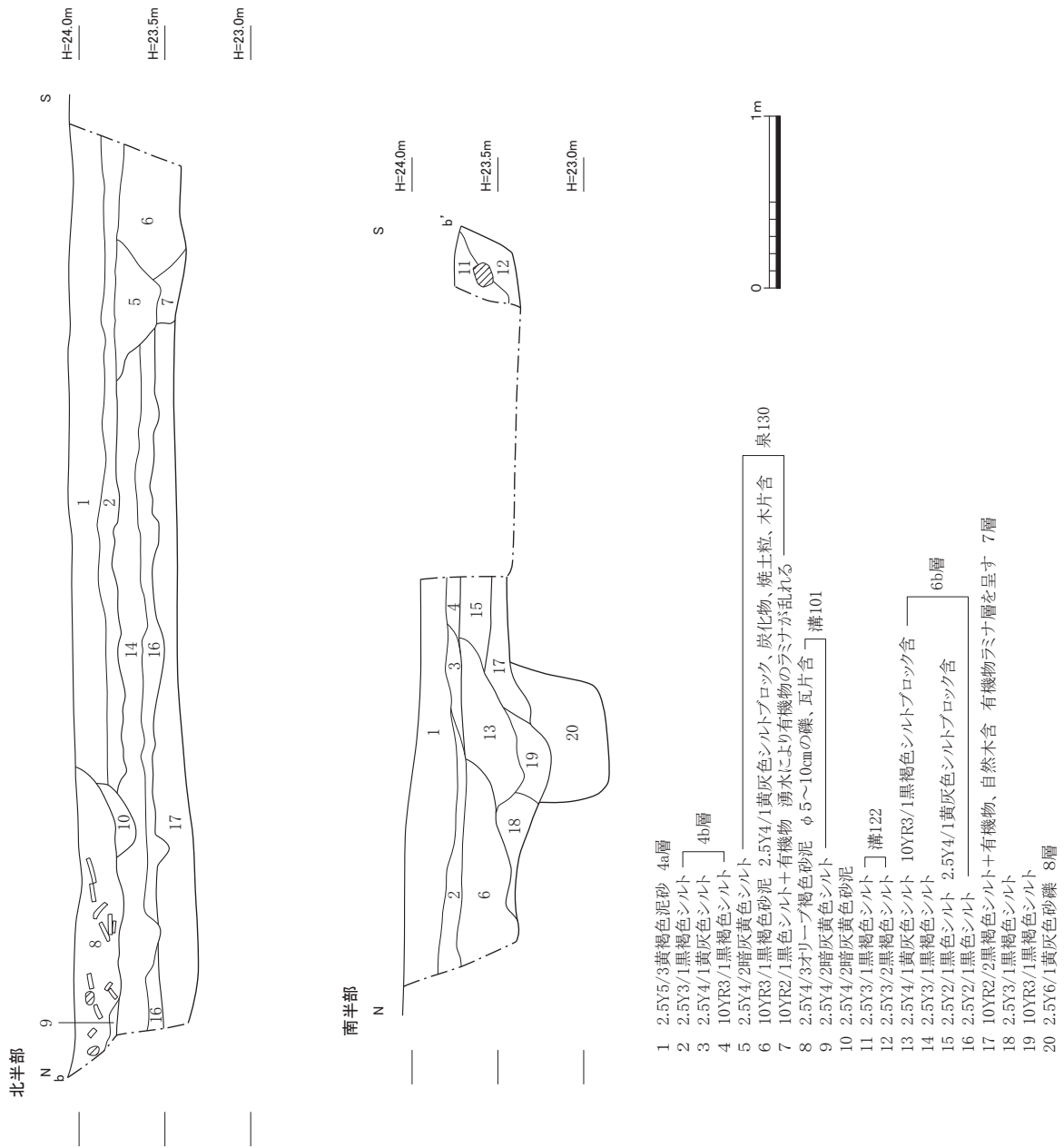


図13 池120南北セクション西面断面図 (1:40)

3 出土遺物

今回の調査では、コンテナ 35 箱分の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、金属製品、木製品等がある。土器・陶磁器類が最も多く、次いで瓦類が多く出土した。遺物の時期は古墳時代～江戸時代に及ぶ。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	A ランク点数	B ランク点数	C ランク箱数
古墳時代	古式土師器		古式土師器 6 点		
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、緑釉陶器素地、灰釉陶器、軒瓦、丸瓦、平瓦		土師器 3 点、須恵器 3 点、黒色土器 1 点、緑釉陶器 5 点、緑釉陶器素地 1 点、灰釉陶器 4 点、軒丸瓦 7 点、軒平瓦 7 点		
平安時代末～鎌倉時代初頭	土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦器		土師器 49 点、須恵器 1 点、青磁 1 点、白磁 10 点、瓦器 4 点	丸瓦 2 点、平瓦 4 点	
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、青磁、白磁、焼締陶器、軒瓦、丸瓦、平瓦		土師器 24 点、須恵器 2 点、青磁 1 点、白磁 2 点、瓦器 3 点、瓦質土器 2 点、焼締陶器 2 点、金属製品 1 点、軒丸瓦 2 点、軒平瓦 2 点、鳥衾 1 点、樽 1 点		
江戸時代	施釉陶器、染付、棧瓦		施釉陶器 3 点、焼締陶器 1 点、染付 6 点		
合計		39 箱	155 点 (6 箱)	6 点 (1 箱)	32 箱

*コンテナ箱数は、整理段階で遺物を抽出したことにより 4 箱増加した。

(1) 土器・陶磁器類

a 古墳時代 (図 14 1～6)

古墳時代の遺物は 5 層掘削時に出土したものを掲載している。1 は壺口縁部である。口縁部が屈曲して上方に立ち上がる。口縁部外面に棒状浮文が 3 本単位で張り付けられる。2 は壺の口縁部である。口縁部は外上方に外反し端部は面を持つ。口縁部内外面共にハケ調整を施し、口縁端部はナデで仕上げる。3 は高杯の脚部である。内面の一部にナデ調整が残るが、大部分は表面磨滅により調整が不明瞭である。4～6 は壺もしくは甕の底部片である。

b 平安時代 (図 15 7～13)

土坑 124 (7～11)

土師器 (7・8)、緑釉陶器 (9)、須恵器 (10・11) がある。土師器は皿がある。7 は皿 A である。口径 9.6 cm。口縁部が「て」の字に屈曲する。8 は皿 N である。口径 14.2 cm、器高 2.3 cm。口縁部は 2 段ナデで端部は外反する。9 は緑釉陶器椀底部である。削り出し

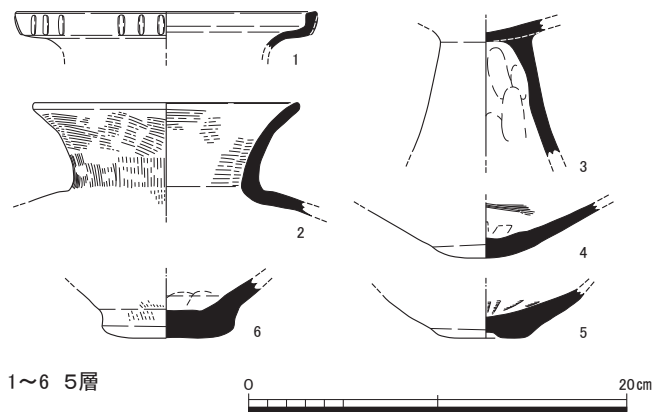


図 14 出土遺物 1 (古墳時代 1 : 4)

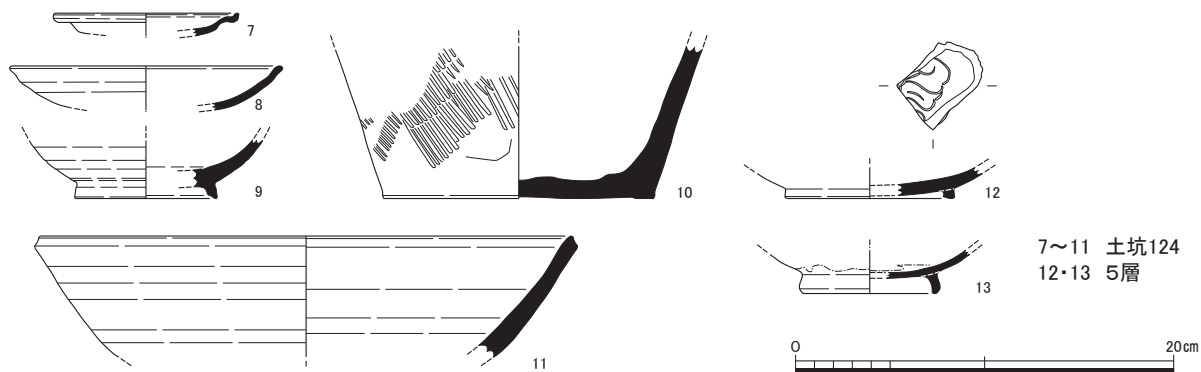


図15 出土遺物2（平安時代 1：4）

高台。胎土は灰色を呈し硬質である。須恵器は壺、鉢がある。10は壺底部である。底径14.4 cm。体部外面に平行タタキを施す。11は須恵器の鉢である。口径24.0 cm。口縁端部は面を持つ。

土坑124出土遺物はIV期古段階に属する。

5層（12・13）

12は緑釉陶器碗の底部である。内面に印刻花紋を施す。貼付高台で、断面形は方形を呈する。黒笹89号窯形式。13は灰釉陶器碗の底部である。高台の断面形は三日月状を呈する。黒笹90号窯形式。

c 平安時代末～鎌倉時代初頭（図16 14～83）

池120東盛土（14～20）

土師器（14～19）、白磁（20）がある。土師器は皿Nがある。小型皿（14・15）と大型皿（16～19）に区分される。小型皿は14が口径9.0 cm、器高1.4 cm、15が口径9.1 cm、器高1.5 cm。口縁部は1段ナデで端部は上方にわずかにつまみ上げる。大型皿は口径13.8～14.4 cm、器高2.6～2.9 cm。口縁部は2段ナデで端部は上方につまみ上げる。20は白磁玉縁碗の底部である。底部外面は露胎である。

池120東盛土出土遺物は、V期新段階に属する。

泉130（21～30）

土師器（21～24）、瓦器（25）、須恵器（26）、白磁（27・28）、緑釉陶器（29）、灰釉陶器（30）がある。土師器は皿Nがある。いずれも小型皿で口径9.0 cm前後、器高1.7～1.9 cmを測る。25は樟葉型の瓦器皿である。口径10.3 cm、器高1.9 cm。体部内面にミガキを施した後、見込みに並行方向のミガキを施す。土師器皿Nより古いものであり11世紀の所産か。26は須恵器鉢口縁部である。口縁部が玉縁を呈する篠産の鉢である。平安時代の混入品である。白磁は碗がある。27は玉縁口縁碗の口縁部である。口径16.0 cm。28は玉縁口縁碗の底部である。底径5.6 cm。底部外面は露胎である。29は緑釉陶器碗の底部である。貼付け高台である。30は灰釉陶器碗底部である。底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。29・30は平安時代の混入品である。

泉130出土遺物は、VI期古段階に属する。

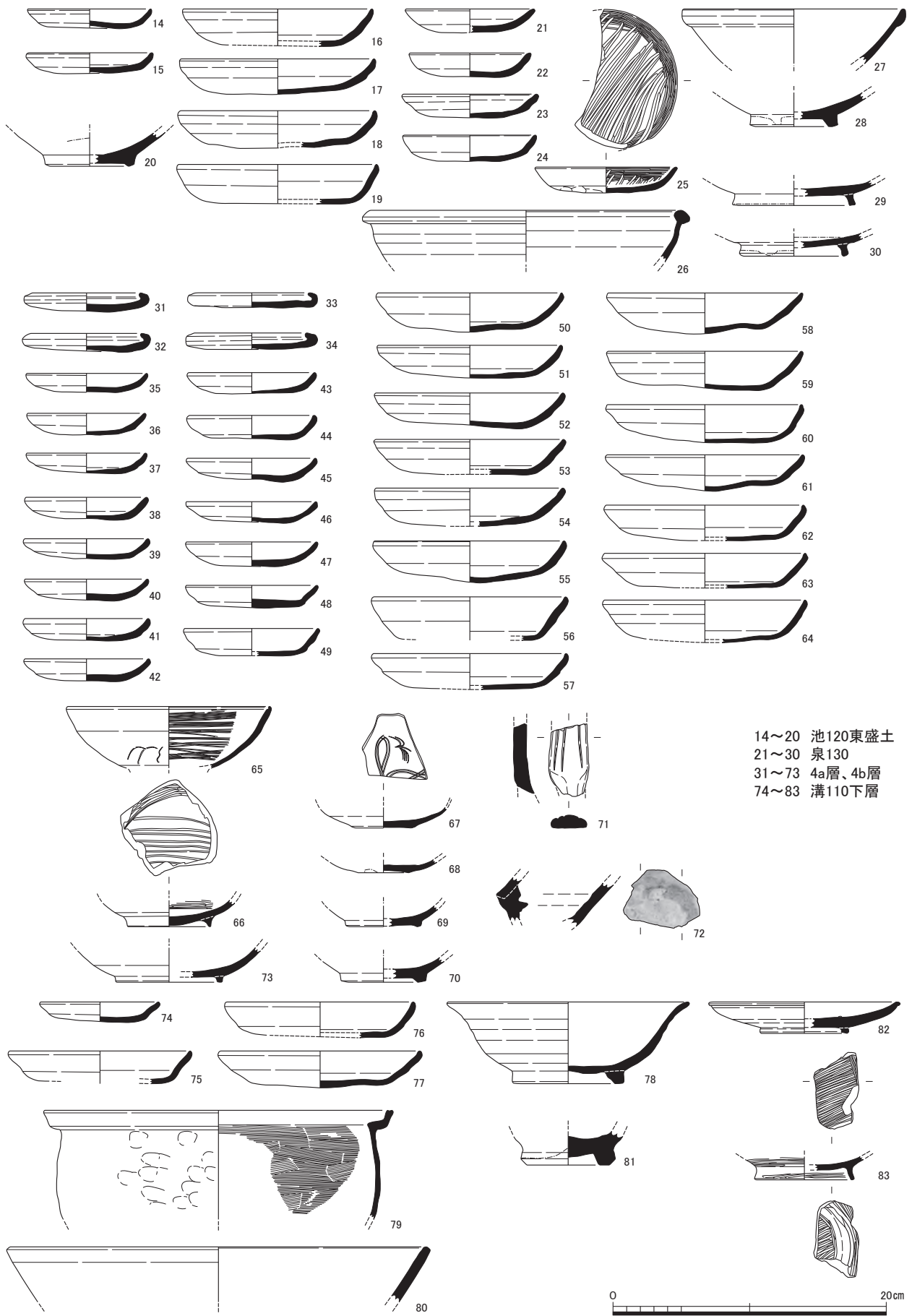


図16 出土遺物3 (平安時代末~鎌倉時代初頭 1:4)

4 a・4 b層 (31～73)

土師器 (31～64)、瓦器 (65・66)、青磁 (67)、白磁 (68～72)、灰釉陶器 (73) がある。土師器は皿 A c (31～34)、皿 N (35～64) がある。皿 A c は口径 8.0 cm 前後、器高 1.4 cm 前後のものが中心である。底部は平坦で、口縁部は緩く内面に折り込む。皿 N は大小に区分でき、35～49 が小型皿、50～64 が大型皿である。小型皿は口径 9.0 cm 前後、器高 1.6 cm 前後の個体が中心である。丸みを持って立ち上がり、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部は 1 段ナデのものが中心であるが、49 など 2 段ナデのものもみられる。大型皿は口径 13.4～14.7 cm を測り 14 cm 前後の個体が中心である。口縁部は 1 段ナデのものが多いが、52・54・64 など 2 段ナデのものもみられる。口縁端部は上方につまみ上げる。瓦器は椀がある。65 は口縁部から体部片。樟葉型の椀である。口径 14.8 cm。口縁部内面に沈線が 1 条巡る。内面に横方向のミガキを施す。66 は底部である。樟葉型の椀である。断面三角形の高台を張り付ける。体部内面に横方向のミガキを施し、見込みに暗門を施す。67 は青磁皿の底部である。平高台である。見込みに劃花文を施す。白磁は皿、椀、水差、不明品がある。68 は皿底部である。平高台である。69・70 は玉縁口縁椀の底部である。体部外面は露胎である。71 は水差の把手である。幅 3.0 cm、厚さ 1.0 cm。72 は不明品である。水差の注口もしくは香炉脚部片か。体部外面に龍頭を張り付ける。外面に二次的に火を受けた痕跡が残る。胎土はやや粗く、広東潮州窯もしくは景德鎮産の可能性はある⁽¹⁾。73 は灰釉陶器椀もしくは皿底部である。平安時代の混入品である。高台は断面方形を呈する。内面に釉薬をハケ塗りする。

4 a、4 b 層出土遺物は、VI 期古段階に属する。

溝 110 下層 (74～83)

土師器 (74～78)、瓦器 (79)、須恵器 (80)、白磁 (81)、灰釉陶器 (82)、黒色土器 (83) がある。土師器は皿、椀がある。74～77 は皿 N である。皿 N は小型皿 (74) と大型皿 (75～77) に区分される。74 は口径 8.6 cm、器高 1.5 cm。口縁部はナデによりやや外反し端部は上方につまみ上げる。75 は口径 13.2 cm、器高 2.4 cm。口縁部の残存が 1/8 程であるため口径の復元は精度が落ちる。口縁部は 1 段ナデで端部は上方につまみ上げる。76 は口径 13.6 cm、器高 2.6 cm。口縁部は 1 段ナデで端部は上方につまみ上げる。77 は口径 14.4 cm、器高 2.7 cm。口縁部は 2 段ナデで端部は上方につまみ上げる。78 は高台付の椀である。ロクロで成形された吉備地域産の椀と考えられる。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反し端部は丸く収める。底部糸切の後高台を張り付ける。体部外面の下位は回転ヘラケズリ、体部外面上位及び口縁部内外面はロクロナデで仕上げる。79 は瓦器鍋である。口径 25.4 cm。口縁部が「L」字状に屈曲する。体部外面はオサエの指跡が残り体部内面はハケ調整で仕上げる。口縁部内外面はナデを施す。80 は須恵器鉢である。口径 30.4 cm。直線的に外上方に延び端部は面を持つ。81 は白磁壺底部である。底径 6.1 cm。底部外面は露胎。四耳壺底部と考えられる。82 は灰釉陶器皿である。断面方形の高台を貼付け、高台内側はナデによりわずかに段が付く。器壁は厚く、口縁端部は外反する。見込みにトチン跡がある。釉薬はハケ塗りされる。83 は黒色土器椀底部である。底径 7.0 cm。貼付け高台。底部内外面共にミガキを密に施す。82・83 は平安時代の混入品である。

溝 110 下層出土遺物は、VI期古～中段階に属する。

d 鎌倉時代～室町時代 (図 17 84～125)

井戸 121 (84～89)

土師器 (84～87)、白磁 (88・89) がある。土師器は皿 N である。小型皿 (84～86)、大型皿 (87) に区分される。小型皿は口径 9.0～9.8 cm。口縁部は 1 段ナデで端部は上方につまみ上げる。87 は口径 14.4 cm、器高 2.4 cm。口縁部は 1 段ナデで端部は上方につまみ上げる。白磁は椀がある。88 は口縁部である。口径 15.8 cm。口縁部は外反する。89 は底部である。底径 6.4 cm。幅 0.6 cm、高さ 1.0 cm の高台を削り出す。高台内面は露胎である。

井戸 121 出土遺物は VI 期中段階に属する。

井戸 95 (90～92)

土師器 (90)、瓦器 (91)、白磁 (92) がある。90 は土師器皿 N である。口径 14.8 cm、器高 2.9 cm。口縁部は 2 段ナデを施し口縁端部は外反する。IV 期中段階の混入品である。91 は樟葉型の瓦器椀である。口径 13.9 cm。口縁部内面に沈線が 1 条巡る。体部内面にミガキを施す。92 は白磁の玉縁口縁椀である。口径 19.6 cm。

溝 125 (94～106)

土師器 (94～102)、須恵器 (106)、青磁 (103)、緑釉陶器 (104)、灰釉陶器 (105) がある。土師器は皿 A c (94)、皿 N (95～98)、皿 S (99～102) がある。94 は口径 7.8 cm、器高 1.2 cm。底部は中央付近が内面にやや凹み口縁部は内面に緩く折り込む。皿 N は小型皿 (95・96) と大型皿 (97・98) に区分される。小型皿は 95 が口径 7.0 cm、器高 1.2 cm、96 が口径 8.4 cm、器高 1.5 cm。95 は口縁部の残存が 1/4 程度のため口径の復元の精度が悪い。口縁部は 1 段ナデで端部は上方につまみ上げる。大型皿は 97 が口径 10.8 cm、器高 2.0 cm、98 が口径 13.0 cm、器高 2.1 cm。口縁部は屈曲気味に立ち上がり、端部は上方につまみ上げる。皿 S は灰白色系の精良な胎土を用いる。99 が口径 11.8 cm、器高 2.5 cm とやや小振りであり、100～102 が口径 12.4～12.8 cm、器高 3.0～3.5 cm。口縁部は緩く内湾し端部は上方で丸く収める。106 は須恵器鉢口縁部である。緩く内湾して立ち上がり端部は丸みを帯びる。103 は青磁椀底部である。灰白色の胎土に明緑色の釉薬を施す。高台の内側は露胎である。龍泉窯系の青磁である。104 は緑釉陶器椀もしくは皿の底部である。平高台で底部外面に糸切痕がある。京都産の緑釉陶器である。105 は灰釉陶器椀底部である。104、105 は平安時代の混入品である。

溝 125 出土遺物は VI 期新～VII 期古段階に属する。

井戸 100 (107～114)

土師器 (107～111)、緑釉陶器素地 (112)、瓦器 (113)、瓦質土器 (114) がある。

土師器は皿がある。107 は皿 S h である。口径 7.0 cm、器高 1.7 cm。口縁部が強く外反する。灰白色系の精良な胎土を用いる。108～111 は皿 S である。口径 11.8～14.2 cm、器高 2.0～2.4 cm。体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部は緩く外反する。灰白色系の精良な胎土を用いる。112

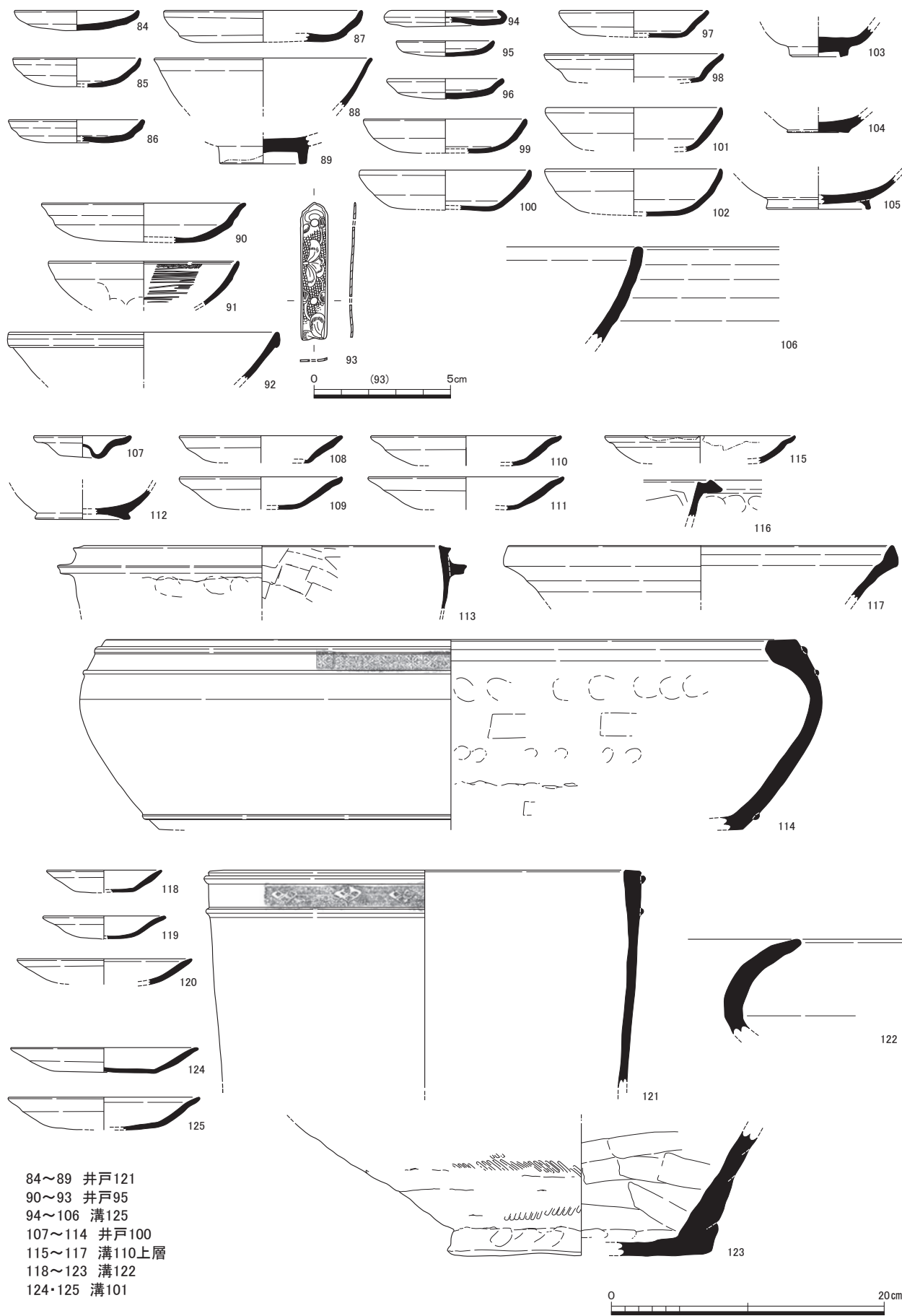


図17 出土遺物4（鎌倉時代～室町時代 1：2、1：4）

は緑釉陶器素地椀底部である。ケズリ出し平高台である。底径 6.9 cm。平安時代の混入品である。113 は瓦器羽釜である。断面方形を呈する幅の狭い鐔を張り付ける。口縁端部はナデにより僅かに肥厚する。114 は瓦質土器火鉢である。口径 50.2 cm の大型品である。体部は外上方に立ち上がり口縁部は内傾する。端部は内側に肥厚し上面に面を持つ。口縁部外面に凸線を 2 条貼付け、凸線間に菱型のスタンプを押捺する。口縁部及び体部外面はミガキを施し、口縁部及び体部内面はオサエ後ヘラ等を用いたナデ調整で仕上げる。

井戸 100 出土遺物は X 期古段階に属する。

溝 110 上層 (115 ~ 117)

土師器 (115)、瓦器 (116)、須恵器 (117) がある。115 は土師器皿 S である。口径 13.9 cm、器高 2.0 cm。口縁部に煤が付着することから燈明皿と考えられる。116 は瓦器の鍋口縁部である。117 は東播系須恵器鉢である。口縁部は断面三角を呈し内面はナデにより凹みがある。鎌倉時代の混入品と考えられる。

溝 110 上層出土遺物は X 期古段階に属する。

溝 122 (118 ~ 123)

土師器 (118 ~ 120)、瓦質土器 (121)、焼締陶器 (122・123) がある。土師器は皿 S である。118・119 は口径 8 cm 台、器高 1.6 ~ 1.7 cm の小型皿、120 は口径 12.6 cm の大型皿である。灰白色系の精良な胎土である。口縁部は外反し端部は丸く収める。121 は瓦質土器火鉢である。口径 31.4 cm。口縁部に凸帯を 2 条貼付け、その間に菱型のスタンプを押捺する。体部及び口縁部外面はミガキを施し、内面はナデで仕上げる。焼締陶器は甕がある。122 は口縁部片である。口縁部は外反し端部は丸く収める。胎土は灰色を呈し、密に焼き締まる。備前産の甕と考えられる。鎌倉時代の混入品か。123 は甕底部である。体部の歪が大きい。体部外面はタタキ後ナデ、体部内面はナデで仕上げる。

溝 122 出土遺物は X 期古段階に属する。

溝 101 (124・125)

土師器皿 S がある。124 は口径 13.6 cm、器高 1.9 cm。底部内面はナデによりやや凹線状の窪みとなる。口縁部はほぼ直線状に外上方に延び端部は丸く収める。X 期中段階に属する。125 は口径 13.8 cm、器高 2.4 cm。口縁部は外反し端部は丸く収める。X 期古段階に属する。

e 江戸時代 (図 18 126 ~ 135)

土坑 46 (126 ~ 132)

染付 (126 ~ 129)、焼締陶器 (130)、施釉陶器 (131・132) がある。染付は蓋、椀、皿がある。126 は蓋である。127 は椀である。口径 9.7 cm、器高 5.4 cm。いわゆる「くらわんか椀」である。外面に草花紋を描く。128 は輪花皿である。口径 14.5 cm、器高 4.3 cm。外面に草文を描き、内面は縦線で区画された内部に草花文を描く。底部外面に意匠化された「福」字を描く。129 は皿である。口径 13.6 cm、器高 3.9 cm。外面に草文、内面に花文を描く。130 は焼締陶器播鉢である。口径 23.9 cm、

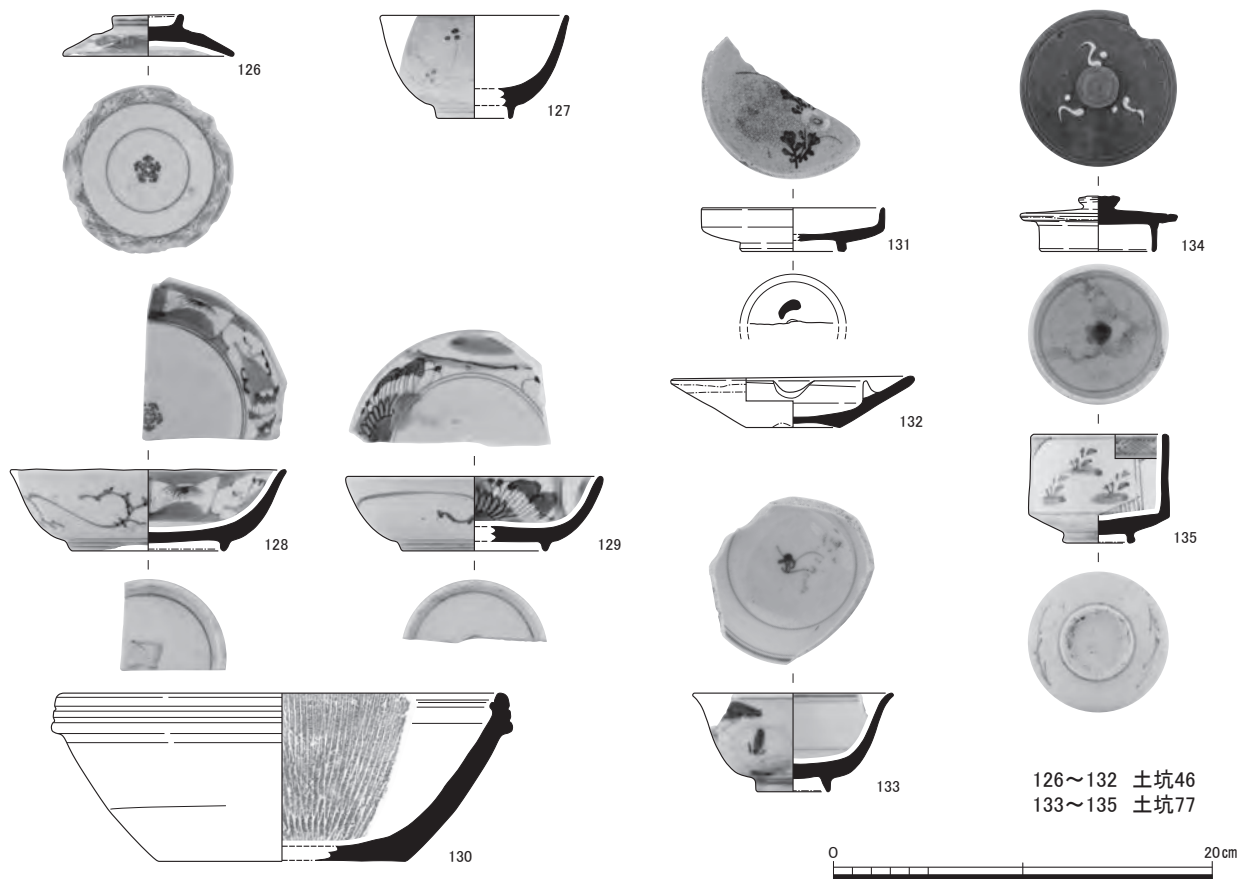


図18 出土遺物5（江戸時代 1：4）

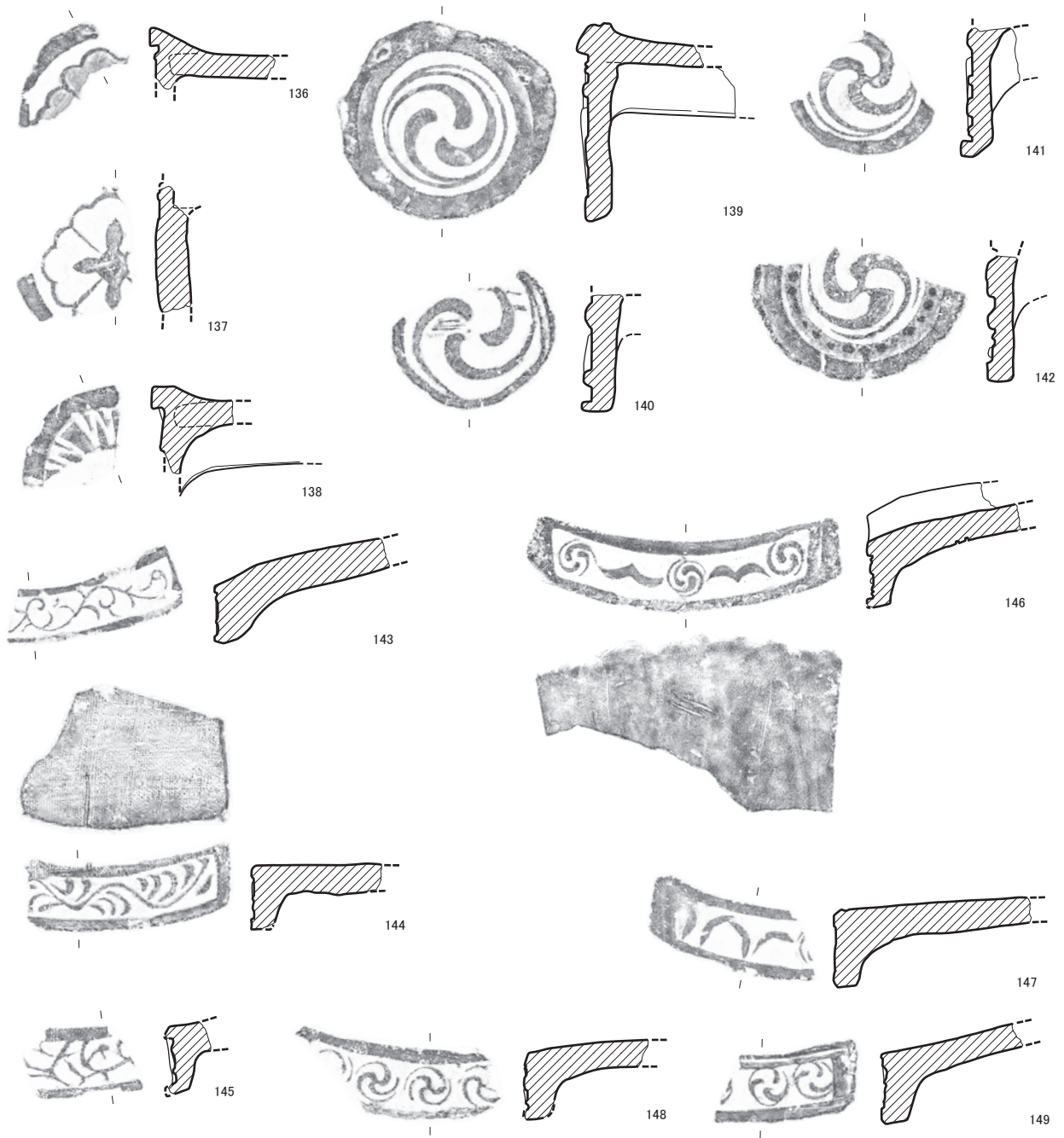
器高 8.9 cm のやや小ぶりの播鉢である。胎土は橙色を呈し長石、石英、チャート等を含む。内面に 7 本単位の播り目を施す。131 は施釉陶器皿である。口径 9.6 cm、器高 2.3 cm。口縁部は上方に短く立ち上がる。見込みに草文を描き、底部外面に墨痕がある。132 は燈明皿である。

土坑 46 出土遺物はⅧ期古～中段階に属する。

土坑 77（133～135）

染付（133・135）、施釉陶器（134）がある。133 は染付椀である。口径 10.4 cm、器高 5.2 cm。口縁部は外反する。外面に農紺色の呉須で抽象化された草花文を描く。134 は蓋である。天井部につまみが付く。天井部外面に白粘土で文様を描く。天井部外面に透明釉を施し、内面は露胎である。135 は染付筒形椀である。口径 7.0 cm、器高 5.7 cm。外面は 2 条の縦線で 3 箇所区画し、線描き及び草文を描く。底部と体部の境に稜を持ち、体部はやや内傾気味に立ち上がる。

土坑 77 出土遺物はⅧ期中～新段階に属する。



136・138～143・148・149 4層
 145・147 池120東盛土
 137・144・146 溝125

0 20cm

图19 出土遺物6 (瓦 平安時代 1 : 4)

(2) 瓦類

a 平安時代 (図 19 136 ~ 149)

軒丸瓦 (136 ~ 142)

136 は 4 a 層から出土。瓦当文様は宝相華文か。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。137 は溝 125 から出土。瓦当文様は宝相華文か。中房は小さく中央に蓮子 1 個の痕跡が残り、四方に先端の尖る花卉が伸びる。138 は 4 a 層から出土。瓦当文様は単弁蓮華文。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。139 は 4 a 層から出土。瓦当文様は右巻き三巴文。巴頭部はやや尖り、尾部は長く伸び圈線に接する。瓦当部は横方向に長い楕円形を呈する。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。140 は 4 a 層から出土。瓦当文様は右巻き三巴文。巴頭部はやや尖り、尾部は周縁に接する。周縁幅は 0.7 cm と狭い。141 は 4 a 層から出土。瓦当文様は右巻き三巴文。巴頭部は繋がり、尾部は互いに繋がり圈線をなす。範傷が横方向に入る。142 は 4 a 層から出土。瓦当文様は左巻き三巴文。巴頭部は接合し、尾部は長く伸び互いに接しない。圈線は不明瞭で一部消失する。珠文が密に巡る。

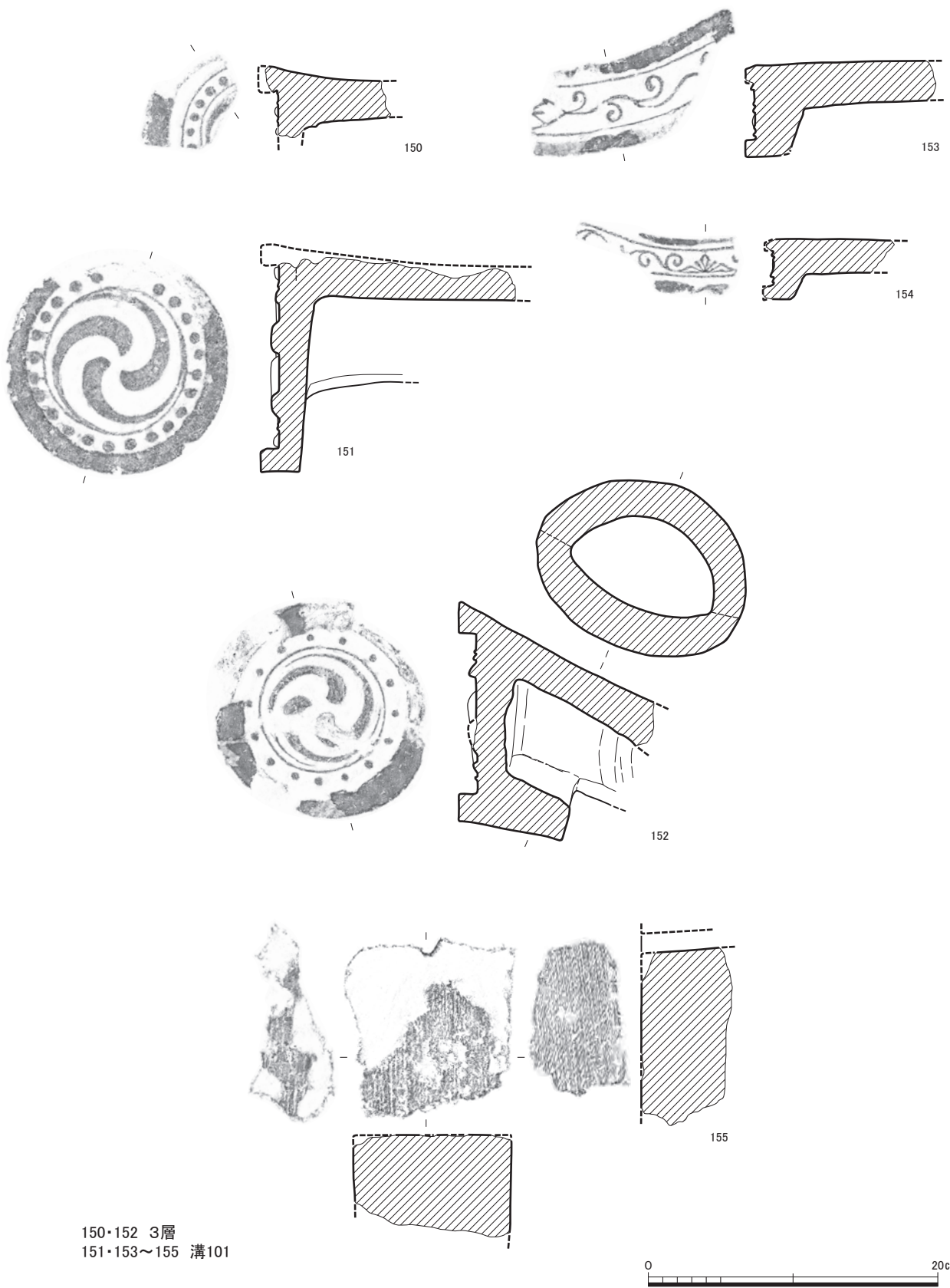
軒平瓦 (143 ~ 149)

143 は 4 a 層から出土。瓦当文様は均整唐草文。瓦当部形成は折り曲げ技法。144 は溝 125 から出土。瓦当文様は唐草文。唐草の主葉は連続し、子葉は主葉と離れる。瓦当部形成は折り曲げ技法。瓦当部上位に布目が残る。平瓦部凹面は布目が残る、1 条のヘラ記号がある。145 は池 120 東盛土から出土。瓦当文様は唐草文。瓦当部形成は折り曲げ技法。瓦当部上位に布目が残る。146 は溝 125 より出土。瓦当文様は雁巴文。瓦当の左右及び中央に巴文を配し、間に雁行文を配置する。左・中央の巴文は左巻き三巴文、右の巴文は左巻き二巴文である。瓦当部形成は折り曲げ技法。平瓦部凹面は、瓦当付近に横方向のナデを施しその他は布目が残る。顎部から平瓦部凸面は縦方向のナデを施し、「二」のヘラ記号がある。二次的に火を受ける。147 は池 120 東盛土から出土。瓦当文様は雁巴文。縦方向の雁行文を配し、中央に巴文を配する。巴文は大部分を欠くが、右巻き三巴文か。瓦当部形成は折り曲げ技法。二次的に火を受ける。148 は 4 a 層から出土。瓦当文様は連巴文。右巻き三巴文を並べて配する。巴頭部は接合し、尾部は長く伸び接しない。瓦当部形成は折り曲げ技法。平瓦部凹面は布目が残る。149 は 4 b 層から出土。瓦当文様は連巴文。右巻き三巴文を並べて配する。巴頭部はやや尖り、尾部は長く伸び接する。瓦当部形成は折り曲げ技法。

b 鎌倉時代 (図 20 150 ~ 155)

軒丸瓦 (150・151)

150 は 3 層から出土。瓦当文様は右巻き巴文。圈線が 2 条巡り、圈線間に珠文が配される。鎌倉時代初期の所産。151 は溝 101 から出土。瓦当文様は右巻き三巴文。巴頭部はやや尖り尾部は長く伸び圈線に接する。外区に 23 個の珠文が残る。



150・152 3層
151・153～155 溝101

図20 出土遺物7 (瓦・塼 鎌倉時代 1:4)

鳥衾 (152)

152は3層から出土。瓦当文様は右巻き三巴文。巴頭部はやや尖り、尾部は長く伸び互いに接しない。圏線が1条巡り、外区に15個の珠文を配する。

軒平瓦 (153・154)

153は溝101から出土。瓦当文様は唐草文である。圏線により内外区を区画する。唐草文の主葉は連続し、子葉は強く巻き込む。154は溝101から出土。瓦当文様は唐草文である。圏線により内外区を区画する。中心飾りに半裁花文を配し唐草文が伸びる。唐草文の主葉は連続し、子葉は強く巻き込む。

埴 (155)

155は溝101から出土。幅10.9cm。穿孔を施す。表面は縄目が残る。

(3) 金属製品 (図17 93)

93は銅製の飾金具である。井戸95から出土。残存長5.1cm、幅1.0cm、厚さ0.1cmである。径3mmの穴が2箇所に分けられる。表面は魚子地に宝相華の花弁を線刻し、鍍金を施す。

(1) 李炳炎氏(潮州窯博物館)、江津新氏(景德镇市陶瓷考古研究所)、徳留大輔氏(出光美術館)のご教授による。

参考文献

『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社 1995年

「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究13・14』上原真人 元興寺文化財研究所考古学研究室 1978年

「平安後期の軒瓦に関する基礎的研究」『考古学論考-小林行雄博士古稀記念論考-』上原真人 1982年

『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』平成4年度 京都市文化観光局 1993年

『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年

第Ⅳ章 まとめ

今回の調査では、平安時代、平安時代末～鎌倉時代初頭、鎌倉時代～室町時代、江戸時代後半という4時期の遺構を検出した。また、自然科学分析により平安京以前の堆積と考えられる6層以深の土層や園池の植栽に関する知見を得ることができた。以下に、調査で得られた成果を時代毎にまとめる。

1 平安京以前

調査区全体に分布する砂礫層（8層）からは、古墳時代前期の遺物が出土する。遺物の表面はローリングにより磨滅するものが大半で、旧堀川の氾濫により流された砂礫とともに運ばれたものであろう。これは当地周辺での調査においても、ほぼ同様の状況である。

調査区東半では、8層の上位に植物遺体を多く含む黒褐色シルト層（7層）を検出した。断面の観察では、調査区東部で8層が窪んでおり、窪地に7層が堆積する状況である。遺物の出土は無く堆積年代は不明であるが、古墳時代以降に旧堀川の氾濫が落ち着いた段階からの堆積層であると推定される。附章の種実遺体分析では、層中の植物遺体は多くの水湿地生草本から構成されると報告されている。

7層の上位には粘性の強いシルト質である6層が堆積する。6層は、層中に混じりのない6a層と斑土状になる6b層とに区分される。いずれの層からも遺物の出土は無く堆積時期の詳細は不明である。種実遺体分析では、6b層では7層でみられた水湿地生草本が激減し、代わって栽培種のイネの多産が認められ、イネの他、コムギ、アワも確認されている。6b層には鉄分やマンガン層等は確認できないことから本格的な水田は営まれていないと考えられるが、湿地を利用した簡易的な耕作が行われていた可能性はある。

平成18年度に調査地の東に位置する戒光寺公園で実施された試掘調査でも、黒褐色泥土及び褐色灰色砂泥の湿地状堆積が確認されており⁽¹⁾、宅地開発が進む以前の調査地周辺は湿地が広がる状況であったと考えられる。

2 平安時代

平安時代前期～中期では遺構は存在せず、遺物も後世の遺構や整地土に混入するのみである。平安時代後期では、調査区西部で検出した土坑123・124は、出土遺物の年代観から11世紀の遺構であると考えられる。その他は4層及び5層掘削後に6層上面で検出した溝131、土坑129や調査区西部の9層上面で検出したピットなどは遺物の出土が無く詳細な時期は不明である。

3 平安時代末～鎌倉時代初頭

今回の調査の大きな成果の一つとして、平安時代末～鎌倉時代初頭の園池（池120、泉130）及び猪熊小路東側溝位置を走る南北溝の検出が上げられる。園池、溝共にⅥ期古段階の遺物が出土することから12世紀末～13世紀初頭に埋没したと想定される。本調査地の位置する左京八条二

坊五町は平安時代後期～末には藤原顕長、平重盛が邸宅を構えるが、出土遺物の年代観から平重盛の邸宅「小松殿」に関連する遺構である可能性が高いと考える。

園池については、池西部を検出したものと考えられる。西側に砂礫、東側にシルトの盛土により陸部を形成し、池底に素掘りの泉を設ける。東盛土は中島を構築した可能性もあろうが、

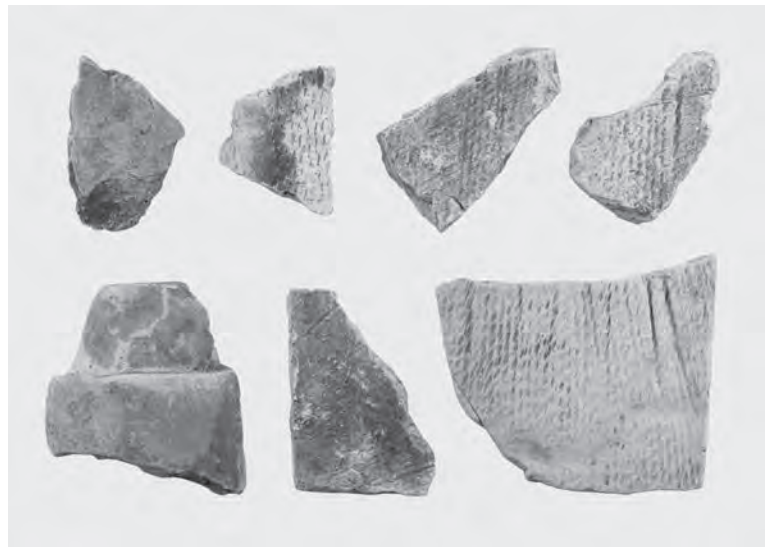


図21 池120東盛土出土瓦（二次的に火を受けたもの）

詳細は不明である。池底はシルト層である6層を利用し、砂礫や粘土による新たな造作は行われていない。西側の陸部を構築した砂礫層（5層）からは平安時代の遺物と共に古墳時代の遺物が出土したことから、調査地周辺に分布する古墳時代の遺物を含む旧堀川の氾濫堆積層（本調査での8層に相当）を盛土として利用した可能性が高い。今回の調査範囲においては州浜や景石の検出は無く、比較的簡素な造作である。池西半ではクロマツの葉や球果が池底付近に多くみられることから、池の周囲にクロマツが植栽されていた可能性が高い。池の造営年代は、東盛土層からV期新段階の遺物を検出していることから12世紀後半～末頃と考えられる。また、東盛土層から二次的に火を受けた平安時代後期の瓦が出土しているが（図21）、『本朝世紀』仁平元年（1151）6月2日条の藤原顕長の邸宅が火事により焼失した記事との関連もあろうか。

池西岸周辺の池底付近には、部分的に植物遺体が葉理を成す状況がみられ、埋没の直前ではあまり管理が行き届いていなかった可能性がある。池は4層により一気に埋め戻されている。4層出土遺物は、土師器皿Nが大半を占め、完形及びそれに近い個体が多い。土師器皿Nは大小に二分でき、口径分布の中心は大型皿が14.0 cm前後、小型皿が9.0 cm前後にある。VI期古段階に属する一括史料と評価出来よう。4層とその周辺からは、平安時代後期の軒瓦が出土しているが、いずれも中央官衙系の瓦であり地方からの搬入品は含まれない。本調査出土瓦の特徴と言えよう。

溝110下層については、幅2.5 m以上を測り、猪熊小路に面した邸宅西面の構として整備されたと考えられる。顕長・重盛の何れによる整備であるかは不明であるが、埋没は池120と同時期であり「小松殿」西面の構として機能していたと考えられる。埋土はシルト質であり、水が流れていた可能性が高い。

これら遺構の埋め戻し土には、炭・焼土や二次的に火を受けた遺物はほとんど含まれず、火災跡の処理土坑等も検出していない。重盛の父清盛の邸宅である西八条第は、平氏の没落に際し焼き払われたとされるが、今回の調査成果からは「小松殿」の廃絶時に大規模な火災が発生した状況は確認できなかった。

今回の調査では、猪熊小路に面する邸宅西面に構が整備され、邸宅の西部は園地として利用されていた状況を確認した。宅地の利用状況を考える上で重要な成果であろう。今後、周辺調査の増加に伴い、より詳細な宅地利用の状況が解明されることが期待される。

4 鎌倉時代～室町時代

鎌倉・室町時代の遺構は鎌倉時代前半～中頃と室町時代後半の2時期に分かれ、いずれも戒光寺に関連する遺構である可能性が高いと考えられる。

鎌倉時代の遺構は、井戸 95・121（Ⅵ期中～新段階）、溝 125（Ⅵ期新～Ⅶ期古段階）があり、13世紀後半に属する。井戸 95・121 は共に方形の木枠を持つ井戸であり、井戸底面の標高は 23.0 m 前後である。溝 125 は区画に関する溝と想定される。

鎌倉時代後半～室町時代前半については、遺構・遺物共に存在しない。

室町時代後半の遺構は、土坑 106（Ⅸ期新段階）、土坑 96・97・108・109・119（Ⅸ期新～Ⅹ期古段階）、井戸 100、溝 110 上層、土坑 98・99（Ⅹ期古段階）、溝 122（Ⅹ期古段階）、溝 101（Ⅹ期古～中段階）があり、15世紀後半～16世紀前半に属する。いずれも応仁の乱以後の遺構であり、第Ⅱ章で述べた戒光寺の小川一條への移転の契機は従来伝えられていた応仁の乱によるものではなく、大永・享祿・天文期（16世紀前半）に勃発した数々の騒乱によるものであるという内容を裏付けるものと評価出来よう。

溝 110 上層は猪熊小路に面した構と想定され、セクション断面の観察では溝 110 上下層間に間層を挟むことから、溝 110 下層の埋没後ほぼ同位置に溝 110 上層を新たに掘り直したものと考えられる。平成 18 年度に戒光寺公園で実施された試掘調査では、堀川小路西側溝の位置に幅約 1.5 m、深さ 0.7 m の南北溝が検出され、溝からは本調査とほぼ同時期の瓦が多く出土している⁽²⁾。溝 110 上層と比べ幅は狭いが、戒光寺の伽藍造営に伴い堀川小路に面する溝として整備されたものと評価される。今回検出した溝 110 上層を寺域の西端、試掘時に検出された溝を東端とすれば、戒光寺は一町分の寺域を有すると想定される。戒光寺の寺域を復元する上で、溝 110 上層の検出は重要な成果であろう。

溝 101・122 は敷地内の区画に関する溝と考えられる。井戸 100 は木枠を多角形に組み、底面を平面円形に掘り下げる。井戸底の標高は 22.55 m であり、鎌倉時代の井戸と比べ 50 cm 程度深く掘り下げている。溝 110 上層・101・122、井戸 100 は 16 世紀前半に埋没しており、戒光寺が 16 世紀前半の騒乱により荒廃し、寺内の諸施設が他所に移築される時期に関わる可能性が高い。

溝 101・井戸 100・中世末～近世初頭の整地土である 3 層からは瓦が多く出土しているが、鎌倉～室町時代の瓦が混在して出土している。推測の域を出ないが、鎌倉時代創建の瓦葺き屋根を部分的に補修しながら存続したものを、建物の廃絶時にまとめて投棄されたとも考えられよう。出土した瓦には軒丸・軒平瓦の他に鳥衾もあり、規模の大きな建物の存在も想定される。

出土した瓦には二次的に火を受けた痕跡はなく、遺構埋土にも火災処理の痕跡は確認できなかった。応仁の乱以降の兵火による罹災時に、大規模な建物の焼失は免れている可能性もあろう。

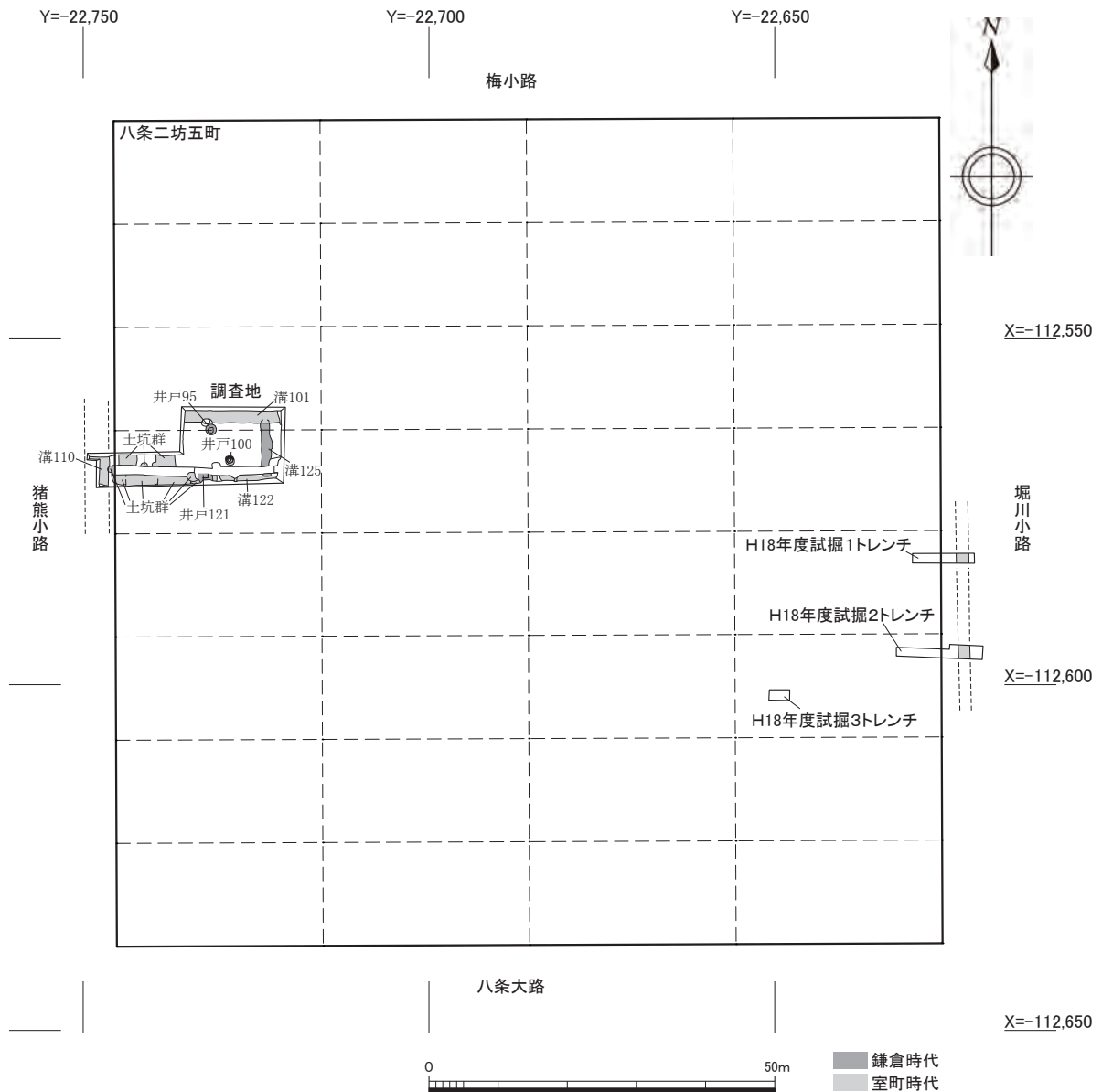


図22 八条二坊五町 鎌倉～室町時代遺構平面図（1：1,000）
平成18年度試掘調査トレンチ位置図と合成

今回の調査により戒光寺の寺域を推定する手がかりを得られたことは大きな成果である。また、鎌倉・室町時代2時期の区画溝や井戸を検出し、創建より移転に至るまでの土地利用の変遷を考察するための成果を得ることができた。今回の調査では建物等の検出は無く、伽藍配置については未だ不明であり、今後、周辺地域での調査の増加が待たれる。

5 江戸時代

3層上面で江戸時代後半の遺構を検出した。検出した遺構の時期は18世紀後半以降である。遺構面のベースとなる3層には室町時代後半の遺物を含み、江戸時代以降の遺物がみられないことから中世末～近世初頭の整地と想定されるが、江戸時代前半の遺構や遺物は今回の調査では検出していない。

遺構は主に調査区東半で検出した。遺構は土坑が多く、大半は廃棄物の処理に関するものである。建物跡は検出しておらず、本調査区は町屋の背後にあたるものと想定される。また、調査区東半の北二―三門間付近では区画に関する可能性のある瓦列や東西溝を検出した。

以上、今回の調査では主に「小松殿」及び戒光寺について考察する上で大きな成果を得ることができたと考える。また、宅地開発が進む以前には湿地状堆積が広がり、湿地を利用した簡易な耕作が行なわれていた可能性を指摘できたことも大きな成果と言えよう。今回の調査範囲は八条二坊五町西部の一角であり、最終的な結論は周辺調査が進んだ段階で総合的に判断した上で出すべきであろう。今後の調査が待たれる。

- (1) 長谷川行孝「Ⅲ－1 平安京左京八条二坊五町跡 No. 1」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 18 年度』京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2007 年
- (2) 上記 1 と同じ

表4 遺物観察表

掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
1	古式土師器	壺	5層	15.8	(2.0)		10YR6/2 灰黄褐色	
2	古式土師器	壺	5層	14.0	(6.0)		10YR5/3 にぶい黄褐色	
3	古式土師器	高坏	5層		(7.3)		10YR7/2 にぶい黄橙色	
4	古式土師器	壺・甕	5層		(3.0)		10YR7/2 にぶい黄褐色	
5	古式土師器	壺・甕	5層		(2.6)	4.0	2.5YR6/6 橙色	
6	古式土師器	壺	5層		(3.2)	4.2	10YR5/3 にぶい黄褐色	
7	土師器	皿	土坑 124	9.6	1.2		10YR7/4 にぶい黄褐色	
8	土師器	皿	土坑 124	14.2	2.3		7.5YR7/4 にぶい橙色淡赤橙	
9	緑釉陶器	椀	土坑 124	7.4	3.1		(釉) 10Y5/2 オリーブ灰色 (胎) N6/0 灰色	
10	須恵器	壺	土坑 124		(8.0)	14.4	N5/0 灰色	
11	須恵器	鉢	土坑 124	24.0	6.4		N7/0 灰白色	
12	緑釉陶器	椀	5層		(1.7)	8.8	(釉) 5Y7/2 灰白色 (胎) 5Y7/1 灰白色	
13	灰釉陶器	椀	5層		(2.3)	7.0	(釉) 7.5Y6/3 オリーブ黄色 (胎) 10YR7/1 灰白色	
14	土師器	皿	池 120 東盛土	9.0	1.4		10YR8/3 浅黄褐色	
15	土師器	皿	池 120 東盛土	9.1	1.5		2.5YR7/2 明赤灰色	
16	土師器	皿	池 120 東盛土	13.8	(2.8)		10YR7/3 にぶい黄褐色	
17	土師器	皿	池 120 東盛土	14.1	2.6		7.5YR7/4 にぶい橙色淡赤橙	
18	土師器	皿	池 120 東盛土	14.2	2.7		10YR7/2 にぶい黄褐色	
19	土師器	皿	池 120 東盛土	14.4	2.9		10YR7/2 にぶい黄褐色	
20	白磁	椀	池 120 東盛土		(2.5)	6.5	(釉) 7.5Y7/1 灰白色 (胎) N8/0 灰白色	
21	土師器	皿	泉 130	9.3	1.7		7.5YR7/4 にぶい橙色淡赤橙	
22	土師器	皿	泉 130	8.8	1.8		10YR6/3 にぶい黄褐色	
23	土師器	皿	泉 130	9.6	1.8		10YR6/3 にぶい黄褐色	
24	土師器	皿	泉 130	9.6	1.9		7.5YR6/4 にぶい橙色	
25	瓦器	皿	泉 130	10.3	1.9		N3/0 暗灰色	
26	須恵器	鉢	泉 130	22.8	(3.8)		N5/0 灰色	
27	白磁	鉢	泉 130	16.0	(4.0)		(釉) 10Y8/1 灰白色 (胎) N8/0 灰色	
28	白磁	椀	泉 130		(2.5)	5.6	(釉) 7.5Y7/2 灰白色 (胎) N8/0 灰色	
29	緑釉陶器	椀	泉 130	8.2	(1.8)		(釉) 7.5Y6/3 オリーブ黄色 (胎) 10YR6/1 褐灰色	
30	灰釉陶器	椀	泉 130		(1.7)	7.3	(釉) 明緑灰 (胎) 10YR7/1 灰白色	
31	土師器	皿	4b層	7.9	1.4		10YR7/2 にぶい黄褐色	
32	土師器	皿	4b層	8.1	1.4		10YR7/2 にぶい黄褐色	
33	土師器	皿	4b層	8.2	1.1		10YR7/3 にぶい黄褐色	
34	土師器	皿	4a層	8.2	1.2		10YR7/2 にぶい黄褐色	
35	土師器	皿	4b層	8.6	1.4		10YR7/3 にぶい黄褐色	
36	土師器	皿	4a層	8.6	1.6		10YR7/2 にぶい黄褐色	
37	土師器	皿	4a層	8.7	1.5		10YR7/2 にぶい黄褐色	
38	土師器	皿	4a層	8.8	1.7		10YR7/2 にぶい黄褐色	
39	土師器	皿	4a層	9.0	1.5		10YR7/2 にぶい黄褐色	

掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
40	土師器	皿	4a層	9.0	1.6		10YR7/2にぶい黄橙色	
41	土師器	皿	4b層	9.0	1.7		10YR7/2にぶい黄橙色	
42	土師器	皿	4b層	9.0	1.7		10YR7/3にぶい黄橙色	
43	土師器	皿	4a層	9.2	1.6		10YR8/2灰白色	
44	土師器	皿	4a層	9.2	1.8		10YR7/2にぶい黄橙色	
45	土師器	皿	4b層	9.4	1.8		10YR7/2にぶい黄橙色	
46	土師器	皿	4b層	9.5	1.6		10YR8/3浅黄橙色	
47	土師器	皿	4b層	9.6	1.8		10YR7/2にぶい黄橙色	
48	土師器	皿	4a層	9.6	1.7		10YR7/2にぶい黄橙色	
49	土師器	皿	4b層	9.8	2.0		10YR7/2にぶい黄橙色	
50	土師器	皿	4a層	13.4	2.9		7.5YR7/3にぶい橙色	
51	土師器	皿	4b層	13.4	2.4		7.5YR8/3浅黄橙色	
52	土師器	皿	4a層	13.7	2.6		7.5YR7/4にぶい橙色	
53	土師器	皿	4a層	13.7	2.6		10YR8/3浅黄橙色	
54	土師器	皿	4a層	13.7	2.8		7.5YR7/4にぶい橙色	
55	土師器	皿	4a層	13.8	3.1		7.5YR8/2灰白色	
56	土師器	皿	4a層	14.0	(3.2)		10YR8/3浅黄橙色	
57	土師器	皿	4a層	14.1	2.7		5YR8/4淡橙色	
58	土師器	皿	4b層	14.1	3.0		10YR7/2にぶい黄橙色	
59	土師器	皿	4a層	14.2	2.9		7.5YR8/3浅黄橙色	
60	土師器	皿	4b層	14.2	2.8		10YR8/1灰白色	
61	土師器	皿	4a層	14.3	2.7		10YR8/2灰白色	
62	土師器	皿	4b層	14.4	2.6		10YR8/2灰白色	
63	土師器	皿	4a層	14.6	2.6		10YR6/1褐色	
64	土師器	皿	4a層	14.7	3.1		10YR8/2灰白色	
65	瓦器	椀	4a層	14.8	(4.5)		N3/0暗灰色	
66	瓦器	椀	4a層		(1.9)	6.0	N4/0灰色	
67	白磁	皿	4a層		(1.5)	4.0	(釉) 10Y8/1灰白色 (胎) N8/0灰色	
68	白磁	皿	4b層			3.7	(釉) 7.5Y8/1灰白色 (胎) 2.5Y8/1灰白色	
69	白磁	椀	4a層		(1.5)	5.0	(釉) 5Y8/1灰白色 (胎) 5Y8/1灰白色	
70	白磁	椀	4a層		(1.8)	5.0	(釉) 5Y7/1灰白色 (胎) 5Y8/1灰白色	
71	白磁	把手	4a層	(長) (5.3)	(短) (3.0)	(厚) (1.5)	(釉) 10Y7/1灰白色 (胎) N8/0灰色	
72	白磁	器種不明	4a層		(3.9)		2.5Y7/1灰白色	
73	灰釉陶器	椀	4a層		(2.5)	7.6	(釉) 5Y5/3 (胎) 2.5Y7/2灰白色	
74	土師器	皿	溝110下層	8.6	1.5		10YR8/2灰白色	
75	土師器	皿	溝110下層	13.2	2.4		10YR8/3浅黄橙色	
76	土師器	皿	溝110下層	13.6	2.6		10YR8/2灰白色	
77	土師器	皿	溝110下層	14.6	2.7		7.5YR8/3浅黄橙色	
78	土師器	椀	溝110下層	17.6	6.0	10.0	7.5YR8/2灰白色	

掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
79	瓦質土器	鍋	溝 110 下層	25.4	(8.0)		2.5Y5/1 黄灰色	
80	須恵器	鉢	溝 110 下層	30.4	(4.1)		N8/0 灰白色	
81	白磁	壺	溝 110 下層		(2.5)	6.1	(釉) 7.5Y7/1 灰白色 (胎) 2.5Y8/2 灰白色	
82	灰釉陶器	皿	溝 110 下層	13.8	2.3	6.3	N7/0 灰白色	
83	黒色土器	椀	溝 110 下層		(1.7)	7.0	N3/0 暗灰色	
84	土師器	皿	井戸 121	9.0	1.5		10YR7/2 にぶい黄橙色	
85	土師器	皿	井戸 121	9.2	2.1		10YR7/2 にぶい黄橙色	
86	土師器	皿	井戸 121	9.8	1.9		10YR7/2 にぶい黄橙色	
87	土師器	皿	井戸 121	14.4	2.4		2.5Y7/2 灰白色	
88	白磁	椀	井戸 121	15.8	(3.6)		(釉) うすい明緑灰 (胎) N9/0 灰白色	
89	白磁	椀	井戸 121		(2.0)	6.4	(釉) 2.5GY8/1 灰白色 (胎) N8/0 灰色	
90	土師器	皿	井戸 95	14.8	2.9		10YR8/2 灰白色	
91	瓦器	椀	井戸 95	13.9	(3.2)		N3/0 暗灰色	
92	白磁	鉢	井戸 95	19.6	(3.5)		7.5YR7/2 明褐灰色	
93	金属製品	飾り金具	井戸 95	(長) 5.1	(幅) 1.0	(厚) 1.0		
94	土師器	皿	溝 125	7.8	1.2		10YR7/2 にぶい黄橙色	
95	土師器	皿	溝 125	7.0	1.2		10YR7/2 にぶい黄橙色	
96	土師器	皿	溝 125	8.4	1.5		10YR7/2 にぶい黄橙色	
97	土師器	皿	溝 125	10.8	2.0		10YR8/3 浅黄橙色	
98	土師器	皿	溝 125	13.0	2.1		10YR7/2 にぶい黄橙色	
99	土師器	皿	溝 125	11.8	(2.5)		10YR8/1 灰白色	
100	土師器	皿	溝 125	12.4	3.0		10YR8/1 灰白色	
101	土師器	皿	溝 125	12.8	(3.2)		10YR8/1 灰白色	
102	土師器	皿	溝 125	12.8	3.5		10YR8/2 灰白色	
103	青磁	椀	溝 125	3.2	(2.2)		(釉) 明緑灰 (胎) N8/0 灰色	
104	緑釉陶器	椀・皿	溝 125		(1.3)	4.5	2.5Y7/2 灰白色	
105	緑釉陶器	椀	溝 125		(2.5)	7.4	(釉) 明緑灰 (胎) N8/0 灰色	
106	須恵器	鉢	溝 125		(7.0)		N7/0 灰白色	
107	土師器	皿	井戸 100	7.0	1.7		10YR8/2 灰白色	
108	土師器	皿	井戸 100	11.8	(2.0)		5YR7/4 にぶい橙色	
109	土師器	皿	井戸 100	11.9	2.4		7.5YR7/3 にぶい橙色	
110	土師器	皿	井戸 100	13.8	(2.2)		7.5YR8/3 浅黄橙色	
111	土師器	皿	井戸 100	14.2	(2.4)		10YR8/2 灰白色	
112	緑釉陶器	椀	井戸 100		(2.2)	6.9	N6/0 灰色	
113	瓦質土器	羽釜	井戸 100	26.2	(4.6)		N4/0 灰色	
114	瓦質土器	鉢	井戸 100	50.2	14.0	42.6	N4/0 灰色	
115	土師器	皿	溝 125	13.9	(2.0)		(釉) 7.5GY7/1 明オリブ灰色 (胎) N7/0 灰白色	
116	瓦質土器	鍋	溝 110 下層		(2.7)		N5/0 灰色	
117	須恵器	鉢	溝 110 下層	28.2	(3.7)		N4/0 灰色	
118	土師器	皿	溝 122 上層	8.3	1.6		10YR7/2 にぶい黄橙色	

掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
119	土師器	皿	溝 122 上層	8.8	1.7		10YR7/2 にぶい黄橙色	
120	土師器	皿	溝 122 上層	12.6	1.9		2.5Y8/1 灰白色	
121	瓦質土器	火鉢	溝 122 上層	31.4	(16.0)		N3/0 暗灰色	
122	須恵器	甕	溝 122 上層		(7.0)		5Y6/1 灰色	
123	焼締陶器	甕	溝 122 上層		(9.7)	19.1	N5/0 灰色	
124	土師器	皿	溝 101	13.6	1.9		10YR6/1 褐灰色	
125	土師器	皿	溝 101	13.8	2.4		10YR8/2 灰白色	
126	染付	蓋	土坑 46	6.9	2.2		(釉) うすい明青灰 (胎) N8/0 灰色	
127	染付	椀	土坑 46	9.7	5.4	4.0	(釉) N6/0 灰色 (胎) N7/0 灰白色	
128	染付	輪花皿	土坑 46	14.5	4.3	8.0	(釉) 7.5GY 明緑灰色 (胎) N9/0 灰白色	
129	染付	皿	土坑 46	13.6	3.9	7.6	(釉) 2.5GY8/1 灰白色 (胎) N8/0 灰色	
130	焼締陶器	播鉢	土坑 46	23.0	8.9	13.0	2.5YR6/6 橙色	
131	施釉陶器	台付皿	土坑 46	9.6	2.3	5.4	(釉) 7.5GY 明緑灰色 (胎) N9/0 灰白色	
132	施釉陶器	灯明皿	土坑 46	12.4	2.7	5.0	(釉) 5GY7/1 明オリーブ灰色	
133	染付	椀	土坑 77	10.4	5.2	3.8	(釉) 呉須 (胎) N8/0 灰色	
134	施釉陶器	蓋	土坑 77	6.0	2.9		(釉) 2.5Y5/3 (胎) 2.5Y6/2	
135	染付	筒椀	土坑 77	7.0	5.7	3.3	(釉) 呉須 (胎) N8/0 灰色	
136	瓦	軒丸瓦	4a 層	(長) (7.7)	(幅) (7.5)	(高) (6.4)	N3/0 暗灰色	
137	瓦	軒丸瓦	溝 125	(長) (2.2)	(幅) (7.3)		N3/0 暗灰色	
138	瓦	軒丸瓦	4a 層	(長) (8.9)	(幅) (6.2)	(高) (6.8)	N3/0 暗灰色	
139	瓦	軒丸瓦	4a 層	(長) (9.7)	(瓦当径) 12.0		N5/0 灰色	
140	瓦	軒丸瓦	4a 層	(長) (2.8)	(瓦当径) 9.6		N5/0 灰色	
141	瓦	軒丸瓦	4a 層	(長) (3.6)	(瓦当径) 11.0		N4/0 灰色	
142	瓦	軒丸瓦	4a 層	(長) (2.7)	(瓦当径) 12.7		N4/0 灰色	
143	瓦	軒平瓦	4a 層	(長) (10.7)	(幅) (11.0)	(瓦当厚) 3.4	N3/0 暗灰色	
144	瓦	軒平瓦	溝 125	(長) (9.2)	(幅) (13.1)	(瓦当厚) 3.9	N3/0 暗灰色	
145	瓦	軒平瓦	池 120 東盛土	(長) (2.8)	(幅) (6.5)	(瓦当厚) 4.1	N6/0 灰色	
146	瓦	軒丸瓦	溝 125	(長) (13.0)	(幅) 19.4	(瓦当厚) 4.0	10YR8/1 灰白色	
147	瓦	軒平瓦	池 120 東盛土	(長) (12.1)	(幅) (11.0)	(瓦当厚) 4.4	2.5Y8/1 灰白色	
148	瓦	軒平瓦	4a 層	(長) (9.9)	(幅) (14.0)	(瓦当厚) 4.0	N4/0 灰色	
149	瓦	軒平瓦	4b 層	(長) (8.7)	(幅) (8.0)	(瓦当厚) 4.0	2.5Y8/1 灰白色	
150	瓦	軒丸瓦	3 層	(長) (9.7)	(瓦当径) (5.0)		N5/0 灰色	
151	瓦	軒丸瓦	溝 101	(長) (18.1)	(瓦当径) 15.6		N4/0 灰色	
152	瓦	烏衾	3 層	(長) (13.8)	(瓦当径) 15.0		N4/0 灰色	
153	瓦	軒平瓦	溝 101	(長) (13.9)	(幅) (15.0)	(瓦当厚) 6.0	N4/0 灰色	
154	瓦	軒平瓦	4a 層	(長) (10.5)	(幅) (12.9)		N6/0 灰色	
155	瓦	磚	溝 101	(長) 14.0	(幅) 10.9	(厚) (7.2)	N3/0 暗灰色 ~ 10YR8/2 灰白色	

附章 自然化学分析

平安京左京八条二坊五町の古環境および植物利用の検討

パリノ・サーヴェイ株式会社

松元 美由紀

はじめに

平安京左京八条二坊五町（京都市南区八条猪熊通八条上ル）の発掘調査では、平重盛が平安時代末期に構えた邸宅「小松殿」の一部とみられる庭園の池跡が検出されている。

本分析調査では、池跡埋積物とされる黒褐色シルト層とその下位の腐植質層を対象に、珪藻分析、花粉分析、種実遺体分析、樹種同定を実施し、特に池が埋まる直前の古環境および植物利用に関する情報を得る。

1. 試料

分析試料は、8C区の炭化米密集より炭化米試料、7D区のSG120の球果密集より球果試料、7D区のSE100南隣接部より土壌試料を、それぞれ採取した（図1）。

炭化米試料は、SE100より約2m北東に位置し、径約30cm、厚さ約5cmの黒色を呈する炭化米密集範囲より採取した炭化米包含土壌である。イネの状態およびイネ以外の分類群の確認を目的とした種実遺体分析を実施する。多量の炭化米は朮がついた良好な保存状態で、個々の向きは概ね区々である（図1-1）。発掘調査所見によれば、本地点は泉跡と考えられており、SG120球果密集よりもやや古い層準に該当するとされる。

球果試料は、SG120の黒褐色シルト層に確認された球果密集範囲より、保存状態が良好な球果を包含する土壌ごと採取し、水洗篩別した試料である。球果および球果以外の部位や分類群の確認を目的とした種実遺体分析を実施する。球果はSE100西隣接部で多く、東西約50cm範囲に10個以上が確認され、個々の向きは区々である（図1-3,4）。

土壌試料は、SE100南隣接部より、高さ約36cm、幅約23cmの範囲を2ブロックで採取した。ブロック試料を室内で観察した結果、下位より黒色腐植質砂質シルト、黒色腐植質粘土質シルト、黒色腐植質粘土、黒色砂礫混じりシルト質粘土、黒褐色シルト質粘土、黒褐色粘土の6層に分層された。ブロック試料の観察結果を図2に示す。なお、現地所見によると、最下位の黒色腐植質砂質シルトの下位には砂礫層が堆積しており、古墳時代の鴨川の洪水堆積物と想定されている。また、腐植質層の上位に堆積するシルト質粘土～粘土層は、池跡埋積物と想定されている。さらに粘土層の上位には砂礫層が堆積し、池を埋めた堆積物と想定されている。

分析に用いる試料は、各層より1点（上位より試料番号1～6）を採取した。このうち、試料番号1、2について珪藻分析を、試料番号1～6について花粉分析、種実遺体分析を実施する。また、試料番号6採取層準に認められた径6cmの芯持丸木1点について樹種同定を実施する。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

湿重約 5g をビーカーに量り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を 4～5 回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリユウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸 600 倍または 1000 倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が 200 個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200 個体が産出した後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot (2000)、Hustedt (1930-1966)、Krammer and Lange-Bertalot (1985～1991)、Desikachary (1987) などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の 3 適応性についても生態分類し表に示す。

堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石が 100 個体以上産出した試料について珪藻化石群集変遷図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、基本的に 1% 以上（産出種数により変更）の産出率を示す分類群についてのみ表示する（図中の + 印は総数 100 個体未満の場合の産出を示す）。表示する分類群は、分析試料全体で産出率の合計が 1% 以上の分類群である。また、図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示する。

塩分に対する適応性とは、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いか低いかといったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

pH に対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

流水に対する適応性とは、流れのある水域の基物（岩石・大型の藻類・水生植物など）に付着生育する種群であり、特に常時、流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、

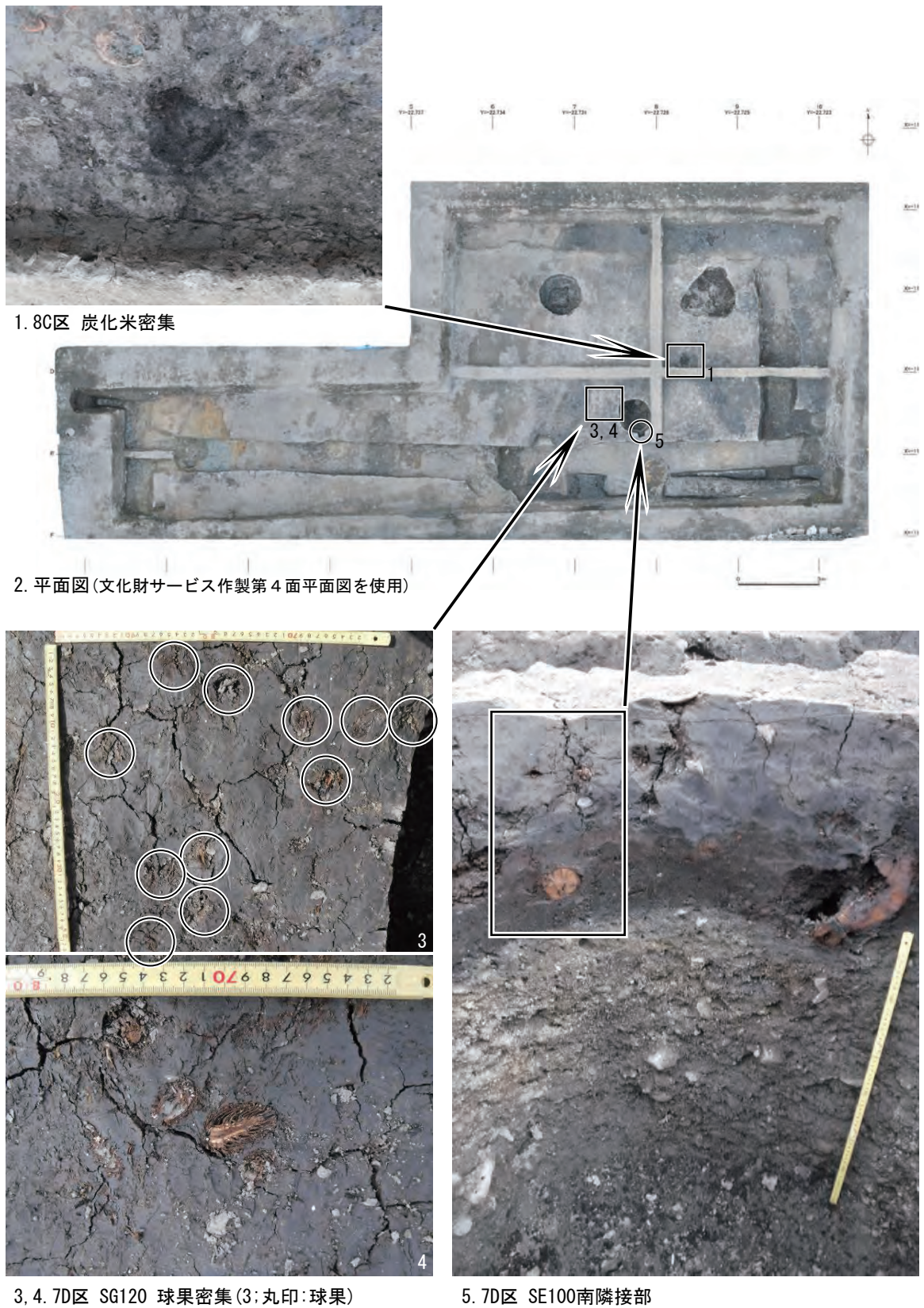


図1 分析資料採取位置

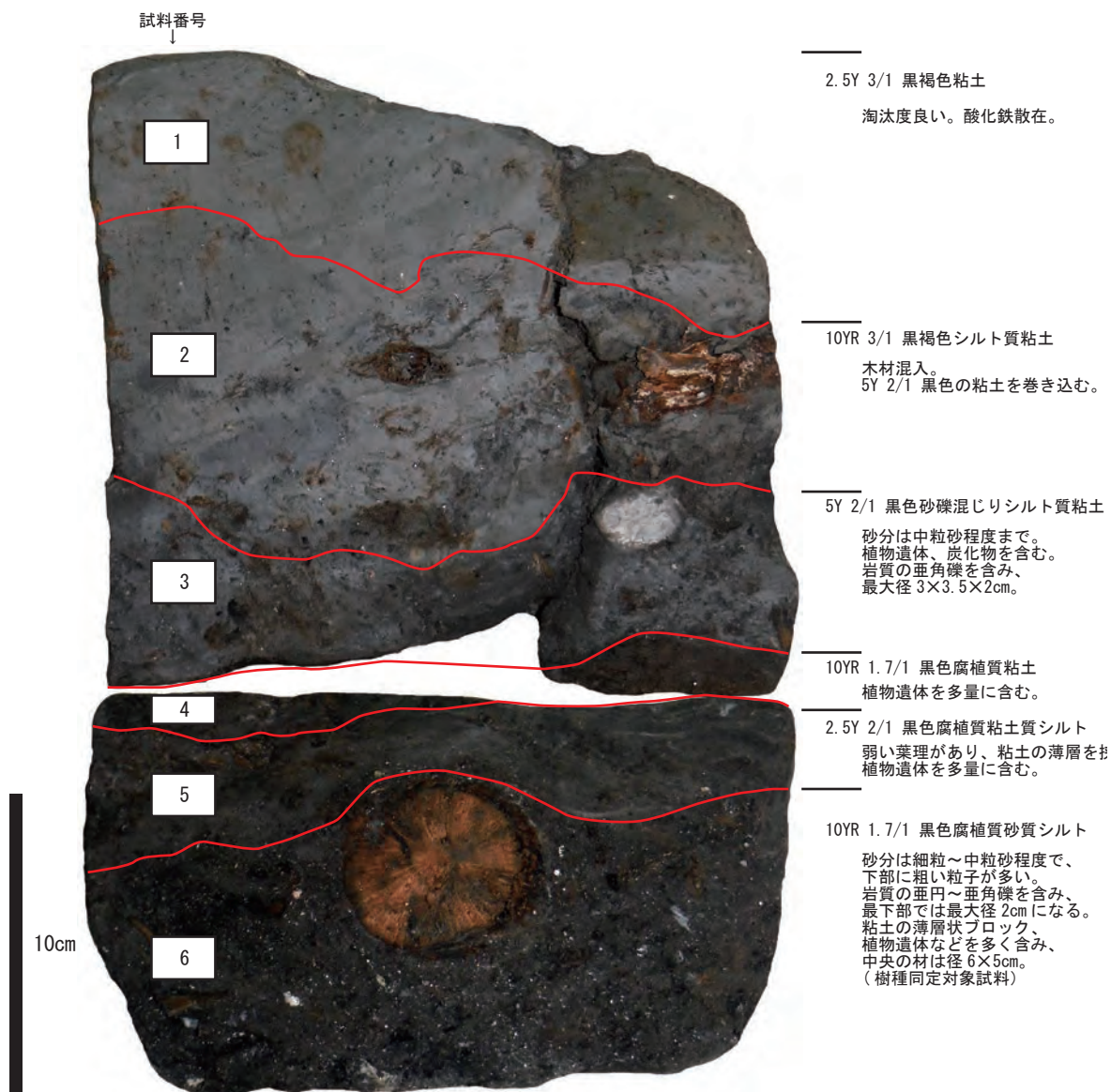


図2 7D区 SE100南隣接部の資料観察結果

逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

(2) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液）

処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 種実遺体分析

1) 水洗・抽出

試料の状態に応じて、以下の 2 方法を実施する。

・ 7D 区 SE100 南隣接部、SG120

SE100 南隣接部は、土壤試料から種実遺体を分離・抽出するために、試料 100cc を水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。水洗後の篩内の試料を粒径別にシャーレに移して、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実や葉などの大型植物遺体をピンセットで抽出する。なお、試料番号 1、2 は、マツ属複維管束亜属の葉の破片が多量確認されるため、頂部と基部（短枝）が残るものと、保存状態が良好なものを抽出する。SG120 は、現地で水洗・取り上げた試料をクリーニングする。その他、主に SE100 南隣接部で確認されない分類群を抽出する。

・ 8C 区 炭化米密集

炭化物主体の土壤試料から炭化種実を分離・抽出するために、試料 200g を常温乾燥させる。水を満たした容器に乾燥後の試料を投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径 0.5mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（約 20 回）。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料（炭化物主体）と水に沈んだ試料（砂礫主体）を粒径別に常温乾燥させる。

水洗乾燥後の試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実を抽出する。多量のイネ（炭化米・粃）は、主に 2mm 以上を抽出し、2～0.5mm は完形とイネ以外の分類群を精査・抽出する。

2) 同定

大型植物遺体の同定は、現生標本や笠原（1982）、椿坂（1983）、角野（1994）、石川（1994）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2012）、勝山（2015）等を参考に実施する。マツ属複維管束亜属の葉は、一部の横断面の切片を剃刀で採取し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入したプレパラートを実体顕微鏡とマイクロスコープ（KEYENCE 社製、VHX-1000）で観察し、樹種を同定する。

結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示す他、7D 区 SE100 南隣接部の大型植物遺体群集の

層位分布図で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数分類群間は、ハイフォンで結んで表示する。7区 SG120 は、SE100 南隣接部で確認される分類群のみ定性的な量比をプラス「+」で示し、SG120 で新たに確認された分類群を個数で示す。また、各分類群の写真を添付し、一部の種実の大きさをデジタルノギスで計測し、結果を一覧表に併記して同定根拠とする。

大型植物遺体以外の分析残渣は、一覧表の下部に定性的な量比をプラス「+」で示す。分析後は、大型植物遺体を分類群別に容器に入れ、7D 区の大型植物遺体は約 70% のエタノール溶液で液浸保存する。分析残渣は容器に入れて保管する。

(4) 樹種同定

剃刀を用いて木口（横断面）、柁目（放射断面）、板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表 1、図 3 に示す。2 試料から珪藻化石は産出したが、試料番号 1 の産出数は非常に少なかった。

試料番号 2 は、117 個体産出した。保存状態は壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。産出した分類群は、淡水生種を主にして、汽水生種および淡水～汽水生種を極低率に伴う種群で構成される。

本試料の淡水生の群集の特徴について、生態性（珪藻の 3 つの適応性：水中の塩分・pH・流水に対する適応性）を整理してみた場合、以下のような傾向が認められる。まず、塩分に対する適応性は、全体的に貧塩不定性種が優占する。次に、pH に対する適応性は、アルカリ性種が優占する。流水に対する適応性は、流水不定性種が優占する。また、本試料は水生珪藻が優先し、陸生珪藻は 10% 程度産出する。

特徴的に産出した種は、淡水生種で流水不定性種の *Cymbella tumida*、*Encyonema silesiacum*、*Gyrosigma acuminatum*、*Lemnicola hungarica* 等である。

試料番号 1 は、11 個体産出した。保存状態は壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。産出した種の生態性は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、*Eunotia* spp. 等である。

表 1. 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	7D 区 SE100 南隣接部	
	塩分	pH	流水		1	2
Nitzschia compressa (Bailey) Boyer	Meh			E1	-	1
Nitzschia levidensis var. salinarum Grunow	Meh			E1	-	1
Cyclotella meneghiniana Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	l-ph	L,S	-	1
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	1
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O	-	3
Cyclotella radiosa (Grun.) Lemmermann(syno.C. comta)	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	-	2
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	12
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-
Encyonema silesiacum (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	-	8
Eunotia praeurpta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	1
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	1
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	3
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	3
Gomphonema augur Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	U	-	2
Gomphonema parvulum (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	5
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	-	4
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2
Gyrosigma acuminatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind		-	21
Gyrosigma spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	3
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	1	6
Hantzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk	O,U	1	-
Lemnicola hungarica (Grun.) Round & Basson	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	12
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	-	3
Navicula exigua (Greg.) Muller	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1
Neidium affine (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ind	l-bi	O,U	1	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	-	2
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	-	2
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	N,O,U	-	1
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	2
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	-	2
Pinnularia lundii Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	3
Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	1
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	-	2
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	1
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	3
Sellaphora pupula (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S,U	1	1
海水生種					0	0
海水～汽水生種					0	0
汽水生種					0	2
淡水～汽水生種					0	2
淡水生種					11	113
珪藻化石総数					11	117

凡例

塩分：塩分濃度に対する適応性

- Euh : 海水生種
- Euh-Meh: 海水生種 - 汽水生種
- Meh : 汽水生種
- Ogh-Meh: 淡水生種 - 汽水生種
- Ogh-hil: 貧塩好塩性種
- Ogh-ind: 貧塩不定性種
- Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk: 貧塩不明種

pH: 水素イオン濃度に対する適応性

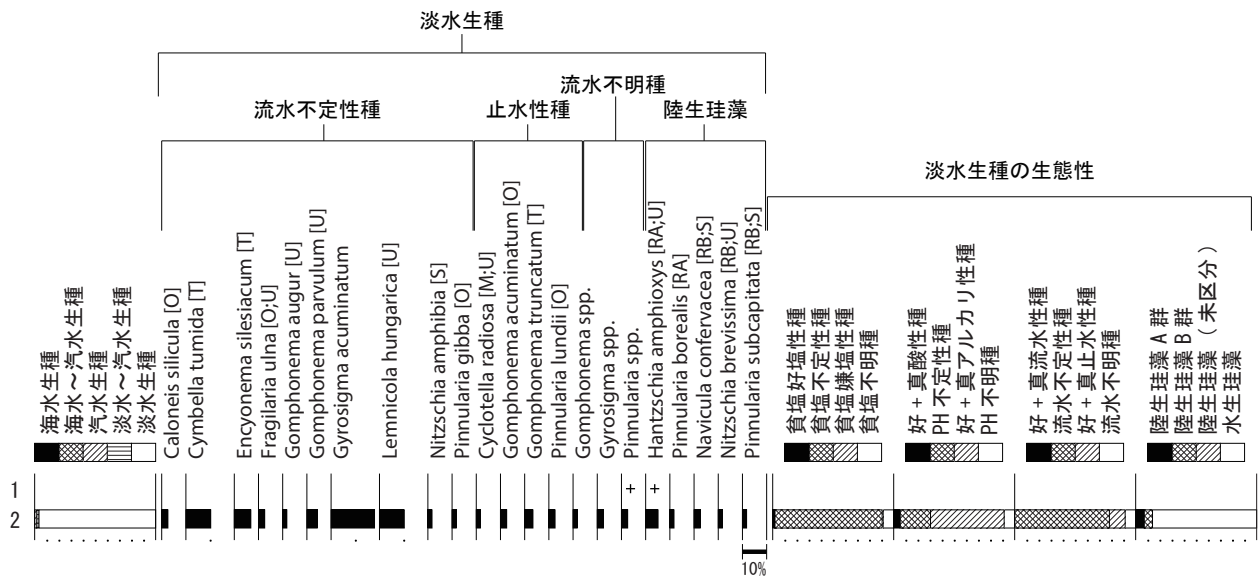
- al-bi: 真アルカリ性種
- al-il: 好アルカリ性種
- ind : pH 不定性種
- ac-il: 好酸性種
- ac-bi: 真酸性種
- unk : pH 不明種

流水：流水に対する適応性

- l-bi: 真止水性種
- l-ph: 好止水性種
- ind : 流水不定性種
- r-ph: 好流水性種
- r-bi: 真流水性種
- unk : 流水不明種

環境指標種

- A: 外洋指標種 B: 内湾指標種 C1: 海水藻場指標種 C2: 汽水藻場指標種
- A: 外洋指標種 B: 内湾指標種 C1: 海水藻場指標種 C2: 汽水藻場指標種
- E1: 海水泥質干潟指標種 E2: 汽水泥質干潟指標種 F: 淡水底生種群 (以上は小杉,1988)
- G: 淡水浮遊性種群 H: 河口浮遊性種群 J: 上流性河川指標種 K: 中～下流性河川指標種
- L: 最下流性河川指標種群 M: 湖沼浮遊性種 N: 湖沼沼沢湿地指標種 O: 沼沢湿地付着生種
- P: 高層湿原指標種群 Q: 陸域指標種群 (以上は安藤,1990)
- S: 好汚濁性種 U: 広適応性種 T: 好清水性種 (以上は Asai and Watanabe,1995)
- R: 陸生珪藻 (RA:A 群, RB:B 群, RI: 未区分、伊藤・堀内,1991)



海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

環境指標種

A: 外洋指標種 B: 内湾指標種 C1: 海洋藻場指標種 C2: 汽水藻場指標種 D1: 海水砂質干潟指標種 D2: 汽水砂質干潟指標種
 E1: 海水泥質干潟指標種 E2: 汽水泥質干潟指標種 F: 淡水底生種群 (以上は小杉, 1988) G: 淡水浮遊生種群 H: 河口浮遊性種群
 J: 上流性河川指標種 K: 中~下流性河川指標種 L: 最下流性河川指標種群 M: 湖沼浮遊性種 N: 湖沼沼沢湿地指標種 O: 沼沢湿地付着生種
 P: 高層湿原指標種群 Q: 陸域指標種群 (以上は安藤, 1990) S: 好汚濁性種 T: 好清水性種 U: 広適応性種 (以上はAsai & Watanabe, 1995)
 RI: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群; 伊藤・堀内, 1991)

図3 7D区 SE100南隣接部における主要珪藻化石群集の層位分布

(2) 花粉分析

結果を表2、図4に示す。いずれの試料からも花粉化石が豊富に産出し、保存状態も普通~やや悪い程度である。花粉化石群集はいずれも木本花粉の割合が高く、試料番号6~3と試料番号2、1で組成が異なる。

試料番号6~3はコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が多産し、モミ属、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、エノキ属-ムクノキ属なども多く認められる。その他ではクマシデ属-アサダ属、ブナ属、シイ属、ニレ属-ケヤキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が多く認められる。また、ガマ属、ツリフネソウ属、ゴキヅル属などの水湿地や河畔などに生育する種類も、僅かではあるが検出される。

試料番号2、1では、多産していたコナラ亜属、アカガシ亜属は減少し、マツ属（主にマツ属複維管束亜属）が多産するようになり、その傾向は上位の試料番号1に向かって顕著に認められる。その他ではモミ属、スギ属、ヤナギ属、エノキ属-ムクノキ属などを伴う。草本花粉はイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属などを伴う。その他、ガマ属、サジオモダカ属、イボクサ属などの水湿地生草本、サンショウモ、アカウキクサ属などの水生シダ類も確認された。栽培種は、試料番号2よりベニバナ属が確認された。この他、試料番号2より確認されたカキノキ属には、カキノキやマメガキなどの栽培種が含まれる。

(3) 種実遺体分析

結果を表3、図5に示す。3地点8試料を通じて、裸子植物3分類群（クロマツ、マツ属複維管

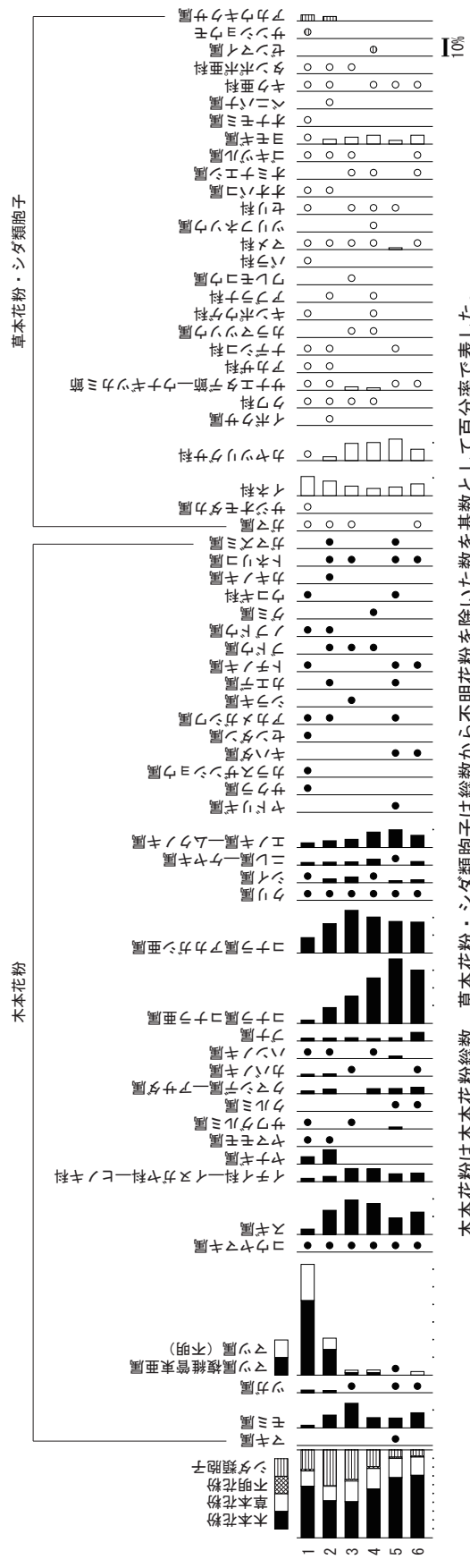
東亜属、ヒノキ) 114 個の葉・枝条、13 個の種実、被子植物 49 分類群 (ヒサカキ属、キイチゴ属、アカメガシワ、センダン、オモダカ科、ヒルムシロ属、コナギ近似種、ツユクサ、イボクサ、イネ、コムギ、ヒエ近似種、イヌビエ属、アワ、エノコログサ属、イネ科、アゼスゲ類 (A、B、他)、スゲ属、ハリイ属 (ヌマハリイ類、ハリイ類)、イヌホタルイ近似種、ホタルイ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、ミズ属、カラムシ属、タニツバ近似種、ヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、タデ科、スペリヒユ、ナデシコ科、アカザ属、ヒユ属、ミズオトギリ、キジムシロ類、カタバミ属、スマレ属、ミズユキノシタ、セリ科、シソ属—イヌコウジュ属、イヌコウジュ属、シロネ属、トウバナ属、ナス属、オミナエシ属、タカサブロウ) 1,359 個の種実の、合計 1,483 個の大型植物遺体が同定された。3 個は同定ができなかった。その他、マツ属複雑管束亜属? の雄花序?、広葉樹の葉、木材、炭化材、植物片、昆虫類、砂礫類、土器片が確認された。以下、地点別状況を記す。

・7D 区 SE100 南隣接部

6 試料 (試料番号 6 ~ 1) を通じて、木本 7 分類群 (針葉樹のクロマツ、マツ属複雑管束亜属、

表2 花粉分析結果

種 類	7D 区 SE100 南隣接部					
	1	2	3	4	5	6
木本花粉						
マキ属	-	-	-	-	1	-
モミ属	4	17	30	12	15	21
ツガ属	4	3	1	-	1	1
マツ属複雑管束亜属	111	34	3	3	1	-
マツ属 (不明)	54	15	3	3	1	5
コウヤマキ属	1	1	1	1	1	2
スギ属	8	32	42	36	25	31
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	5	7	16	15	12	12
ヤナギ属	11	19	-	-	-	-
ヤマモモ属	1	2	-	-	-	-
サワグルミ属	1	-	1	-	3	-
クルミ属	-	-	-	-	1	1
クマシデ属—アサダ属	4	6	-	6	8	9
カバノキ属	3	3	1	-	-	2
ハンノキ属	2	1	-	1	4	-
ブナ属	4	4	4	3	5	12
コナラ属コナラ亜属	5	21	33	53	98	74
コナラ属アカガシ亜属	23	39	52	42	48	43
クリ属	1	2	2	1	2	2
シイ属	2	5	7	1	3	4
ニレ属—ケヤキ属	4	4	4	7	2	5
エノキ属—ムクノキ属	7	9	10	18	27	17
ヤドリギ属	-	-	-	-	1	-
サクラ属	1	-	-	-	-	-
カラスザンショウ属	1	-	-	-	-	-
キハダ属	-	-	-	-	2	1
センダン属	1	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	1	2	-	-	1	-
シラキ属	-	-	1	-	-	-
カエデ属	-	1	-	-	1	-
トチノキ属	1	-	-	-	1	1
ブドウ属	-	1	2	2	-	-
ノブドウ属	1	1	-	-	-	-
グミ属	-	-	-	1	-	-
ウコギ科	1	-	-	-	1	-
カキノキ属	-	1	-	-	-	-
トネリコ属	-	2	1	-	1	1
ガマズミ属	-	1	-	-	1	-
草本花粉						
ガマ属	1	1	2	-	-	1
サジオモダカ属	1	-	-	-	-	-
イネ科	48	46	28	15	19	23
カヤツリグサ科	4	12	50	37	47	22
イボクサ属	-	1	-	-	-	-
クワ科	1	1	2	1	-	-
サナエタデ節—ウナギツカミ節	4	3	10	5	1	1
アカザ科	4	2	-	-	-	-
ナデシコ科	1	1	-	-	1	-
カラマツソウ属	-	-	2	1	-	-
キンボウゲ科	1	-	-	1	-	-
アブラナ科	-	1	-	1	-	-
ワレモコウ属	-	-	1	-	-	-
バラ科	1	-	-	-	-	-
マメ科	3	1	1	1	4	3
ツリフネソウ属	-	-	-	1	-	-
セリ科	1	-	1	1	3	-
オオバコ属	1	2	-	-	-	-
オミナエシ属	-	-	1	2	-	1
ゴキツル属	1	1	3	-	-	1
ヨモギ属	2	15	20	18	8	17
オナモミ属	1	-	-	-	-	-
ベニバナ属	-	1	-	-	-	-
クキ亜科	1	1	-	1	2	2
タンポポギ科	1	2	1	-	-	-
不明花粉						
不明花粉	8	3	10	8	6	4
シダ類胞子						
ゼンマイ属	-	-	-	1	-	-
サンショウモ	1	-	-	-	-	-
アカウキクサ属	15	14	-	-	-	-
他のシダ類胞子	83	212	175	69	32	24
合 計						
木本花粉	262	233	214	205	267	244
草本花粉	77	91	122	85	85	71
不明花粉	8	3	10	8	6	4
シダ類胞子	99	226	175	70	32	24
合計 (不明を除く)	438	550	511	360	384	339



木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。
丸印は1%未満を示す。

図4 7D区 SE100南隣接部における花粉化石群集の層位分布

ヒノキ、広葉樹のヒサカキ属、キイチゴ属、アカメガシワ、センダン) 108 個の葉・枝条、5 個の種実、草本 38 分類群 (オモダカ科、ヒルムシロ属、イボクサ、イネ、コムギ、アワ、エノコログサ属、アゼスゲ類 (A、B、他)、スゲ属、ハリイ属 (ヌマハリイ類、ハリイ類)、イヌホタルイ近似種、ホタルイ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、ミズ属、カラムシ属、タニソバ近似種、ポントクタデ近似種、タデ科、スベリヒユ、ナデシコ科、ヒユ属、ミズオトギリ、キジムシロ類、カタバミ属、スマレ属、ミズユキノシタ、セリ科、シソ属—イヌコウジュ属、イヌコウジュ属、シロネ属、トウバナ属、ナス属、オミナエシ属、タカサブロウ) 867 個の種実の、合計 980 個が同定された。3 個が同定できなかつた。分析残渣は、木材と植物片を主体とし、炭化材、昆虫類、砂礫類が確認された。試料番号 6～4 は特に植物片が多く、試料番号 6、5 は木材も多い。試料番号 3～1 では植物片が減少する。

試料各 100cc における大型植物遺体の出土個数は、試料番号 6 が 215 個、試料番号 5 が 170 個、試料番号 4 が 298 個、試料番号 3 が 99 個、試料番号 2 が 117 個、試料番号 1 が 81 個である。試料番号 4 が最も多く、試料番号 6、5 と次いで多い。

大型植物遺体群集組成は、試料番号 6～4 と試料番号 3～1 で大きく異なる。試料番号 6～4 は、多くの水湿地生草本から構成され、アゼスゲ類 A やスゲ属、ポントクタデ近似種の多産に特徴づけられる。一方、試料番号 3～1 は、これらの水湿地生草本が激減し、試料番号 3、2 における栽培種のイネの多産と、試料番号 2、1 におけるクロマツを含むマツ属複維管束属の葉の多産に特徴づけられる。

栽培種は、試料番号 4～1 よりイネ 121 個、試料番号 3 よりコムギ 1 個、アワ 1 個が確認され、イネ籾の一部を除いて炭化している。また、イネ、アワには籾が付着する状態が確認される。その他、試料番号 2、1 で多産するクロマツ含むマツ属複維管束属と、試料番号 1 のヒノキ、センダンは、植栽樹に由来する可能性が高い。

栽培種と植栽の可能性を除いた分類群は、木本は極めて少なく、試料番号 6 から落葉高木のアカメガシワ、落葉低木のキイチゴ属、試料番号 5 から常緑小高木～低木のヒサカキ属、試料番号 1 からアカメガシワが確認されるのみである。草本は、水湿地生植物を主体とし、沈水～浮葉植物のヒルムシロ属、抽水～湿生植物のオモダカ科、イヌホタルイ近似種、ホタルイ属、イボクサ、アゼスゲ類 A、アゼスゲ類 B、アゼスゲ類、ハリイ属 (ヌマハリイ類)、ハリイ属 (ハリイ類)、ミズ属、タニソバ近似種、ポントクタデ近似種、ミズオトギリ、ミズユキノシタ、シロネ属、トウバナ属、タカサブロウが確認され、試料番号 6～4 で分類群数、個数ともに多い。特に試料番号 6～4 は、アゼスゲ類 A が多く、試料番号 4 で極多産する。一方、ポントクタデ近似種は試料番号 6 で最も多く、上位に向かい減少する。

一方、湿った場所にも乾いた場所にも生育が可能な分類群を含む中生植物は、スゲ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、カラムシ属、タデ科、スベリヒユ、ナデシコ科、キジムシロ類、カタバミ属、スマレ属、セリ科、シソ属—イヌコウジュ属、イヌコウジュ属、ナス属、オミナエシ属が確認され、試料番号 6～4 でのスゲ属の多産が大半を占める。

表 3. 種実遺体分析結果 (1)

分類群	部位・状態		7D 区						SG120	8C 区 炭化米 密集	備考
			SE100 南隣接部								
			1	2	3	4	5	6			
木本											
クロマツ	葉	破片	1	1	-	-	-	-	-	-	横断面切片作製観察
マツ属複雑管束亜属	短枝・葉	破片	13	11	-	-	-	-	+++	-	
	葉 (頂部)	破片	8	8	-	-	-	-	+++	-	
	葉	破片	40	24	-	-	-	-	+++	-	状態良好な破片を対象
	球果	破片	-	-	-	-	-	-	5	-	1 個ネズミ類食痕確認
	種子	破片	-	-	-	-	-	-	7	-	
	種子翼	破片	-	-	-	-	-	-	1	-	
マツ属複雑管束亜属?	雄花序?	破片	-	-	-	-	-	-	++	-	
ヒノキ	枝條・葉	完形	2	-	-	-	-	-	6	-	
ヒサカキ属	種子	完形	-	-	-	-	1	-	-	-	
キイチゴ属	核	破片	-	-	-	-	-	1	-	-	
アカメガシワ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	2	-	
		破片	1	-	-	-	-	-	2	-	
センダン	核	完形	1	-	-	-	-	-	-	-	長さ 11.90mm, 径 8.60mm
草本											
オモダカ科	種子	完形	1	-	-	-	-	-	-	-	
ヒルムシロ属	果実	破片	-	-	-	-	-	1	-	-	
コナギ近似種	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	16	
	炭化種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	1	
ツユクサ	炭化種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	1	
イボクサ	種子	完形	-	-	-	-	1	1	-	1	
	炭化種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	4	
イネ	炭化果序 (穂)	破片	-	-	-	-	-	-	-	5	
	炭化穂 (基部)	破片	-	5	4	-	-	-	-	17	
	炭化穂	破片	6	37	20	-	-	-	-	17	
	穂 (基部)	破片	-	3	9	-	-	-	-	-	
	穂	破片	-	4	15	-	-	-	-	16	
	炭化穂・玄米	完形	-	-	-	-	-	-	-	127	
		完形未満	-	-	2	-	-	-	-	64	
		破片	-	-	-	-	-	-	-	17	
	炭化玄米	完形	-	2	-	-	-	-	-	78	完形最大:長さ 5.49, 幅 3.35, 厚さ 2.59mm
		完形未満	-	-	1	-	-	-	-	57	完形最小:長さ 4.42, 幅 1.59, 厚さ 1.11mm
		破片	1	6	5	1	-	-	-	38	
イネ主体	炭化穂・玄米主体	破片	-	-	-	-	-	-	-	+++	
コムギ	炭化穎果	破片	-	-	1	-	-	-	-	-	状態不良, 残存長 2.78mm
ヒエ近似種	炭化果実・穎果	完形	-	-	-	-	-	-	-	3	長さ 2.61mm, 幅 1.93mm, 厚さ 1.52mm
イヌビエ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	1	長さ 3.71mm, 幅 1.68mm
アワ	炭化果実・穎果	完形	-	-	1	-	-	-	-	-	状態不良
エノログサ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	1	-	長さ 3.28mm, 幅 2.07mm
イネ科	炭化果実・穎果	完形	-	-	-	-	-	-	-	7	複数種
アゼスゲ類 A	果実	完形	-	5	7	143	38	27	++	-	倒卵状 2 面体
		破片	1	1	6	68	30	16	-	-	
アゼスゲ類 B	果実	完形	-	-	-	1	4	1	-	-	円状 2 面体
		破片	-	-	2	1	5	-	-	-	
アゼスゲ類	果胞	破片	-	-	-	1	-	-	-	-	
スゲ属	果実	完形	-	1	2	21	21	46	-	-	3 面体
		破片	-	1	10	41	33	48	-	-	
ハリイ属 (ヌマハリイ類)	果実	完形	-	-	-	-	1	1	-	-	光沢
ハリイ属 (ハリイ類)	果実	完形	-	-	-	-	-	3	-	-	粗面
イヌホタルイ近似種	果実	完形	-	-	-	-	2	1	-	-	
ホタルイ属	果実	完形	1	-	3	-	1	1	+	-	
		破片	-	-	1	3	1	6	-	-	
カヤツリグサ属	果実	完形	-	-	-	-	-	1	+	-	
カヤツリグサ科	果実	完形	1	-	-	2	-	-	+	-	楕円状 2 面体
ミズ属	果実	完形	-	1	1	1	2	2	-	-	
カラムシ属	果実	完形	-	1	1	-	-	1	-	-	
クニツバ近似種	果実	破片	-	-	-	-	-	1	-	-	
ヤナギタデ近似種	炭化果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	9	
ボンクトクダデ近似種	果実	完形	-	-	-	-	1	6	-	-	
		破片	-	-	2	3	20	36	-	-	
クダ科	果実	完形	-	-	-	-	-	1	-	-	3 面体, 平滑光沢
		破片	-	-	-	-	-	1	-	-	
スベリヒユ	種子	完形	-	1	-	-	-	-	+	-	
ナデシコ科	種子	完形	1	-	-	-	-	-	-	-	
アカザ属	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	1	
ヒユ属	種子	完形	-	-	-	-	-	-	2	-	
ミズオトギリ	炭化種子	完形	-	-	-	-	-	2	-	-	
		破片	-	2	3	7	4	3	-	-	
		破片	-	-	-	2	-	1	-	-	
キジムシロ類	核	完形	-	1	-	-	-	1	-	-	
カタバミ属	種子	完形	-	1	-	-	-	-	-	-	
		破片	1	-	-	-	-	-	-	-	
スマレ属	種子	破片	-	-	-	-	-	1	-	-	
ミズユキノシタ	種子	完形	-	-	-	-	2	2	-	-	
セリ科	果実	完形	-	1	1	-	-	-	-	-	

表 3. 種実遺体分析結果 (2)

分類群	部位・状態		7D 区						SG120	8C 区 炭化米 密集	備考
			SE100 南隣接部								
			1	2	3	4	5	6			
シソ属—イヌコウジュ属	果実	完形	-	-	-	1	-	2	-	-	6: 長さ 1.68mm
		破片	-	-	1	1	1	-	-	-	
イヌコウジュ属	果実	完形	-	-	1	-	-	-	-	-	長さ 0.93mm
シロネ属	果実	完形	-	-	-	-	1	1	-	-	
トウバナ属	果実	完形	1	-	-	-	-	-	-	-	
ナス属	種子	完形	-	-	-	-	-	-	1	-	長さ 1.94mm, 幅 2.28mm, 毛残存
オミナエシ属	果実	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	
タカサプロウ	果実	破片	1	-	-	-	-	-	-	-	
不明	種実	破片	-	1	1	-	-	-	-	-	断面柵状
	種実?	完形	-	-	-	-	1	-	-	-	
合計			66	44	-	-	1	2	23	-	
木本葉・種実			15	73	99	298	169	213	4	480	
草本種実			-	1	1	-	1	-	-	-	
不明			81	117	99	298	170	215	27	480	
合計 (不明を除く)											
その他											
広葉樹	葉		-	-	-	-	-	-	+	-	
木材			-	-	-	-	++	+++	+++	-	
炭化材			+	+	+	+	+	+	-	+++	8C 区: イネ科等草本主体
植物片			++	++	++	+++	+++	+++	+++	-	SG120: ハエ類蛹含む
昆虫類			+	+	+	+	+	+	++	+	
砂礫類			++	++	++	-	++	++	++	++	
土器片			-	-	-	-	-	-	-	1	
分析量			100	100	100	100	100	100	現地 取上	-	容積 (cc)
			146	153	139	109	119	122		200	湿重 (g)

1) 8C 区炭化米密集: 試料乾燥後水洗、多量のイネは、主に 2mm 以上を抽出。2-0.5mm は完形とイネ以外を抽出。

2) 「+」: 少量、「++」: 中量、「+++」: 多量。

このうち、試料番号 6 ~ 4 で確認されたシソ属—イヌコウジュ属の果実は、硬実で最長 1.68mm (試料番号 6) を測る。シソ属には、栽培種で軟実のエゴマと硬実のシソのほかに、硬実の雑草型エゴマがあり、雑草型エゴマの果実の大きさはエゴマとシソの中間型を示す (新田, 2001)。また、シソ属と野生種のイヌコウジュ属の果実の大きさの変異も連続的である。出土果実は、笠原 (1982) の基準 (長さ 1.4 ~ 1.5mm、幅 1.1 ~ 1.2mm をシソ、長さ 2.0 ~ 2.8mm、幅 1.8 ~ 2.5mm をエゴマ) に基づくと、シソの他に硬実の雑草型エゴマ、野生種のイヌコウジュ属の可能性がある。ただし、他の炭化穀類との出土状況と異なることから、今回は栽培の可能性から外している。

・7D 区 SG120

現地で採取した針葉樹のマツ属複維管束亜属の球果片のうち、1 個に齧歯類によると考えられる食痕が確認された。その他、多量のマツ属複維管束亜属の葉・短枝をはじめ、種子、種子翼、雄花序? などの複数部位が確認された。他の分類群は、針葉樹のヒノキの枝条や広葉樹のアカメガシワ、草本で栽培種のイネ (粃・炭化玄米)、抽水植物のホタルイ属、湿生植物のアゼスゲ類 A、中生植物のエノコログサ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、スベリヒユ、ヒユ属、ナス属などの種実が確認された。分析残渣は木材、植物片を主体とし、広葉樹の葉片、昆虫類 (ハエ類の蛹を含む)、砂礫類などが確認された。

・8C 区 炭化米密集

試料 200g より、栽培種のイネの炭化果序 (穂) 5 個、炭化粃 (内外穎) 34 個、粃 16 個、粃・玄米 208 個、玄米 (穎果) 173 個の、計 436 個の他、栽培の可能性のあるヒエ近似種の炭化果実・穎果 3 個、イヌビエ属の果実 1 個、抽水性草本のコナギ近似種の種子 16 個、炭化種子 1 個、イボクサの種子 1 個、炭化種子 4 個、湿生草本のヤナギタデ近似種の炭化果実 9 個、中生草本のツユ

クサの炭化種子1個、イネ科の炭化果実・穎果7個、アカザ属の種子1個の、計480個が同定された。分析残渣はイネ主体の他、多量の炭化材、昆虫類、砂礫類、土器片1個が確認された。炭化材は、イネ科等草本を主体とし、木本も含む。

炭化種実群は、イネの極多産に特徴づけられる。イネは籾が残る良好な保存状態が多く、表面に針状の毛が残るものや外穎の頂部に芒（のぎ）が残るもの、稲穂片の状態も確認される。今回、炭化玄米（炭化米）のまとまった個数を対象とした計測には至らなかったが、佐藤（1988）の基準による短粒小型を主体とし、長粒や極々小型は少ない印象である。今回確認される最大最小2個の計測値は、最大は長さ5.49mm、幅3.35mm、厚さ2.59mmを測り、粒大が18.39、粒形が1.64となり、短粒・中型に該当する。最小は長さ4.42mm、幅1.59mm、厚さ1.11mmを測り、粒大が7.03、粒形が2.78となり、長粒・極々小型に該当する。

(4) 樹種同定

観察の結果、試料番号6採取層準に認められた木材（芯持丸木）は、コナラ亜属クヌギ節に同定された。以下、形態的特徴を記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*） ブナ科

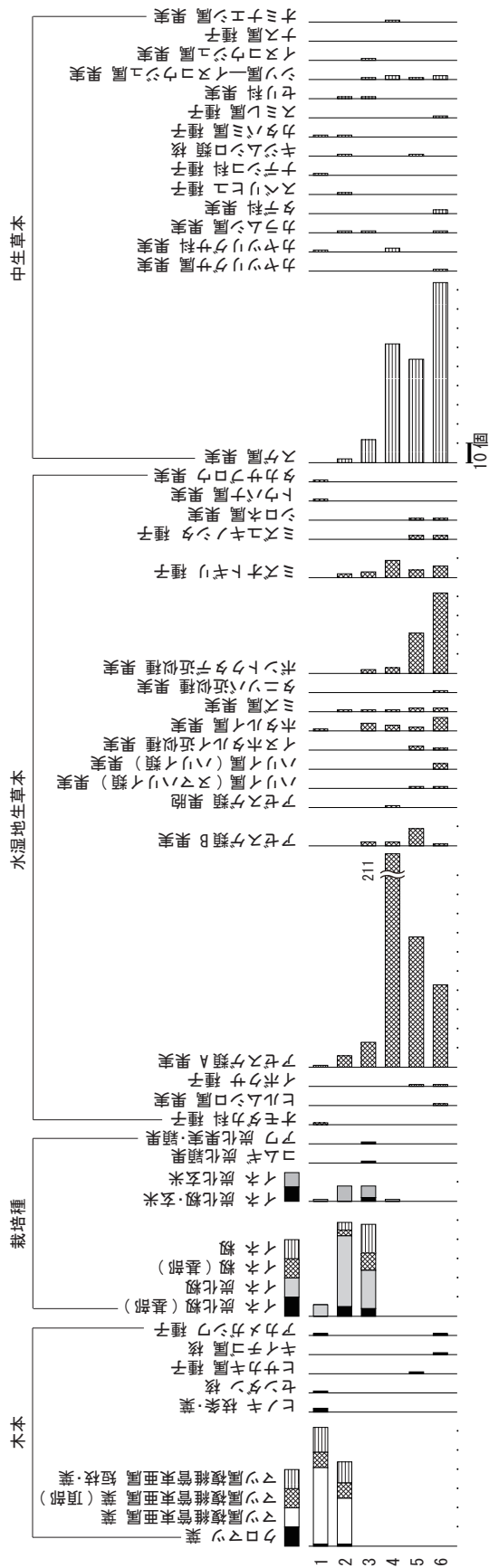
環孔材で、孔圏部は1列、孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、10細胞高前後のものと同列放射組織とがある。

4. 考察

(1) 7D区 SE100南隣接部における古環境変遷

現地所見、試料観察結果、および自然科学分析結果をもとに、SE100南隣接部における古環境変遷を検討する。古墳時代とされる鴨川の洪水堆積物の直上に認められた腐植質層（試料番号6～4）は、下部（試料番号6）が最大径2cmほどの亜円～亜角礫を含む砂質シルトからなり、中～上部が弱い葉理が認められる粘土質シルト、最上部が粘土となり、上方に向かって細粒化する傾向がある。このことから、下部では引き続き鴨川などからの氾濫の影響で砂礫が運搬されるような状況がしばしばあり、径の大きな材などが運搬されたと考えられる。中部～上部では弱い葉理が認められることから氾濫などの影響が少なくなり、さらに最上部ではより安定した堆積環境が推測される。

樹種同定の結果、下部に認められた材はコナラ属コナラ亜属クヌギ節であった。コナラ亜属クヌギ節は、里山林を構成する種類で、人里近くに多い樹木である。また、湿地を好み、萌芽による再生が容易なため、氾濫による障害にも強く、河川沿いにも多い。花粉分析結果からも、試料番号6～4でコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が多産し、モミ属、スギ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科などの針葉樹、エノキ属—ムクノキ属などの広葉樹も多く認められる。コナラ亜属は前述のクヌギ節で述べたように河川沿いなどに多く、エノキ属—ムクノキ属やクマシデ属—アサダ属、ハンノキ属、ニレ属—ケヤキ属なども同様である。また、アカガシ亜属はシ



堆積物 100cc に含まれる個数を示す。

図5 7D区 SE100南隣接部における大型植物遺体群集の層位分布

イ属などとともに暖温帯性常緑広葉樹林を構成する要素である。これらのことから、調査区周辺の森林植生はアカガシ亜属などからなる広葉樹林が分布し、部分的にモミ属、スギ属などの針葉樹も林分を形成していたと思われる。また、鴨川をはじめとする周辺河川沿いなどにコナラ亜属クヌギ節、エノキ属—ムクノキ属などの落葉広葉樹も分布していたと推測される。草本類では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属など、開けた明るい場所に生育する種類が確認されたことから、周辺の草地植生を反映していると考えられる。

種実遺体分析の結果では、試料番号6～4からアゼスゲ類Aやスゲ属、ボントクタデ近似種をはじめ、多くの水湿地生草本種実が確認された。木本は極めて少なく、試料番号6から落葉高木のアカメガシワ、落葉低木のキイチゴ属、試料番号5から常緑小高木～低木のヒサカキ属が確認されるのみであることから、調査地点近傍にまとまった林分は存在せず、明るく開けた水湿地環境と推測される。また、沈水～浮葉植物のヒルムシロ属などの水湿地生植物の組成をみると、試料番号6、5では水深が僅かに深く、試料番号4に向かって浅くなった可能性がある。

腐植質層の直上に認められる黒色砂礫混じりシルト質粘土（試料番号3）では、花粉化石群集は腐植質層と大きな変化はなかった。よって、周辺植生に変化はなく、同様に河川沿いやその周囲の森林植生を反映していると考えられる。一方、大型植物遺体群集は、腐植質層で多産した水湿地生草本が激減し、栽培種のイネの多産で特徴づけられる。イネ以外にも、コムギ、アワなどの栽培種が確認された。これらは邸宅で利用された植物質食糧と示唆される。これらの穀類は、イネ籾の一部を除いて炭化しており、イネ、アワには籾が付着することから、籾がついた状態で火を受けたとみなされる。栽培種以外の草本類は、水湿地生植物のホタルイ属、アゼスゲ類A、アゼスゲ類B、ミズ属、ボントクタデ近似種、ミズオトギリ、抽水植物のスゲ属、カラムシ属、セリ科、シソ属—イヌコウジュ属、イヌコウジュ属が確認されるが、いずれも少量で特定の分類群の多産はみられない。これらのことから、周辺植生に大きな変化はなかったものの、池跡と考えられている調査地点では、水域環境が大きく変化したことが窺える。

その上位の黒褐色シルト質粘土～粘土（試料番号2、1）では、花粉分析、種実遺体分析の結果のいずれも、マツ属複維管束亜属を含むマツ属の多産が顕著になる。種実遺体分析で認められたマツ属複維管束亜属の葉にはクロマツも含まれていた。クロマツは、海岸近くが適地とされるが、砂防や防風を目的とした植栽として古くから植林される有用樹である。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は、本州にはクロマツ、アカマツとこれらの種間雑種が分布し、生育の適応範囲が広く、尾根筋や岩上、海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また、極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育することから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。さらに有用性や樹形の美しさなどから植栽されることもしばしばあり、平安京の庭園でも植栽されていたことが、文献等の調査により明らかにされている（飛田,2002）。今回確認されたクロマツを含むマツ属は、池跡の極近傍に生育していたと推測され、邸宅内の植栽樹に由来する可能性が高い。その他の植栽の可能性は、ヒノキ（イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科）、サクラ属、センダン（属）、カエデ属、ウコギ

科、カキノキ属、ガマズミ属などが挙げられる。また、ヤナギ属は河畔林の代表的な種類であるが、護岸の土留などとして利用されることもあることから、周辺で植栽されていた可能性がある。その他、栽培種では、前述のイネの種実やベニバナ属の花粉が確認され、利用が示唆される。ベニバナ（属）は布の染料や口紅、漢方薬等の生活用品に由来する可能性が高い。

栽培種と植栽の可能性を除いた分類群は、木本はモミ属、スギ属などの針葉樹、アカガシ亜属、シイ属などの常緑広葉樹、コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属、エノキ属—ムクノキ属、アカメガシワ（属）などの落葉広葉樹の生育が窺える。草本類では、イネ科、スゲ属、カヤツリグサ科、カラムシ属、サナエタデ節—ウナギツカミ節、アカザ科、スベリヒユ、ナデシコ科、カタバミ属、マメ科、セリ科、ヨモギ属などの中生草本が検出された。これらは邸宅内の草地植生を反映している可能性がある。

池内の環境についてみると、試料番号 2、1 の花粉化石や種実遺体では、浮遊植物のサンショウモ、アカウキクサ属をはじめ、抽水植物のガマ属、サジオモダカ属（オモダカ科）、イボクサ属、ホタルイ属、湿生植物のアゼスゲ類 A、ミズ属、ミズオトギリ、トウバナ属、タカサブロウが確認された。種実遺体の検出が少ないものの、これらの水湿地生植物が池内やその周囲に生育していたと考えられる。

一方、珪藻分析の結果では、試料番号 2 と 1 で群集組成が異なる。試料番号 2 から産出した種は、淡水生種で流水不定性種の *Cymbella tumida*、*Encyonema silesiacum*、*Gyrosigma acuminatum*、*Lemnicola hungarica* 等である。産出した種の生態性について述べると、流水不定性種の *Cymbella tumida* は、一般に貧塩不定、好アルカリ性種、流水不定の広域頒布種であるが沼沢湿地に普遍的に認められる。また、Asai and Watanebe (1995) によると好清水性種とされる。同じく、流水不定性種の *Encyonema silesiacum* は、沼沢地から湿地等の水域に広く生育する種である。淡水生種で流水不定性種の *Gyrosigma acuminatum* は、淡水生で塩分不定、好アルカリ性、流水不定とされるが、淡水では淀んだ止水域や汽水域からも見出される種である。流水不定性種の *Lemnicola hungarica* は、付着性で池や流れの弱い川などで浮葉植物の葉に付着して生育する場合が一般的である。中汚濁耐性種（小林ほか,2006）とされ、水田からも特徴的に出現する（田中,2002）ことから、概ね沼沢湿地性の種と考えられる。以上の珪藻化石の特徴から、黒褐色シルト質粘土からは、沼沢湿地に生息する種が複数種産出すること、やや塩濃度が高まる水域に生息する種が産出したこと、汚濁性種の産出が認められたことから、水の出入りの少ない閉鎖された湿地～沼沢湿地環境であったと推定され、池跡埋積物と想定される所見と調和的である。

池が埋まる直前の堆積物と想定されている試料番号 1 では、産出した珪藻化石が少なかったため、直接的な堆積環境の推定は困難である。経験的には、堆積後に好氣的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。よって、本試料の堆積時に取り込まれた珪藻化石の殆どは、堆積後に分解・消失した可能性が高い。わずかに産出した *Eunotia* spp. は数種類で構成されるが、本属はいずれも湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。花粉化石や種実遺体の産状を考え合わせると、黒色粘土が堆積した頃も湿地的環境であった可能

性があるが、堆積後の環境が試料番号2とは大きく異なっていたと推定される。

(2) 7D 区 SG120 の球果密集

本試料からは、針葉樹のマツ属複維管束亜属の多くの球果の他、極めて多くの葉・短枝や種子、種子翼、雄花序?などの複数部位が確認された。極近傍に生育していたと考えられる。SE100 南隣接部の試料番号2、1より出土した葉にクロマツを含むことから、邸宅内に植栽されていたクロマツに由来する可能性が高い。多くの複数部位が短期間に埋積したと示唆され、伐採等の人為的行為に由来する可能性もあろう。また、出土球果には球果鱗片を剥がして種子を食べたと考えられる痕跡が確認され、ネズミ類やニホンリス、ムササビなどの齧歯類による食痕の可能性が高い。

その他、針葉樹のヒノキの枝条や広葉樹のアカメガシワの種子、栽培種のイネ、抽水植物のホタルイ属、湿生植物のアゼスゲ類 A、中生植物のエノコログサ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、スベリヒユ、ヒユ属、ナス属の種子、多量の木材や植物片の他、広葉樹の葉片、ハエ類の蛹を含む昆虫類などが確認され、周辺の水湿地環境を反映していると考えられる。

(3) 8C 区の炭化米密集

本試料からは、多量のイネの他、栽培の可能性のあるヒエ近似種、イヌビエ属、抽水植物のコナギ近似種、イボクサ、湿生植物のヤナギタデ近似種、中生草本のツユクサ、イネ科、アカザ属などの草本種実や、イネ科（おそらくイネ）等草本を主体とする多量の炭化材、昆虫類、砂礫類、土器片が確認された。

多量確認された穀類のイネは、利用された植物質食糧と示唆される。雑穀類のヒエの利用の可能性も推測される。炭化穀粒は多量の朮がついた状態で、毛が残るものや芒が残るもの、稲穂片の状態も確認されたことから、脱稔（だっぷ; 籾殻を取り去る）前の段階で火を受けたとみなされ、果序（稲穂）の状態でも火を受け残存した可能性がある。また、極めて良好な保存状態を考慮すると、炭化・埋積した後の移動は殆どなかったとみなされる。焼土等を伴わないため、炭化穀粒がその場で火を受けた可能性は低く、別の場所で火を受けた残滓が持ち込まれたと考えられる。

穀類以外の分類群は、水湿地生植物を主体とする草本のみであることから、堆積域は浅い水湿地と示唆され、泉跡と考えられる調査所見と調和的である。また、一部炭化していることから火を受けた可能性が高いが、どのような状況で水湿地生草本種実までもが火を受けたかは不明である。

本分析調査で得られた堆積環境、古植生、植物利用に係る資料は、発掘調査の成果や文献史学の研究成果などと総合的に検討することが望まれる。

引用文献

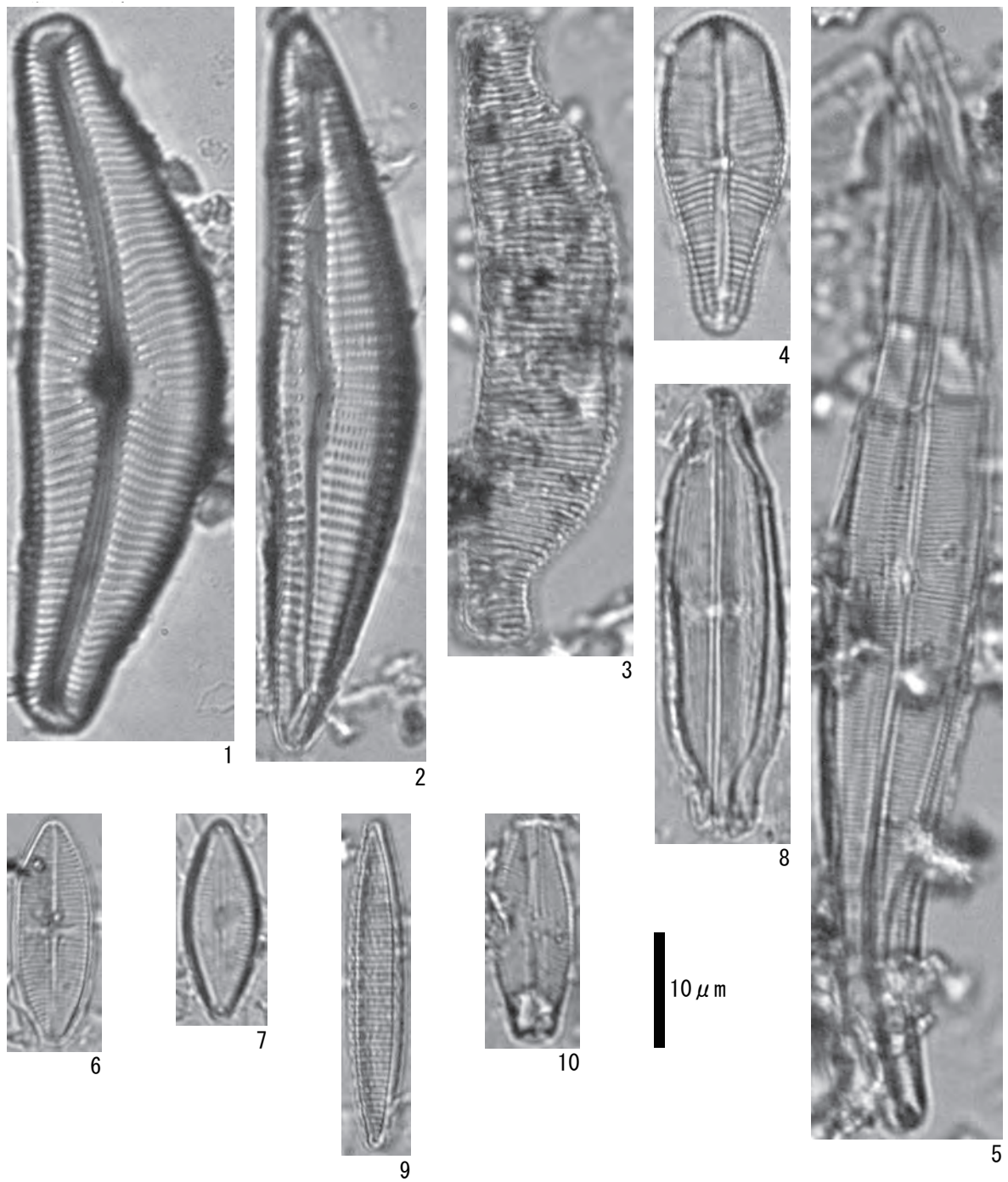
安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.

Asai, K. and Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35 - 47.

Desikachary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, 1-13, Plates, 401-621.

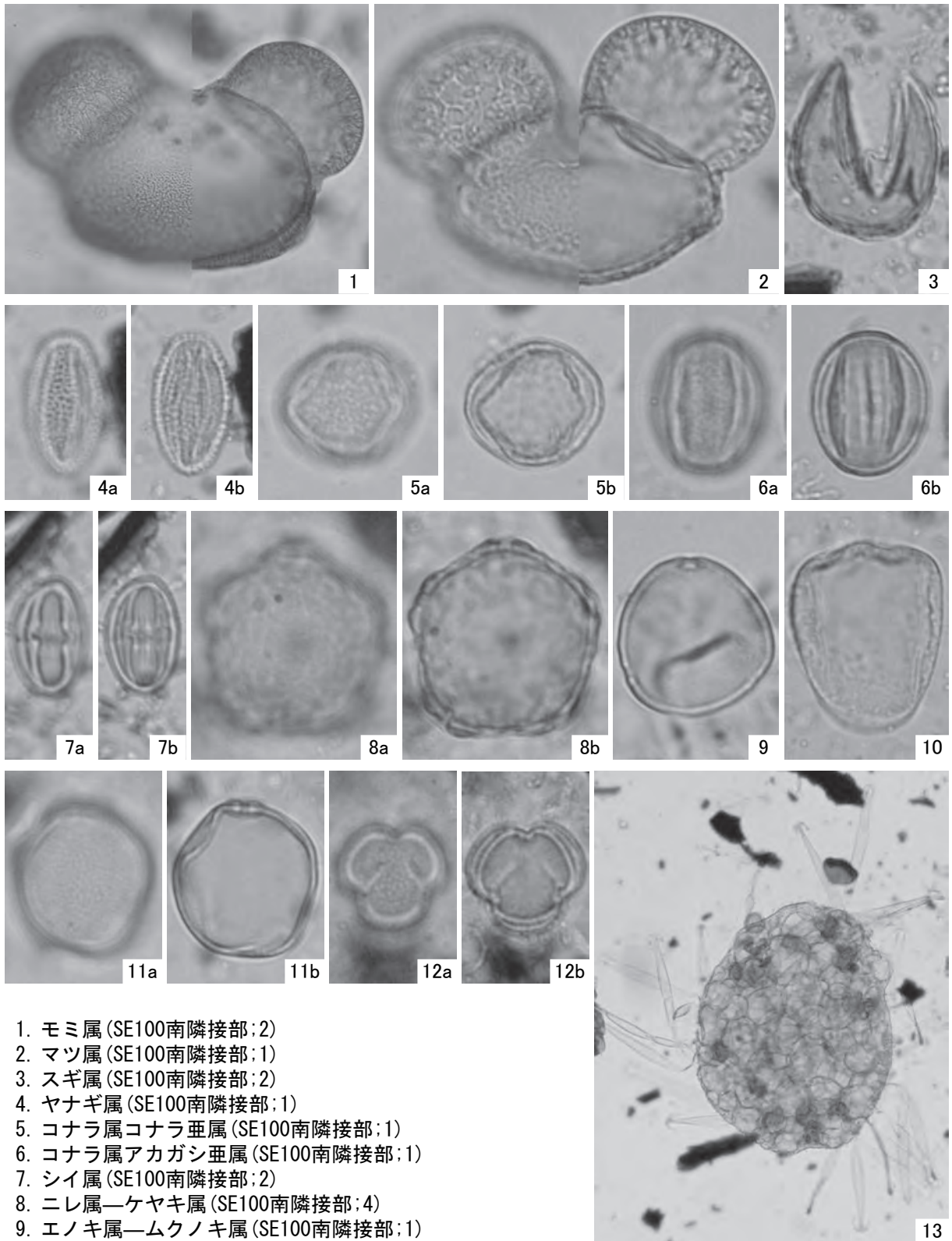
- 藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アクアコーラル企画,155p.
- 林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 飛田範夫,2002,日本庭園の植栽史.京都大学学術出版会,435p.
- Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.
- Hustedt, F., 1937-1938, Systematische unt ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.
- Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.
- Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊藤良永・堀内誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.日本珪藻学誌,6,23-44.
- 角野康郎,1994,日本水草図鑑.文一総合出版,178p.
- 笠原安夫,1982,鳥浜貝塚の植物種実の検出とエゴマ・シソ種実タール状塊について.鳥浜貝塚1980年度発掘調査概報・研究の成果－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査2－,福井県教育委員会,65-87.
- 勝山輝男,2015,日本のスゲ増補改訂(ネイチャーガイド).文一総合出版,392p.
- 小林弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲保・長田啓五,2006,小林弘珪藻図鑑.第1巻,(株)内田老鶴圃,531p.
- 小杉正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用.第四紀研究,27,1-20.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1985, Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica, vol. 9,p.250.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2 (1) : 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (2) : 596p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (3) : 576p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot H., 1991a, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (4) : 437p.
- Lange-Bertalot, H.,2000,ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA: Annotated diatom micrographs. Witkowski, A., Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 pls. 4504 figs, 925 pgs.

- 三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011,日本産花粉図鑑.北海道大学出版会,824p.
- 中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑(2010年改訂版).東北大学出版会,678p.
- 新田みゆき,2001,シソとエゴマの分化と多様性.栽培植物の自然史-野生植物と人類の共進化-,山口裕文・島本義也編,北海道大学図書刊行会,165-175.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p.
[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 佐藤敏也,1988,弥生のイネ.弥生文化の研究2生業,金関 怨・佐原 真編,雄山閣,97-111.
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- 島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実-形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種-.誠文堂新光社,272p.
- 田中正昭,2002,日本淡水産動・植物プランクトン図鑑.584p.
- 椿坂恭代,1993,アワ・ヒエ・キビの同定.吉崎昌一先生還暦記念論集「先史学と関連科学」,261-281.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. *Cymbella tumida* (Breb. ex Kuetz.) Van Heurck (SE100南隣接部;2)
2. *Encyonema silesiacum* (Bleisch in Rabenh.) D. G. Mann (SE100南隣接部;2)
3. *Eunotia praerupta* Ehrenberg (SE100南隣接部;2)
4. *Gomphonema truncatum* Ehrenberg (SE100南隣接部;2)
5. *Gyrosigma acuminatum* (Kuetz.) Rabenhorst (SE100南隣接部;2)
6. *Lemnicola hungarica* (Grun.) Round & Basson (SE100南隣接部;2)
7. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow (SE100南隣接部;2)
8. *Neidium affine* (Ehr.) Cleve (SE100南隣接部;2)
9. *Nitzschia amphibia* Grunow (SE100南隣接部;2)
10. *Sellaphora pupula* (Kuetz.) Mereschkowsky (SE100南隣接部;2)

図版2 花粉化石



1. モミ属 (SE100南隣接部:2)
2. マツ属 (SE100南隣接部:1)
3. スギ属 (SE100南隣接部:2)
4. ヤナギ属 (SE100南隣接部:1)
5. コナラ属コナラ亜属 (SE100南隣接部:1)
6. コナラ属アカガシ亜属 (SE100南隣接部:1)
7. シイ属 (SE100南隣接部:2)
8. ニレ属—ケヤキ属 (SE100南隣接部:4)
9. エノキ属—ムクノキ属 (SE100南隣接部:1)
10. カヤツリグサ科 (SE100南隣接部:5)
11. イネ科 (SE100南隣接部:2)
12. ヨモギ属 (SE100南隣接部:2)
13. アカウキクサ属 (SE100南隣接部:1)

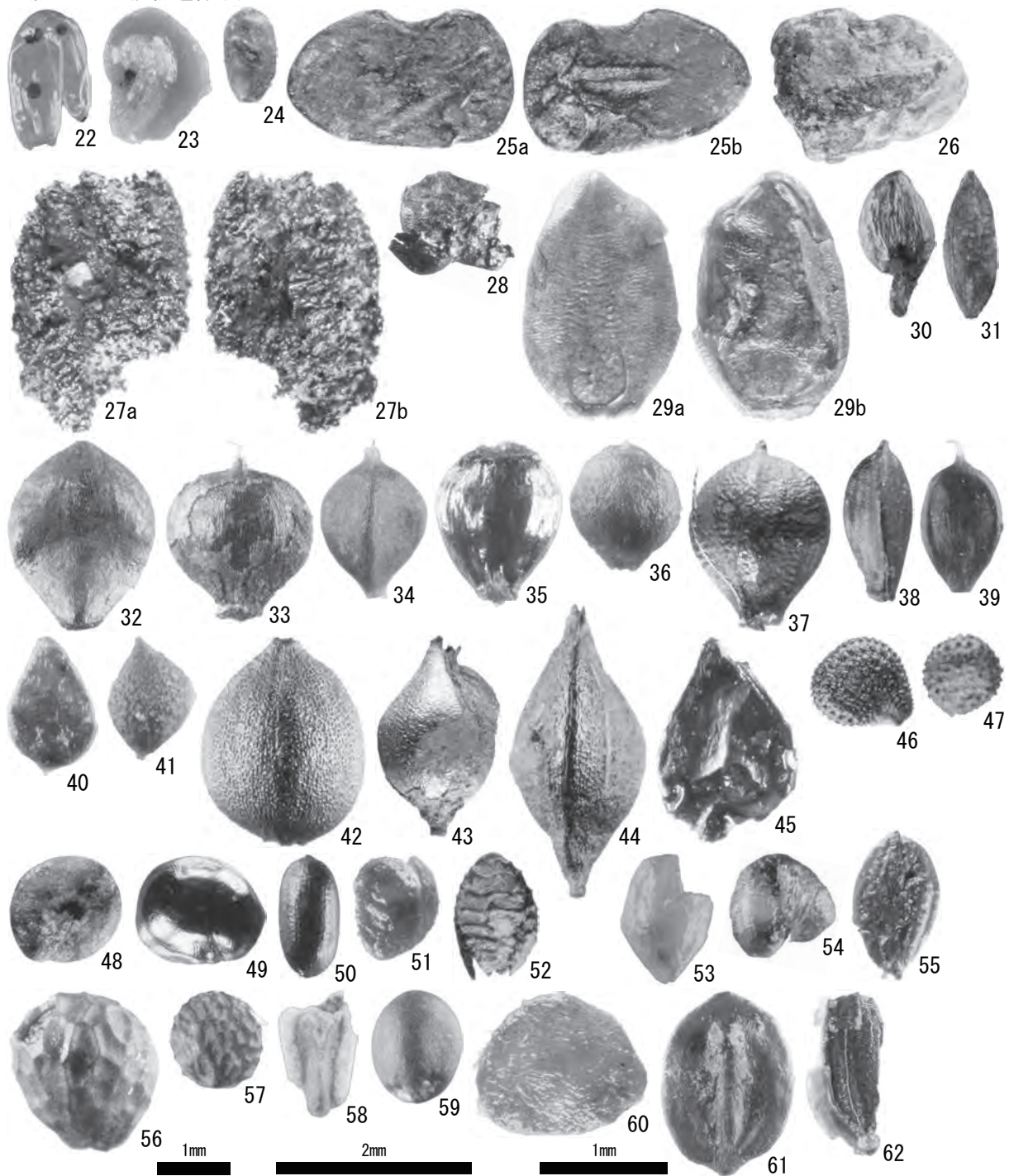
50 μ m 50 μ m 50 μ m
 (1) (2-12) (13)

図版3 大型植物遺体 (1)



- | | |
|------------------------------|----------------------------------|
| 1. クロマツ 葉(横断面) (SE100南隣接部;1) | 2. クロマツ 葉(横断面) (SE100南隣接部;2) |
| 3. マツ属複維管束亜属 短枝・葉(7D区 SG120) | 4. マツ属複維管束亜属 葉(頂部) (SE100南隣接部;2) |
| 5. マツ属複維管束亜属 球果(7D区 SG120) | 6. マツ属複維管束亜属 球果(食痕) (7D区 SG120) |
| 7. マツ属複維管束亜属 球果(7D区 SG120) | 8. マツ属複維管束亜属 種子(7D区 SG120) |
| 9. マツ属複維管束亜属 種子翼(7D区 SG120) | 10. ヒノキ 枝条・葉(7D区 SG120) |
| 11. ヒサカキ属 種子(SE100南隣接部;5) | 12. キイチゴ属 核(SE100南隣接部;6) |
| 13. アカメガシワ 種子(7D区 SG120) | 14. センダン 核(SE100南隣接部;1) |
| 15. イネ 粃(8C区 炭化米密集) | 16. イネ 果序(穂) (8C区 炭化米密集) |
| 17. イネ 玄米(8C区 炭化米密集) | 18. イネ 玄米(8C区 炭化米密集) |
| 19. イネ 粃・玄米(8C区 炭化米密集) | 20. ヒエ近似種 果実・穎果(8C区 炭化米密集) |
| 20. ヒエ近似種 果実・穎果(8C区 炭化米密集) | |

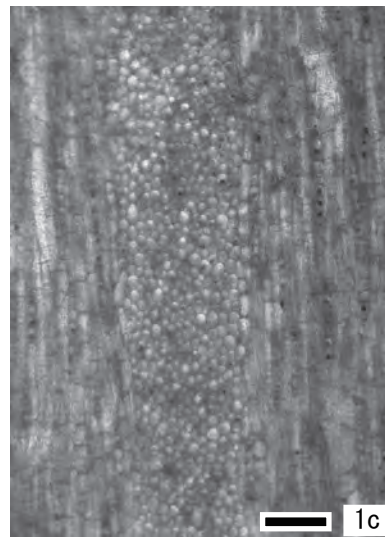
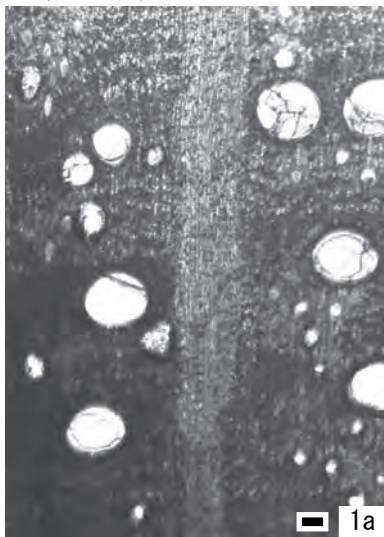
図版3 大型植物遺体 (2)



(29, 60, 62) (22-27, 30-37, 39-45, 48-52, 55-58, 61) (28, 38, 46, 47, 53, 54, 59)

- | | | |
|--------------------------------|------------------------------------|----------------------------------|
| 22. オモダカ科 種子 (SE100南隣接部:1) | 23. ヒルムシロ属 果実 (SE100南隣接部:6) | 24. コナギ近似種 種子 (8C区 炭化米密集) |
| 25. イボクサ 種子 (SE100南隣接部:5) | 26. ツユクサ 種子 (8C区 炭化米密集) | 27. コムギ 穎果 (SE100南隣接部:3) |
| 28. アワ 果実・穎果 (SE100南隣接部:3) | 29. エノコログサ属 果実 (7D区 SG120) | 30. イネ科 果実 (8C区 炭化米密集) |
| 31. イネ科 果実 (8C区 炭化米密集) | 32. アゼスゲ類A 果実 (SE100南隣接部:4) | 33. アゼスゲ類B 果実 (SE100南隣接部:5) |
| 34. スゲ属 果実 (SE100南隣接部:6) | 35. ハリイ属 (ヌマハリイ類) 果実 (SE100南隣接部:6) | 36. ハリイ属 (ハリイ類) 果実 (SE100南隣接部:6) |
| 37. イヌホタルイ近似種 果実 (SE100南隣接部:5) | 38. カヤツリグサ属 果実 (7D区 SG120) | 39. カヤツリグサ科 果実 (SE100南隣接部:4) |
| 40. ミズ属 果実 (SE100南隣接部:6) | 41. カラムシ属 果実 (SE100南隣接部:2) | 42. タニソバ近似種 果実 (SE100南隣接部:6) |
| 43. ヤナギタデ近似種 果実 (8C区 炭化米密集) | 44. ポントクタデ近似種 果実 (SE100南隣接部:6) | 45. タデ科 果実 (SE100南隣接部:6) |
| 46. スベリヒユ 種子 (7D区 SG120) | 47. ナデシコ科 種子 (SE100南隣接部:1) | 48. アカザ属 種子 (8C区 炭化米密集) |
| 49. ヒユ属 種子 (7D区 SG120) | 50. ミズオトギリ 種子 (SE100南隣接部:4) | 51. キジムシロ類 核 (SE100南隣接部:5) |
| 52. カタバミ属 種子 (SE100南隣接部:2) | 53. スミレ属 種子 (SE100南隣接部:6) | 54. ミズユキノシタ 種子 (SE100南隣接部:6) |
| 55. セリ科 果実 (SE100南隣接部:2) | 56. シソ属-イヌコウジュ属 果実 (SE100南隣接部:6) | 57. イヌコウジュ属 果実 (SE100南隣接部:3) |
| 58. シロネ属 果実 (SE100南隣接部:5) | 59. トウバナ属 果実 (SE100南隣接部:1) | 60. ナス属 種子 (7D区 SG120) |
| 61. オミナエシ属 果実 (SE100南隣接部:4) | 62. タカサブロウ 果実 (SE100南隣接部:1) | |

図版5 木材



1. コナラ亜属クヌギ節 (SE100南隣接部:6)

a:木口 b:柁目 c:板目
スケールは100 μ m

図 版

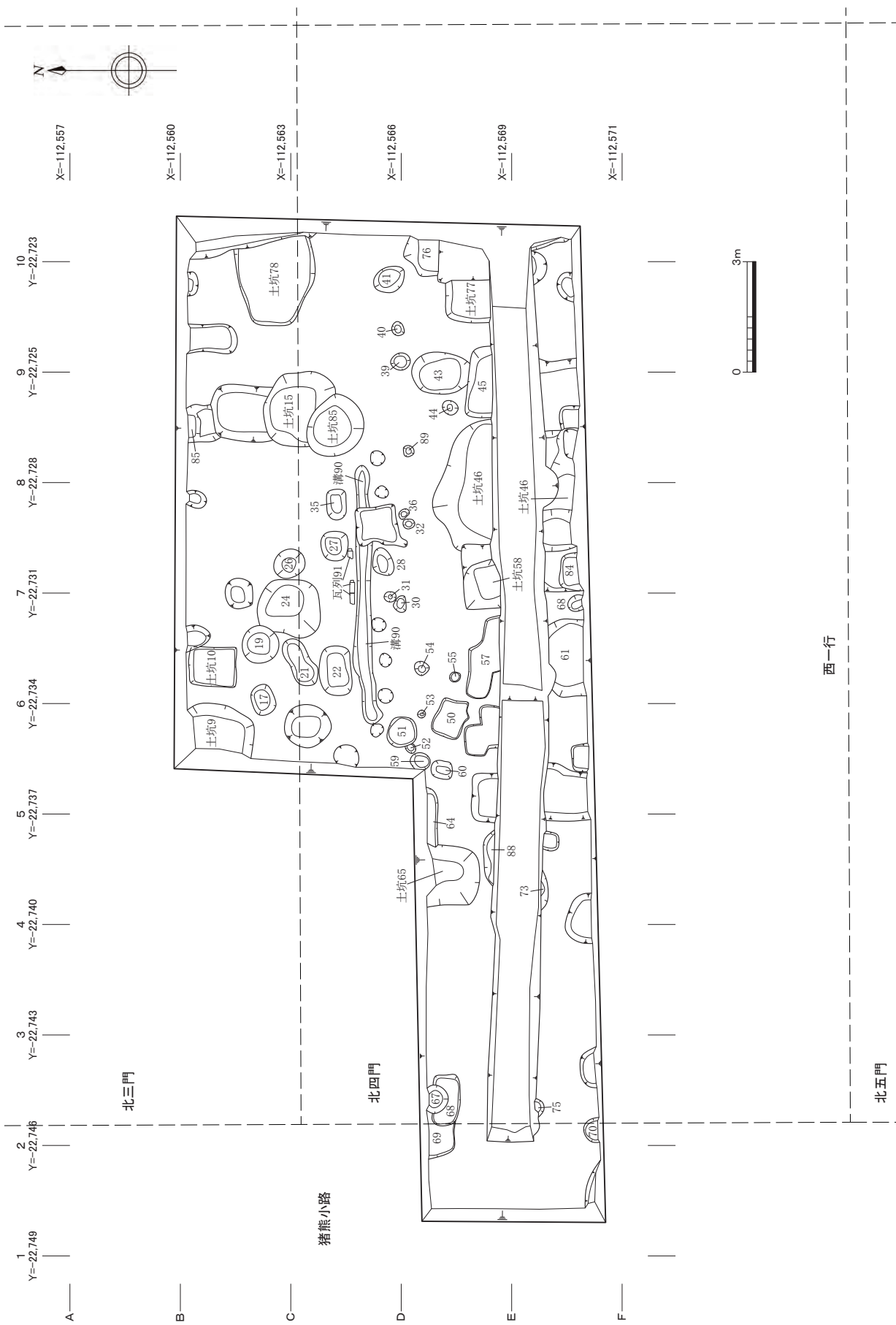
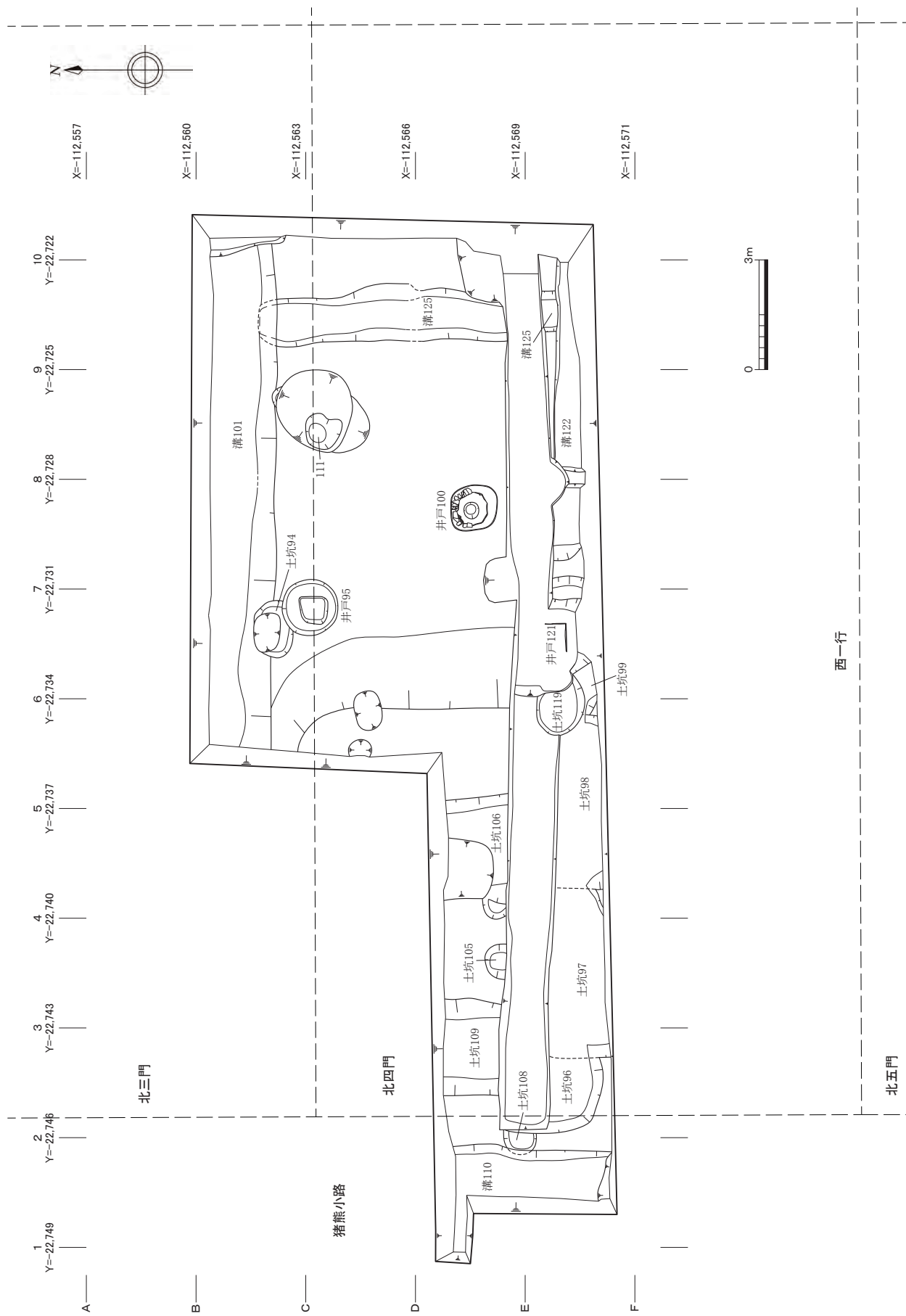


图 第1面平面图(1:150)

第1面平面图(1:150)



第2面平面図 (1 : 150)

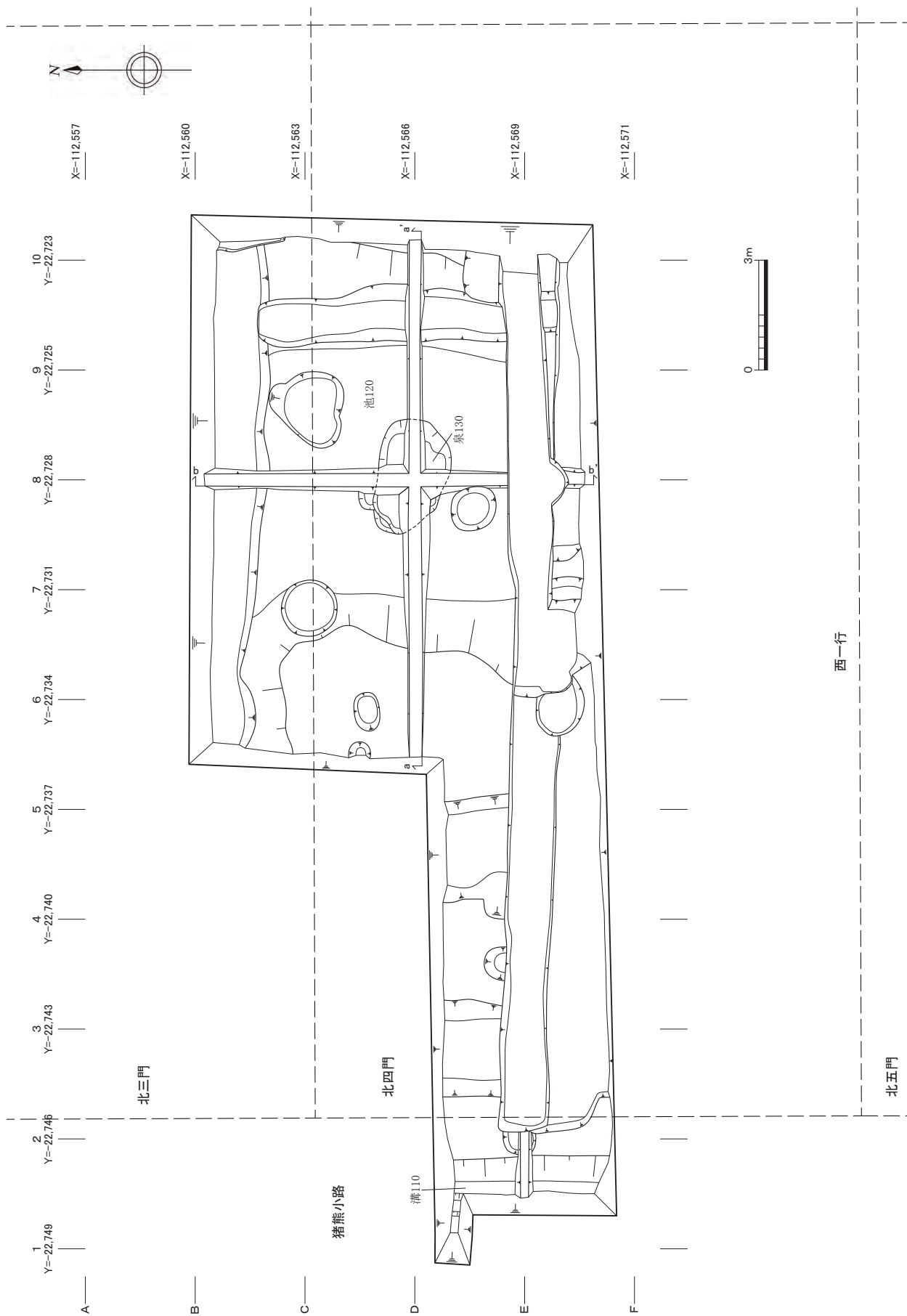


图 第3面平面图(1:150)

第3面平面图(1:150)

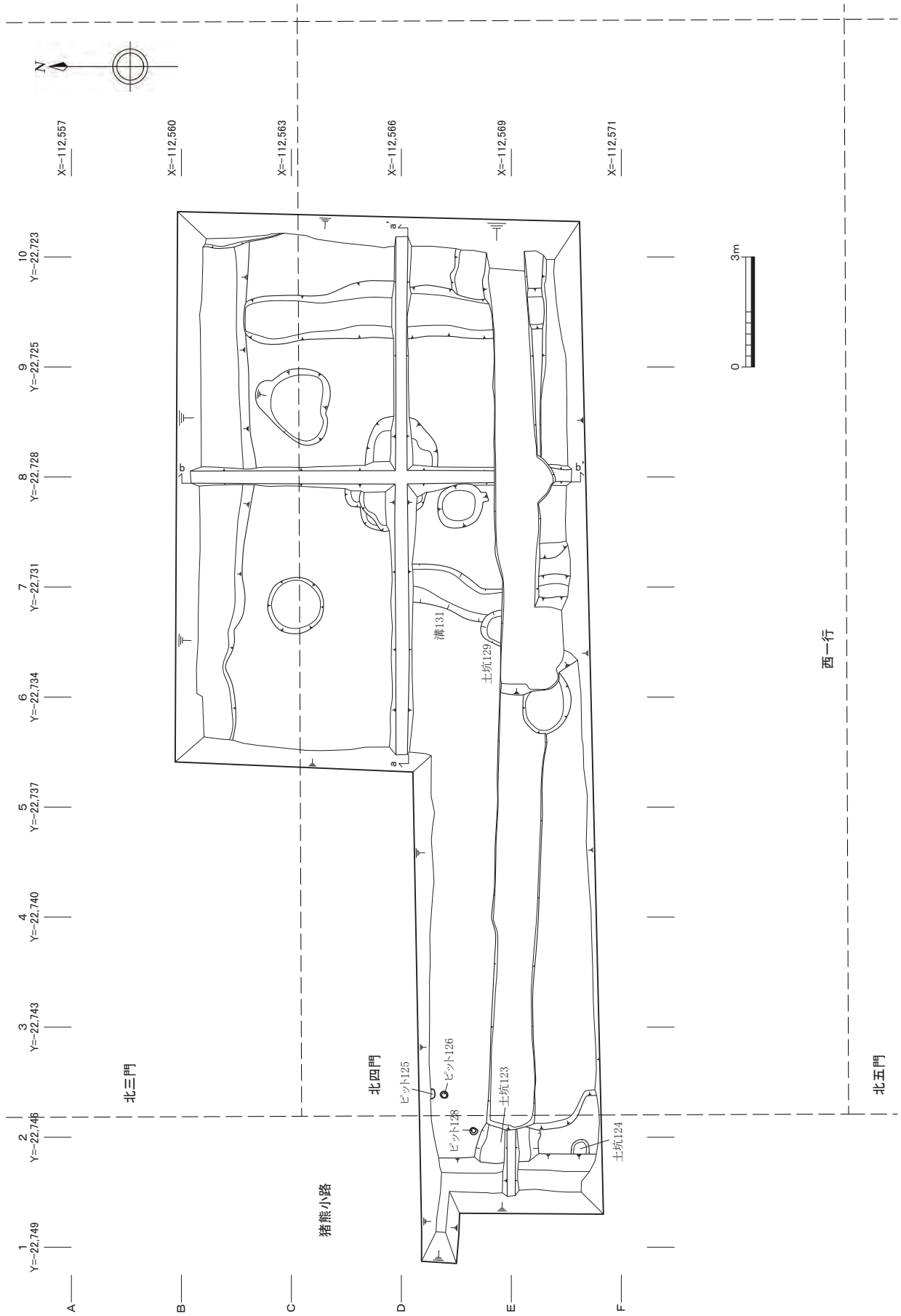
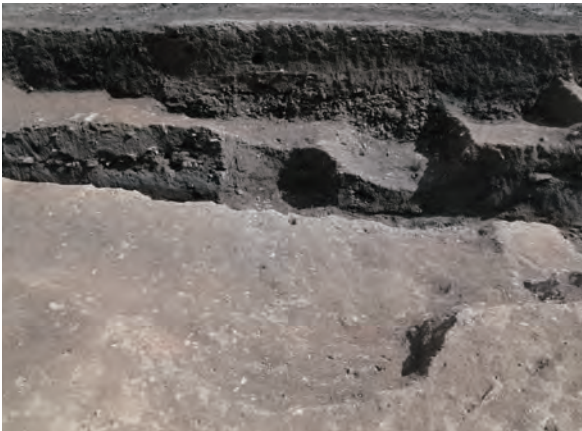


図 第4面平面図(1:150)

第4面平面図(1:150)



1. 第1面全景（東から）



2. 土坑46（北から）



4. 瓦列91（南から）



3. 土坑64、65、88（南から）



5. 溝90（東から）



1. 第2面全景1 (室町時代 東から)



2. 第2面全景2 (鎌倉時代 東から)



1. 井戸100 (東から)



2. 溝110上層 (南東から)



1. 溝101 (東から)



2. 溝101断面 (西から)



3. 溝122 (東から)



4. 溝122断面 (西から)



1. 溝125 (南から)



2. 溝125断面 (南から)



1. 井戸95 (西から)



2. 井戸121 (北から)



1. 第3面全景（東から）



2. 池120（南から）



1. 泉130（南から）



2. 泉130東西セクション断面（南から）



3. 泉130南北セクション断面（西から）



1. 東西セクション西断面（南から）



2. 東西セクション東断面（細部 南から）



3. 東西セクション東断面（東端部 南から）



1. 南北セクション南断面（西から）



2. 南北セクション北断面（西から）



1. 溝110下層（南から）



2. 溝110セクション断面（南から）



3. 溝110断面（北壁 南東から）



1. 出土遺物 1 (古式土師器)



2. 出土遺物 2 (平安時代)



1. 出土遺物 3 (4層出土土師器)



2. 出土遺物 4 (池120東盛土、泉130、4層)



1. 出土遺物5 (溝110下層)



2. 出土遺物6 (溝125)



1. 出土遺物7 (室町時代)



2. 出土遺物8 (平安時代軒瓦1)



出土遺物9（平安時代軒瓦2）



出土遺物10（鎌倉時代軒瓦、白磁、金属製品）

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうはちじょうにほうごちょうあとはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平安京左京八条二坊五町跡発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	大西晃靖 野地ますみ 松元美由紀							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2019年8月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしみなみく 京都市南区 いのくまとおりはちじょうあが 猪熊通八条上 るかいこうじちよう ル戒光寺町185 どうくにしくじちよう 同区西九条 かいこうじちよう 戒光寺町13	26100	1	34度 59分 06.3秒	135度 45分 03.5秒	2019年 5月7日 ～ 2019年 6月21日	225㎡	建物建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城	古墳時代		古式土師器		<ul style="list-style-type: none"> ・平安時代末～鎌倉時代初頭の園池、構跡を検出した。出土遺物の年代観から、平重盛の邸宅である「小松殿」に関連する遺構の可能性が高い。 ・鎌倉時代～室町時代の溝、井戸を検出した。現在、泉涌寺塔頭寺院として泉涌寺山内町に所在する戒光寺は、当初調査地周辺に創建されたと伝えられる。今回検出した遺構は、調査地周辺に所在していた時期の戒光寺に関する可能性がある。 ・江戸時代後半の遺構面を検出した。区画に関する可能性のある溝や瓦列、廃棄土坑を検出した。 		
		平安時代	溝 土坑	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、白磁				
		平安時代末～ 鎌倉時代	溝 園池	土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦器、瓦				
		鎌倉～ 室町時代	溝 井戸	土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦器、瓦質土器、焼締陶器、瓦、金属製品				
		江戸時代以降	耕作溝 ピット 土坑	施釉陶器、染付、瓦				

平安京左京八条二坊五町跡 発掘調査報告書

発行日 2019年8月30日

株式会社 文化財サービス
編集 〒612-8372 京都市伏見区北端町58
TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社
印刷 〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る
TEL 075-256-0961